
フレイヤ・マッキノンと平穏な日々

Dombom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フレイヤ・マッキノンと平穏な日々

【Nコード】

N3521X

【作者名】

Dombom

【あらすじ】

ベッドの上でハリーポッターを読んでいた俺は、気が付いたら滅ぼされたはずのマッキノン家の忘れられた最後の生き残り、フレイヤ・マッキノンになっていた。日本の漫画の世界に転生したと勘違いした俺は魔法でドラゴンボールの技を再現することばかり気を取られ、イギリスに転生した意味を忘れていたのだった。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

「行け！ネビル！やっちまえ！よしっよっし！キター！ナギニ、お辞儀の人ざまあwww」

俺はベッドに寝そべりながら読みまくってボロボロになった「死の秘宝（下）」を傍らに置く。

目を閉じればありありと小説のシーンが浮かぶ。俺はどっちかというと映画版は好きじゃない。なんか自分の妄想とキャラクターが違いすぎると見たくなくなるんだよねー。スネイプ先生は花丸だけどもーデー先生てめーはダメだ。

パタンと本を閉じ、ベッドから手を延ばして本棚に「死の秘宝」を仕舞おうとする俺。次はドラゴンボールだなと考えていた俺の手からハリーポッター最終刊が滑り落ちた。

「やばっ！」と落ちていく本を取ろうとした俺はベッドから落ちた。

ポフツと鈍い音を鳴らし俺はベッドの上に落ちる。

「？ベッド？」

俺はベッドから落ちた。けどベッドに落ちる？おかしくね？

辺りをキョロキョロ見渡すが…

「何処だよここ…」

さっきまでいたはずの俺の部屋は消え去り、俺は埃っぽい部屋に居た。

「…いや、ないない。無いわー」

とりあえずほっぺをつねる俺。俺のほっぺって案外モチモチなのな。知らなかったわー

「いひゃい」

はい、痛覚の存在を確認。

俺はベッドから降りた。床板が軋む。

「っていうか視線低くね？手小さくね？」

じつと手を見る俺は顔とか触ってみる。

「縮んどる……」

知らない天井で縮んで……

「1・これはリアルな夢である

2・黒の組織の取引に巻き込まれようわからん薬で縮んだ

3・スタンド攻撃を受けた

4・転生物の世界に飛ばされた

5・高度などつきりである

6・そもそも俺という存在はこの身体の子供の妄想である」

……わけがわからないよ助けてドラえもん。

「とにかくここがどこだか知らんが俺は家にかえる！E・T・みたいに「おうちかえる」してやるぞー！」

とりあえず現在地の確認と移動手段の確保だな。とりあえず誰かに見つから無いようにここから逃げなければ。

こちらスネーク。ミッションを開始する。

決意を固めた時、急にドアが開き、貧相な格好のガキが現れた。

ガキはこちらを見ているようだが大丈夫だ。メタルギアの警備の目は節穴だ。俺は冷静に本棚の陰に隠れる。

「……何してんだ？」

駄目でした。

ガキに連れられ階段を下りる俺。下の階は広めの部屋になってて食器とかが並べられた長テーブルが二つ。そこに十数人のガキが座ってナイフとフォークをカチャカチャさせている。フロアには数人の大人がいて、シチュウ的なのが入った鍋を載せたカートを引いたり、席を立とうとする子供を留めようとしていた。

「……なんぞこれ」

呆気にとられる俺と俺の手を引くガキに白髪の苦勞人っぽい老婆さんが近づいてきた。

「あら、ダン。フレイを連れて来てくれたのね。フレイ、時間は守らなくちゃいけないわよ?」

老婆さんの話によるとガキはダン。俺はフレイと言っらしい。

「前向きに検討致します。」

「どこでそんな言葉を覚えたの? まあ良いわ。座りなさい。」

「はあ…」

よくわからん内に座らされる俺。ダン少年は隣だ。どうやら今から飯らしい。手も洗わずに飯を食うのか? 日本人の俺には理解出来ませんな。

俺は老婆さんに声をかける。

「コマンダー! 飯の前に手洗いとうがいをする許可を下さい。」

老婆さんは珍しいものを見るような目をして

「ええ、そこを出て左よ軍曹。2分以内に済ませなさい。」

こやつ…出来る!

「Sir, yes. Sir!」

トコトコとトイレに駆ける俺。キュツと蛇口を捻り、軽く手を水洗いし、石鹸を取ろうと上を見た俺の前には外人の女の子が居た。激しく動揺する俺。目の前の子は石鹸を握っていた。

「…なんだ鏡か。」

手洗いうがいを済ませ、逃げるように席に着く。

ちようどいだきますの時だったのか、なんか皆お祈りしていたから空気の読める俺もそうする。主がどうのこうの言っていたが俺はそれどころじゃない。

「本を落としたと思ったらブロンド外人幼女になっていた。超スピードだとかそんなちゃちなもんじゃねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。」

内心テンパリまくりの俺はスプーンを落としてしまふ。するりと落ちていくスプーンにぞわりと背筋が寒くなる。本を落としたシーン

がダブる。これを落としたらもう家に帰れないような気がする。絶対に駄目だ。手を伸ばしても届かない。周りから音が消える。俺は思わず呟いた。

「止まれ。」

俺を嘲笑うかのように落ちて行くスプーンは急に大人しい子犬のように空中に静止する。スプーンの下に手を差し出した瞬間、スプーンは思い出したように落下を再開し、俺の手に収まった。

「…なんじゃこりゃ？」

俺はじつとスプーンを見つめる。不意に俺は視線を感じ目を上げるとダン少年も驚いた顔をしていた。少年と目が合う。

「…見た？」

少年は一瞬見てはいけないものを見たような顔をしたがゆっくり頷く。

「スプーン…止まってた？よな？」

少年は目を見開いたままこくこくと頷く。

「手品？超能力？どう思う？」

「わかんない。」

「…俺も分からん。」

気まずい空気が流れる。

「ダンよ…飯食って忘れよう」

「…そうだね」

具の少ないシチューはなんとも微妙な味だった。

おっすオラ、フレイ。本名はフレイヤ・なんたらかんたら・まきの。何故か日本人っぽい名前が入ってる多分イギリス人の11才。今やこのよう！…よの身体にも慣れた。あの本の日から結構経ったのだな…。現在地はイギリス。1991年でまだインターネットは無い。2ちゃんもない。っていうか日本の俺は存在してるのか？存在してたら6才か？そこらへんはよくわからん。調べてない。

俺の居た所は孤児院で、あれから仲良くなつたダンやその他はもう引き取られ、もういない。別れる時、ダンの野郎は泣いてやがったから幼女っぽくほっぺにチューして「強くなれ」って言ったら泣き止んで頷いた。引き取られた先でもよろしくやってくれるだろう。今の俺は期せずしてバイリンガルになつたので、出版社で翻訳の手伝いをしている。年齢上給料は払えないので、その分孤児院に寄附して貰っている。将来雇ってもらおうかな？

今はドラゴンボールとか漫画を訳してるけど擬音とか難しい。俺の感性はどっちかって言うとな日本人なので訳した後擦り合わせるのに苦労する。まあ、そんなこんなで出版社の皆には可愛がつて貰ってるし、たまに日本人のビジネスマンが来たときはリーマンのたどたどしい英語をからかった後、懐から出した「翻訳こんにやく（笑）」を食べて通訳するのが俺の持ちネタになっている。

イギリスで日本語が通じるのがうれしいのかリーマン達はゲーム機やら醤油やら扇子やらいろいろくれた。アメリカに行くというIBMのリーマンに、手紙とこつこつ貯めた金300ドル分をゲイツに届けて貰ったら、手書きの株券とひたすら感謝の書かれた長い手紙が届いた。ふふふせいぜい頑張つてゲイツ帝国を築くがよい。そんなこんなで俺はやたらとませた何故か日本語を読み書き出来る天才幼女として活躍していた。表向きは。

では俺の裏の顔とは？

あのスプーン事件から、俺にはどうやら氣を使う才能があると気づき、日夜鍛練してきた。それでは修業の成果を見せようではないか。夜、俺は孤児院を抜けだし、裏山にやって来ている。

精神を統一し、深呼吸をする。俺は自作の亀仙流の胴着を着て。

「かゝめゝはゝめゝ…波あー！」

突き出した両手から輝く波動が放たれ、目の前の岩盤に2メートルのクレータを穿つ。

「おおおお！気円斬！」

上に伸ばした手から輝く円盤が現れ、投げ付けた木を切り裂き、消

失する。

「舞空術！」

体が浮き上がり、木々の上まで上がった所で單車ぐらいの速度で飛び、一周して戻ってくる。

「ー！しんど！まだまだ鍛え方が足りないな。気円斬と舞空術は特に。後はまあ、あの技は夜には使えないし…よし、最後に…！？」

俺は不意に後ろに気配を感じ振り返る。ヤバイこの気配、俺より遙かに強い！振り返ったはいいものの、俺は動けない。しかし、動揺は禁物だ。いざとなったらアレがある。冷静になれ。

「…。」

風に茂みが揺れ、木の向こうの人影が動いた。

「太陽拳！」

俺を中心に閃光が辺りを照らす。額に指を当て瞬間移動する直前、俺は確かに茂みから人影が飛び出すを見た。

シュン！と言う音とともに部屋に戻ってきた俺はすぐに気配を消す。「ヤバイ。あれはヤバイ。フリーザ様かあれは。」

あの人影…殺気すらなく存在感だけで俺を釘付けにしゃがった。俺は気の放出は上手く無いが、何故か瞬間移動だけは一人前に出来る。気分的なものだが瞬間移動はめちやくちや速い舞空術って感じで爽快だ。癖になる。悟空がよく使うのも分かる。

ここはあの山からそんなに離れていないけれど、瞬間移動ならば分からないだろうし今は気配も消している。大、丈…夫
気を使い果たした俺はポスンと昔より良くなったベッドに倒れ込んだ。

「う…んっ」

カーテンの隙間から光が射す。眩しくて目を反らした俺はもう一眠りと思うがそうはいかない。出版社の手伝いに行かなくちゃならん。眠い目を擦った俺はぼーっと昨晚のことを思い出す。そういえばベツドに倒れ込んだんだっただ。でも…

「あれ？なんで布団着てんの？ちゃんと寝間着に着替えてるし。」

「お目ざめかね？」

「ほえ？」

ふとみると部屋の扉の前に長い髭、魔法使いっぽいローブと帽子、半月型の眼鏡から優しい目をした背の高いお爺さんが立っていた。暖かい雰囲気をしているが芯は強い。この気配は…

「すいませんすいません昨晚はほんの出来心で貴方様のオーラのものにびびって太陽拳なんてものを使っただけでして決して逆らおうなんて思っただけですすいませんどうぞおめこぼしを！」

俺はベッドからダイブ＆土下座からの謝罪ラッシュ。瞬間移動でも居場所がばれたのでもう謝り倒すしかない。

暫くの間の沈黙。

「頭を上げなさい。わしは君をどうしようという訳ではない。それよりも昨晚のあれらは本当に君じゃったのか？」

「はあ…まあ。っていうか何処から見えました？」

「なにやら奇声を発して岩盤を砕いた所からじゃ」

「…最初からじゃないですか。っていうか奇声って…かめはめ波エ

…」

シヨボンとする俺にお爺さんが感嘆したように声をかける。

「非常に驚くべきことじゃ。あれらは自分で考えたのかの？」

「いえ、漫画です。」

といって俺は最近訳したばかりのドラゴンボールを数冊お爺さんに渡す。イギリス人にはまだまだ浸透してないからな漫画は。

お爺さんは新しいおもちゃを与えられた子供のように喜々として読ん

で行く。

なんか残像が見えるほど早く読んでいるような気がするがきつときのせいだ。

「…ほうなるほどのう。これはなかなか、マグルの想像力もあなどれんのう」

漫画数冊を一瞬で読み終え、お爺さんは俺に漫画を手渡す。

「マグル？」

あれ…そういえばこの爺さん誰かに似てね？

「そう、マグル。非魔法族のことじゃ。おおっそういえばまだ名乗っ取らんかったの。わしの名はアルバス・ダンブルドア。ホグワーツ魔法学校の校長をやっとる。そしておぬしと同じ魔法使いじゃ。フレイヤ・マツキノン。」

やっぱリダンブルドアだったー！やべえよおれこの世界日本の漫画の世界だと思ってたよ！だからドラゴンボールで押せば行けると踏んでたのに…

「魔法使いじゃと言われて落ち込む子を見るのは初めてじゃの」

「はあ…すいません。私自分がサイヤ人の子孫だったら良いなって思ってたんで、気を使ってる気になってたのに魔法使いって身も蓋も無い種明かしをされてショックだっただけです。それに私の苗字ってマキノじゃなくてマツキノンだったんですね。もう日本と何の関係もないことがわかってアイデンティティがクライシスしそうです。っていうかマツキノンって滅んだんじゃ？」

「よくしつとるの。世間ではそうなっとなるな。おぬしの母はマツキノンの血を引くとはいえスクイブじゃったし、ああスクイブとは魔法の才に乏しい魔法使いじゃ。とにかく名家にスクイブはまずいというのでおぬしの母は隠されたのじゃ。わしはそのような差別はいかんと思うのじゃが災い転じて福となす。おぬしの母が秘匿されたお陰でおぬしが生き残ることが出来たという訳じゃ。」

「へー。なるほど。傍流だけどわたしもマツキノンだと。ところで何故マツキノンは滅んだんです？」

「おぬしがおる以上滅んではおらぬが」

「帰属意識が低いんです。」

「まあよからう。そもそも……」

まあ、お辞儀さんの話でした。まる。

「なるほど。じゃあ蛇面殺人鬼はけつの青いポッターのガキにしかかれて、きゅっとしてどカーンされたんですね分かります。」

「なかなか面白い例えをするの。」

まあ、それは良いとして本題だ。

「ところで魔法学校の校長先生だと特にこの時期忙しいんじゃないですか？なにゆえここへ？っていうかお腹空いたしそろそろ出版社に行かないといけないんですけど。」

「出版社の方は心配せずともよい。それより空腹はいかん。」

ダンブルドアが杖を一振りすると俺の部屋に高級そうなテーブルセツトが現れ、俺もいつの間にか着替えていた。テーブルの上には二人分の焼きたてのベーコンエッグとハニートーストが用意されている。おいがやべえ。食欲をそそる。

「魔法マジパネエ」

思わず飛びつきそうになるが今は寝起きだし、あの日から飯の前には手洗いうがいを心がけている。

「手洗いうがいも必要かの？」

「！心でも読みました？それとも既にリサーチ済み？」

「レディの心を覗くような真似はせんよ。勘じゃよ勘。」

ダンブルドアがくるくるつと杖を回すとどこからともなく水の帯が現れ手や顔や喉を洗った後、消えた。

「なにからなにまですいません。いただきます。」

「わしも頂くでしょうかの。」

ダンブルドアが食べるのをみて俺も食べる。おもわずうんまういと言いつうになつたが何とか堪える。お腹も空いてたし朝食はすぐに

無くなった。

「時にわしがここに来た理由じゃが、それは二つある。一つはこれじゃ。」

ダンブルドアの手には最初からそこにあったかのように封筒が握られていた。

「入学案内？ホグワーツ魔法魔術学校ですか。」

「左様。おぬしはもうすでにいにしへの魔法使いのように独自の方法で魔力を制御し扱うことに成功しておるし、ある意味大人よりも自立しておる。じゃから入学するかどうかはおぬし次第じゃ。ホグワーツは全寮制じゃからこの孤児院とは別ねばならぬ。じゃがホグワーツは良いところじゃよ。友達も出来るじゃろうし、それに……」

「ダンブルドア先生が校長ですしね。」

「これは一本取られたのう。」

俺は話を続けてくれと合図する。

「うむ。それにこれは二つ目のことにも関わるのじゃが、おぬしには魔法使いの常識と身の守り方を知ってほしいと思つての。先の時勢からしてマツキノ家の生き残りと言うだけでよく思わぬ者もあるやもしれん。」

「行きますよ。学校。行つたとしても別に今の俺の技を捨てる必要は無いんでしょ？そろそろこの孤児院に頼るのも気が引けてきましてしね。」

「そうか。それは畳重。おぬしの技術は特殊じゃが、魔法使いに新たな道を示すやもしれんのう。それに学校におつてもふくろう便を使えば出版社の手伝いもできるじゃろうて。」

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

「ふたつ目の理由じゃが…わしが来た表向き理由はこれじゃな。」
「表向き？」

「生徒になるかもしれん子に会いたいというのが本音じゃからじゃ。」

「トップが学校を留守にしていいます？」

「なかなか厳しいの。まあちよつとぐらいよかるうて。それでじゃ。理由を説明するぞ？」

「いつでもどうぞ。」

ダンブルドアはこれまたいつの間にか出したティーセットでお茶をすすっている。もう気にしない方がいいのかもしれない。この人にとって魔法は息をするようなものかもしれないな。

「おぬしは、傍流とはいえマッキノン家の最後の一人じゃ。じゃからマッキノン家の家財に対して相続権が発生しとるはずじゃ。しかし、おぬしの母はあまりにも巧妙に隠され、自身の出自も知らずマグルとして生活しておった。その間の記録は魔法省にも残っておらん。じゃからおぬしが本当にマッキノンの血を引く者が確かめねばならんかった。昨日の一件でおぬしは魔法使いとしての資質を十二分に備えているのは分かった。少なくともおぬしは魔法使いじゃから今日わしがあつても問題ないというわけじゃ。忘却術を使えば済むとはいえ魔法使いがマグルに接するのはできる限り避けねばならんしの。」

「なるほど。大体分かります。」

「つて言うか遺伝子診断すればいいんじゃない？ああ、この時代にはまだないのか？中途半端に過去だから判断狂うな！」

「で、具体的にどうやったら証明できるんです？」

「うむ。多くの魔法使いの家系に於いて言えることじゃが、その魔法使いの財産はそれ自体が相続権を持つものを判別することができ

るようになっておる。じゃから今の段階では誰もマツキノンの財産に触れることはできぬ。正統な後継者以外はな。」

「なるほど。じゃあ、その遺産の一部を使って判別するってことですか？普通の人ならつかめないカップかなんかを掴めるかどうかって感じに？」

「おおよそそういうことじゃが、カップではない。そもそもそのカップを持ってくる手段がないからのう。じゃから『来て』もらおう。おぬしなら呼べるはずじゃ。ちょっと驚くかもしれんが。」

「なにを呼ぶんです？」

しもべ妖精ですな分かります。

「屋敷しもべ妖精じゃ。名は『ウォーディ』。」

「しもべ妖精ってなんですか？」

「そうじゃったな。しもべ妖精とはその家に仕え、その家とともにあるもの・・・かの？百聞は一見にしかず。さっそく呼んでみるがよい。」

「かつこつけて呼んだ方がいいですか？呪文とかは？」

「普通は名前だけでも来るもんじゃ。」

「じゃあ大見得切りますから失敗しても笑わないでくださいね？」

「うむ。よからう。」

えーしもべ妖精ってドビーとかウィンキーとかクリーチャーじゃん。しかもマツキノンが滅んでからずっと放つとかれてるんでしょ？ボロボロしわしわの頭が逝ってるが来たらどうしよう。まあいいけどさ。

「出でよ！我がしもべ、マツキノンとともに歩むものよ！その名は『ウォーディ』！我が前に姿を現せ！」

バチン！

「しもべ妖精『ウォーディ』参上しました。何なりとご命令を。我が主。」

「なんかノリのいい奴来ちゃったー！！」

示し合わせたようにうまくいってしまって、逆に驚く俺。ダンブル

ドアは笑っているし、『ウォーディ』に至っては小さめのだがパリッとした執事服にナプキンを二の腕にかけ、マジでもべ妖精？つてぐらい美形だ。

「・・・俺が今のマツキノン当主ってことでおk？」

「左様にございます。ご主人様。」

「ダンブルドア先生。なんか良く分からんとです。」

予想以上に『ウォーディ』の登場にビビる俺は、ダンブルドアに話を振る。

「うむ。とにかくこれでおぬしはマツキノン家の正当な後継者ということが証明されたわけじゃ。わしも立会人として鼻が高いぞ？」

「ああ、先生立会人だったんですね。てつきり野次馬かと。ついていかそれ以上鼻が高いとピノキオになりますよ。」

「ひどい言いようじゃ。まあ、これで今後のことはめどが立った。

フレイよ。必要な事項は封筒に記載しておる。後のことはウォーディに聞くとよい。そうじゃな。ウォーディ？」

「もちろんでございます。」

「じゃあ、急じゃがわしはもう次の生徒のところへ行かねばならぬ。わしからはもう話しておるが、フレイヤよ。お世話になった人にきちんといさつして回るんじゃよ？」

「わかりました。ありがとうございました。また学校で。」

「そうじゃの。また学校での。」

ダンブルドアが手を振り、シルシルツツとマントに隠れたかと思つと、私の部屋にはもう彼が訪ねてきた痕跡はなくなっていた。

「静かな嵐のようなひとだな。」

「そうでございますね。」

おれは新しい執事の『ウォーディ』を見た。

「財産云々はとりあえずあいさつ回りをしてからでいい？」

「かしこまりました。」

「っていうかさ、ぼつと出の俺が財産かつさらっていくの嫌だとは思わないの？」

「いえ、とんでもない！ご主人様は正当なマツキノンの後継者にあらせられます。恐れ多くも私のような立場の者が口をはさむなどあり得ません。」

「でもさー前の主人とかあるじゃん。なんか前の主人よりふがいないーとか、あの品物はマツキノン家に代々伝わるーとかをさ、私みたいなマツキノンの帰属意識が低い奴がもらっちゃっていい訳？」

「たしかに、前のご主人様は素晴らしいお方でしたが、先代様はあなたのこともお気にかけていらっしやいましたよ？」

「ほえ？」

「あの忌々しい死喰い人を相手に奮戦なさったご主人様が最後におかけになった魔法、それがあなた様を守ることになったのです。」

「どうということなの？」

「先代様が最後におかけになった魔法はそれはそれは強力なもので、あの闇の帝王でさえ破ることができなかったものでございます。その魔法とは『追跡阻害呪文』。単純ですが、強力な呪文です。その呪文の効力で、死喰い人にはあなた様の存在を認識することすらできないでしょう。逆に目の前にいるのにあなた様を認識できない者は死喰い人または闇の帝王に与するものということです。もしそのような存在が現れた場合、いかなる場合でもお逃げ下さい。マツキノン家の当主たるに値する方はあなた様以外おられませんから。」

「あー。おっけー大体分かった。でもそれは無理なんだよねー。まあ後で話すけどさ。」

挨拶か…まさか俺がここを出ていくことになるとはな。ぐるっと部屋を一周見渡す。

思えばいろいろあったなー。今の世界におっこちてきたり、ダンを殴ったり、ホームシックで泣いたり、ダンを蹴ったり、内心楽しかったけどいやいやかくれんぼしたり、ダンを一本背負いしたり、寄付が滞って孤児院がヤバくなったり、ダンを逆さづりにしたり、出版社に自分を売り込んだり、ダンに鞭打ちしたり、ゲイツに手紙を書いたり、ダンを振ったり、漫画を訳したり、ダンにほっぺチュー

してやったり。何というツン増し増しのドM仕様のツンデレ。まあ、いろいろあつたな。最近話し方が女の子っぽくなってきたし、昔の人格もだいぶ今の体に引きずられてるな。

ぐしぐしと手櫛で髪をすいていたら、どこからともなくウォーディが櫛やら着替えやらを持ってきた。やんわりと「そんなぼろい服着るな」と言われ、なんか上等の服に着替えさせられ、髪をセツトされた。だるかったので、着替えた後椅子に座って寝てたら「終わりましたよ」と、起こされた。鏡を渡されたから見たら、

「誰ですかこれ？」

「ご主人様でございますよ。」

とウォーディが胸を張っていた。もう鏡見るの怖いわ。最初の日から俺は鏡に呪われてるに違いない。

「ところでさー私って前の当主とどんな関係なの？」

「姪の娘でございますね。」

「ウホッ超他人ww」

「それでもきちんとマツキノ家の血統をついでおいですよ。前当主のお方様とあなた様のお母様は従姉妹同士であらせられますしね。」

「もうわけわからん。どうせ家系図とかあるんでしょ？明日視るわ。俺今日あいさつ回しするし。」

「かしこまりました。私は一足先に屋敷に戻ってお迎えの準備をいたします。お迎えは明日の朝でよろしいですか？ご主人様。」

「おっけー。あ、でもご主人様っていうのは勘弁してくれ。なんか合わん。フレイでいいよフレイで。若しくはおぜうさま。」

「分かりましたお嬢様。それではごきげんよう。」

バチン！とウォーディは去っていった。アイツふつーにスルーしやがって。

まあいいや、あいさつ回りに行こう。ポッター家のハリーちゃんよりはましだ。今頃ダンブルドアに全力でスパム食らってるだろうかな。全力全開のサービス拒否攻撃受けてるからね。

ダンブルドア先生の根回しが良かったのか、施設長のお婆さんは「両家の御嬢さんをこんなところに閉じ込めて悪かった。でもここにいたことは忘れないでね。あの弁護士さんの言うことをよく聞くのよ。」って言うていた。弁護士に扮していた先生、ちよつとやりすぎです。ちよつと引き止める気ぐらい残しておいてもいいじゃないですか。

仕方がないので、「いらない分の財産は処分して寄付する。ここにいたことは何か記憶に染みついてて脳みそ漂泊しても忘れない。」って言ったら泣いて喜ばれた。って言うか大丈夫なんですかこの施設。大丈夫なの俺？ヤンデレの女友達に形見のドレス破られたり、成りすましされたりしない？

出版社の方もそんな感じだった。「いやー天才だと思ってたけど実は両家のお嬢様だったなんて。あ、取材してもいい？今時珍しいシンデレラストーリーだからね。」って言われたので、「翻訳の仕事があつたら実家に送ってくれたら学校でやります。後、才能と生れは関係ないと思います。取材の方は小説として発表するならオツケーです。」って言つといた。なんか小説だと嘘くさくて売れないって言っていた。確かに。

「うぼー」と服を脱ぎ棄てベッドに倒れこむ俺。今向こうに帰った変な夢だつて笑うんだろうな。ふと見ると白い指に金糸の髪が絡み付いていた。引き返すなら今しかない。でも、どうすればいいというのだ。これから俺は私として過ごし、いつか私は俺であつたことを忘れ、マツキノ家再興のためにギシアンするのだろうか？その時の俺は……おれは……

フレイヤ・マッキノンは賢者の石を知らない？

「…なんだ。夢か。良かった。」

ベッドから落ちた俺はちよつと気絶していたようだ。よつと、と体を起こし、落ちていた本を拾おうとする。が、金縛りにあつたように身体が動かない。

まさか、こつちが夢？

「嫌な夢見た。胡蝶の夢か。」

俺は確かに現実には居たんだ。勝手に夢の世界の住人にするな。

起きると、昨日の夜脱ぎ散らかした服は消え、ウォーディが服を用意して控えていた。

「ここって人間界だね？昨日からムンドウス・マギトウスになったのかな。」

「おはようございます。お嬢様。ここはマグルの住む地にございます。」

「マグルの地に執事妖精は居ないよ。」

のそのそと起きだし、わざとゆっくり着替える。このぼろい孤児院ともおさらばか…

「ふと思っただけどさ…」

「何でしょうお嬢様。」

「妖精でもこつちで魔法を使うのってまずくないの？」

「我々しもべ妖精は『人たるもの』ではなく魔法生物として扱われますので、法規の埒外でございます。」

「今の私は？裏山でバンバン使ってたけど。」

「魔法省が探知出来るのは魔法の発動地点のみでございます。故に、お嬢様がもし杖をお持ちでしたら、私が魔法を使い、逃げればお嬢様が冤罪に問われる可能性もございます。ですが今のお嬢様は杖も持たず、魔法教育も受けておられないので魔法省の監視は事実

上ごさいません。そのような状態で魔法を使える者などほとんどおりません故人員の無駄でございます。」

「なるほどね。」

未成年の魔法使いと言ったっていっぱいいるし、素養のあるやつを対象にすると赤ん坊まで見ないといけない。そんなのに割く金も人も無駄だつてことか。リリー・ポッター、ああエヴァンズか？とかやグレンジャーがカップをネズミに変えても捕まらなかったわけだ。まあ、教育無しに意識して魔法を使うのは、訓練無しでいきなりMS動かすようなものって感じか。よほどの天才かニュータイプじゃないかや無理だし、無意識の魔法、ハリーの髪が伸びたりするのまで監視してたら切りがないって感じが。

「じゃあ暫く俺の技は睨まれない程度には使い放題ってことだな。

でも来年からはどうなんだ？監視が付くんなら家で練習出来んぞ？」

「マツキノン家に関わらず、魔法使いの家庭は魔法省の監視対象外でございますし、我が家には訓練場もあります故問題無いかと。」

「ふーん。じゃあさ、私皆に挨拶してくるし、荷物運んで家の前で待つててよ。どうせウォーデイがいても問題無いような秘境にあるんでしょ？」

「確かに大丈夫でございますが、お嬢様はどうやって来られるの？」

まあ、心配するのも当然か。

「ウォーデイの気は覚えたから地球の裏側でも瞬間移動出来るよ。」
ウォーデイの驚く顔初めて見た。こいついつもポーカーフェイスだしな。

「瞬間移動でございますか？姿現しのようなものでしょうか？」

「効果はね。原理は違うと思う。執事妖精はどうやって転移するの？」

「どうやってと言われましても……」

まあ、魔法はどっちかって言うとなりの方が大事だしな。

「感覚的なものでいいよ。」

そうですね…とウォーディは両腕を伸ばした。

「右手に私がいて左手の場所に行きたい時、」

ウォーディは両手の平を合わせる。なんか錬成されそう。

「こう言う感じでしょうか？」

「やっぱりね。」

俺は原作の姿現し関連の妄想については十分だ。

「これは仮説なんだけど、」

と俺は説明に入る。

「A B C D Eと連続した土地があるとして、今自分がAにいて、行きたい先がEだとする。そうすると妖精は空間を歪めてAとEを直接繋いでA Eにする。姿現しはAとEの間にワームホール、つまり抜け穴になるFを作ってA B C D EをA F Eにする。そして私の瞬間移動は単純にA B C D Eを素早く移動するか、間の空間B C Dを圧縮してA「B C D」Eにするって感じかな？」

ウォーディは真剣な顔をして聞いている。こいつ人間より賢いんじゃないか？

「素晴らしい御慧眼にございます。魔法使いは我々の魔法を見下しこそすれ、考察するなどございませんでした。この理論は革新的なものです。記録しておかねば。」

「慧眼なんて大層なもんじゃないよ。マグルの想像力に限りがないだけさ。記録なんて大層なもんじゃないよ。好きにするといいけどさ。」

ウォーディはさつとメモを用意し、すごい速度でメモっていく。どっから出したんだそれは？

「推測に過ぎないけど、それぞれの特徴を言うなら、妖精のは燃費は悪いけど邪魔されにくい。魔法使いのは燃費は良いけど、別の空間を作る以上「バラけ」とか妨害のリスクが高い。まあ、玄人好みだね。魔法使いは変態技術が好きみたいだ。私のは一番燃費が良いけど原始的だね。姿くらまし阻害では邪魔されないけど、多分結界の類は初歩的なものでも越えられないかな？力技で出来なくも無い

けど。ホグワーツで試してみないとね。」

ウォーディはメモを取りながら、私の髪をセットしていく。こいつ優秀過ぎね？

「ウォーディはさ、優秀だからしもべ妖精じゃなくて執事妖精って感じだよ。」

「身にあまる光栄にございます。」

出来ました。と言われて鏡を見ると、鏡の中には人形みたいな女の子。なんか完璧過ぎて萌えとか言うのが恐れ多い。

「なんで昨日から姫姫した格好ばっかなんだよ…趣味？」

俺はウォーディを軽く睨む。マッキノン家の金が入ったらジャケツトとジーパン買ってやる。

「お嬢様にはマッキノン家の御当主として恥ずかしく無いように振る舞って頂かなければなりません。」

「なにそれ怖い。」

「その口調ですよ。」

「オッサンにはなつても淑女にはならん！」

「なつて頂きますよ。」

ちよっ！ウォーディ怖い。でかい目で静かに見つめないで！

「それでは」と言つてウォーディは去つて行った。

部屋を出て静かな廊下を歩く。朝だし、小さい奴らはまだ寝てるか。黙って去るのは気が引けるが、あいつらの顔を見たら泣きそうだ。

階段を下り、施設長に挨拶をと思つていた俺はフリーズした。

施設の玄関前には「フレイ姉ちゃん今までありがとう」の横断幕。

その下には施設の大人やクソガキどもが並んで笑つていた。

マジかよ…と思つていたら、ガキの中からカラフルな物体を持った少女が走ってきた。この赤毛の歯抜けのそばかす元氣娘はアンだったか。

「お姉ちゃんホントにお姫様みたい！お金持ちになつても私達のことと忘れないでね！」

と言つて千羽鶴を渡してきた。施設長も歩いてきて、

「皆貴方の門出を祝いたいって3日で急いで作ったのよ。」

うおー！涙腺よ！耐えろ！アンの野郎はガキグループに戻って「せーの！」とか言ってる。上から来るぞ！気をつける！

「お姉ちゃん大好き！ありがとう！！」

「うばあー！」

ガキどものホーリーを喰らって崩れ落ちる俺。視覚センサーが洗浄液まみれで何も見えん。確かにガキの世話をしたり、出版社で貰ったお菓子をやったり、折り紙教えたりしたけどさ。それは大人として当然で感謝なんていらんし特筆すべきことでもない。それに別れのプレゼントが千羽鶴とか病気が私は。それを三日でやってくれましたとか朝早いの全員で見送りとか恥ずかしいだらちくしょー！お前ら皆好きだー！！

クソガキどもの中にルパンダイブする俺。もう服やらなにやらぐちゃぐちゃになるが気にしない。愛されとるなーちくしょー！

瞬間移動で現れた俺に「おおっ」とウォーディが驚く。ウォーディの気は独特なのですぐにわかった。「ボロボロですね」とお手入れセットと代えの服を出してきたけど今日はこのままで良いと言っておいた。っていうか青天井で着替えさせられるとかどういうプレイ？聞くところによるとマツキノンの家にはこっちの現金もそれなりにあるらしいから、ダイアゴン横町に行くついでに服を買おう。それにしても。

「後ろは森、ここは草原、前は湖、向こうには小島。ぽつんと大地に突き刺さるポスト。マツキノ亭はいずこ？」

回りはポスト以外の人工物はなんにもない。大自然そのまま。

どうすんのかと思ってたら、ウォーディが前に進み出て両手を上げた。

「新たな正統な御主人をお連れした。跳ね橋を下ろし開門せよ！」

跳ね橋？開門？なんじゃそりゃ？と俺はウォーディを痛い子を見るような目で見たが、その認識はすぐに改めなければいけなかった。

一瞬湖の上を一迅の風が抜けたと思うと、目の前の空気が揺らぎ、虚空から戦車でも通れそうな頑丈な跳ね橋が降りてきた。

ウォーディが「さあ、どうぞ。お帰りなさいませ。」とか言うから反射的に「ただいま」と言っただけで跳ね橋に足を踏み出した俺は呆気に取られた。

さっきまであった湖は消え、目の前には堀に囲まれた立派な屋敷と、うか城が現れていた。

「……」

俺は一步下がって跳ね橋から足を離す。

すると目の前にはさっきの湖。

一步進んで跳ね橋に足をかける。目の前には

「……城じゃん。」

「城でございます。」

「お帰りなさいませ。」

「ただいま。」

とは言ったものの立ち尽くす俺。心配したのかウォーディが俺を見て聞いてくる。

「どうかなさいましたか。」

「いや、どうもこうもすさまじいものを継いじゃったなと思って。」

「ウェールズにこの城ありとまで言われたものでございますから。」

「……こんな城があるのにどうして滅んだマッキノン家。」

苦悶に顔を歪めるウォーディ。

「全てはトラバースの裏切りに気付けなかった私にあります。」

「どういうこと？」

「中でお話しします。私もお嬢様が昨晚死喰い人ともとの接触は避けられないと言う理由をお聞かせ頂きたいですから。」

「そういえばそうだったね。」

堀の上に架けられた跳ね橋を進み、城門をくぐるとよく手入れされた広い芝生を屋敷の入り口まで石畳が貫いていた。

石畳を歩いていると、芝生の上に鳥の陰が映り、何事かと思えば俺

の前に昼間なのに、美しい灰羽のワシミミズクが降りてきた。ウオーデイはミミズクを指して、

「ワシミミズクのアルキメデスでございます。お手紙や新聞はこのアルキメデスに御申し付け下さい。」

と、紹介した。アルキメデスは俺に一礼し、また飛んで行った。

「なんか準備万端って感じたな」

「前主がお亡くなりになってからお嬢様をお迎え致す日を待ち望んでいましたから。」

屋敷の石段を上ると、ドア両脇に佇むグリフオンの像が膝を折って頭を垂れ、ドアは自動で開いた。

城の中は吹き抜けで、半端なく広い。あちこちに派手過ぎないがしつかりとした装飾がなされ、荘厳な雰囲気醸し出している。

「デイズニーもビックリだな……」

「大広間が一つ。広間が三つ。食堂が一つ。浴場が二つ。寝室が10、控え付き書斎が3、お部屋が5、客室5、客間3、衣装部屋4、使用人用の部屋が5、使用人用食堂と浴室がそれぞれ1、その他宝物庫、書庫、薬剤庫等が10。梟小屋、厩、練兵場、プールを備え、地上5階、地下1階。屋敷しもべが3とその取り纏めをしています。私ウオーデイとなっております。こちらが目録でございます。」

目録で出来た広辞苑を渡される俺。なんか一品一品、一々解説されている。頭痛い。

「凄すぎてどこから突っ込んで良いのか分からん。とりあえず相続人が絶えたら相応しい人探してそいつにあげちゃった方が良いね。」

「戯れにでもそんなことを言わないで下さいませ。」

「本気だつて。これだけのものを埋もれさせるのはもったいないしね。もし私が結婚しなかったり子供のいないまま死んだら……そうねマグル生まれの魔法使いから相応しいのを見繕って相続させなさい。次こそ本当にマッキノンが滅びるかもしれないし、俺は……はあ……スッパリ子作りしますとは言え無いしな。」

「……承知致しました。御尊命とあらば。」

大広間に通された俺は適当にソファーに座り目録を見る。いいソファーだ。赤いビロードがいい味を出してる。

「ダイアゴン横町には昼飯を食べてから行こうと思うんだけど賄いとかあつたら分けてくれない？」

「賄いなど滅相もない！」

ウォーディはありえないと言う感じで答える。

「でも私昨日まで孤児院暮らしのビンボー人だったからね。いきなりおぜうさまとか言われてもねー。まあ、妖精の皆は優秀だから何か用意してくれてるんでしょ？」

「もちろんでございます。皆この日のために耐え忍んで来ましたから。」

屋敷しもべはドMぶつかだ。いつ来るとも知れぬ主の為に何年も待ってて、いざ来たときには諸手を挙げて歓迎する。

「ですよー。だからさ、今まで待たせた分もあるし皆で食卓を囲みたいんだよね。一人じゃ寂しいし。」

「そのようなことは…」

「じゃあ、フレイヤ・マツキノンが命じる。当家の屋敷しもべよ、我と昼食を共にせよ。」

ハリーさんは今頃まだ手紙からの逃避行をしているはずだ。今ダイアゴン横町に行っても会うこともあるまい。後は登校日まで城探検とか日本旅行とか大人しくしておき、組分けでハッフルパフに入る後は先代のありがたい魔法に頼って目立たないように蛇面殺人鬼がぬつころされるまでハリーさん等の活躍を見守っていればいい。

「承りました。」

「じゃあそういうことで。」

ウォーディは一礼した後、バチンツと消えたと思うと数秒で戻ってきた。俺は思わずソファーから落ちてしまった。

「早くね？っていうかウォーディの持ち場とか仕事とか無いの？」

「私の仕事は主の側に控えることなのです。」

「…さいですか。ところで他の子達の反応はどうだった？」

「皆、身にあまる光栄と感涙しておりました。しかし、当主たるもの我等を過剰に扱うのはお控え下さいませ。後、フレイヤ様にはもう少し当主に相応しい居住まい、言葉遣いをなさるようお願い致します。」

「退かぬ！媚びぬ！省みぬ！私がルールだ。」

「出過ぎた真似を申しました。」

そういつてウォーディは頬をつねり始める。やっぱりこいつらどMだわ。

「なんてね？ウォーディの言うことも分かるよ。でも私にも譲れないというか、時間をかけて折り合いをつけなくちゃいけないこともあるんだ。後、いくら私が継いだといっても、私しかないマツキノン家は風前の燭には違いない。しもべ妖精だろうがなんだろうが一丸となるべきだと思っただよね。」

フレイヤ・マツキノンは賢者の石を知らない？

ソファアーに寝そべりながら目録を読む俺。

俺このソファアーさえあれば十分だわ。寝心地サイコー。なんか目録の家具のページに写真かと思うぐらいに精巧な絵付きで解説されていた。500年前ぐらいに作られたこの「癒しのソファアー」は疲労回復と安眠を約束し、日ごろのストレスから解き放ってくれるらしい。何というNEET製造機wwあんまり座りすぎるなと書いてあった。でも無理。オラここで寝たきり生活すつぞ！

なんか装飾品やら剣やら衣服やらなんやかんやら。やれ4代目は貴重な魔法薬の原料を取りに南極に行ったあの、やれ18代目の娘が飼っていたユニコーンの角だの、やれ30代目が討伐したドラゴンの鱗だの忙しい。何なのマツキノン家？アグレッシブすぎじゃね？インドア派な俺には無理。ソファアーで寝ていることしかできない。ぺらぺらとめくっていると、マツキノンの歴史とか魔法史とかマツキノン流薬剤調合術とかマツキノン流剣杖術とかマツキノン流茶道、マツキノン流交渉術から果てはマツキノン流陰陽術まで書いてあった。もう書いてないのってセクシーコマンドーぐらいじゃね？なんか27代目は世界旅行してる内に辿り着いた東の国ヤポンをいたく気に入っているやうならしい。

これ出版したらハリーポッターファンは口から泡吹きそうだな。読んでる途中から俺もなんか二次設定的な意味でか知らないけど頭痛くなってきた。なんでこんなに強烈な戦闘民族が滅んだんだ？もしかしてお辞儀のキャラが霞むほど強烈だったために、不死鳥の騎士団の集合写真を取った2週間後に消されたのか？

その可能性は大いにありそうだ。なんか先代のマーリンさんは伝説の魔法使いマーリンよろしく、って伝説の方のおっさんもうちの家系だから先代っていう方がいいのか？まあ、その先代だけど、卒業とともにかつてのお歴々の尋ねた地を箒で飛んで回って新種の竜と

戦ったり、現地の邪神の封印を手伝ったり、伊賀で忍者とガチバトルしたり、西に引きこもりあらば家を吹っ飛ばして引きずり出し、東に悪人あらばケツにスライスした玉葱をぶち込んだりと相当な人物だったらしい。なんか死喰い人の杖を手刀でたたき折って回っていたらしいし。

これヴォルさんの目に留まらない方がおかしいわ。くど過ぎて胃がもたれる位キャラが濃い。ウォーディが心酔するのも分かる。ビクトリウム様っぽいもん。

まあ、それはいいんだよ。と俺は目録の中から使えそうなのを探していく。訓練の効率が上がる「鍛錬の腕輪」とか頭の回転が速くなる「真理の指輪」とかRPGっぽいな。装備すると素早さが上がり、異常に軽いのであり得ない速度で投げられるけど、投げたとたんに剣よりも重くなつて相手を打ち抜く「疾風のナイフ」・・・質量保存則無視してね？なんであるのか知らない「超占事略決」に、軽い魔法なら跳ね返す「龍のベルト」とか純粹に役に立ちそうなものが結構ある。あとおすすめは「美神のブラ」。着けてるとその人の持つている美の素養の範囲内で、理想的な体型に成長するように調整してくれるらしい。中身オッサンで体が幼女の俺は使うかどうか非常に悩みどころだ。そんなふうに欲しがる人ならいくらでも金を払いそうなものがある一方、嫌いな奴の血をつけておくといつの間にかそいつの靴に忍び込む「怨念の画鋏」、叩いた相手の持っている時計を狂わせる「時落としのハタキ」、神様にも特攻できるほどの信念がこもった「ゾクのはちまき」、思考を鈍らせ体を重くしやる気をなくさせる「怠惰の首輪」とかネタ武器？まであるし。「怠惰の首輪」は先代が鍛錬のために着けてたらしいけど、絶対使い方間違ってるよ・・・

道具やら衣服やら見てると、先代一家の使ってたものとかもあつて、ダイアゴン横町には杖と教科書を買に行く位で済むぐらいだった。先代の杖を使つて、古い教科書を持っていくなら、今すぐでもホグワーツに入学しますってふくろう郵便を送るだけで入学できそうだ。

まあ、期限は4日後の31日だし焦ることはない。

殺された先代一家の服を着るのはちょっと気が引けるけどな。まああるものは有効活用した方がいいし、マツキノンを継ぐ決意として使うべきだと思うんだよね。

あまりにも品物が多いので、説明は流し読みして絵をメインで見たら、何に使うのかわからないアイテムややらと前衛的なデザイ
ンの品物の中に、良く見知った服が在った。俺はおもわず呟く。

「リーヴァイスのジーパンじゃん？先代の？」

ポンッ！

と音がして、目の前に虚空からジーパンが「落ちて」来た。

「・・・」

俺はソファーから降りて、ジーパンを触ってみる。

「うん。ジーパンだ。まぎれもなく・・・」

先代のか。なるほど、いいセンスだ。目録を見るとジーパンのペー
ジが白紙になっている。

「戻れ！リーヴァイスのジーパン！」

ボシュッ！っという音とともにジーパンが消え去り、目録には説明
が戻る。あ、よく見ると『1991年7月27日第45代当主フレイヤ。取り出して触るがテンパって戻す。』って追加されてるし。
うん。良く分かってるね。

「なんじゃこりゃあああああああああああああ！！」

ウォーデイが「いかがいたしました？」って、なんで驚いてるの？
って感じで聞いてくる。

「いやいやいや、取り寄せバッグじゃあるまいし、っていうかなに
これなにこれ！ハンターハンター？グリードアイランド？ブックし
てゲイン？うおおおあふああああおおおお！」

「落ち着いて下さいませお嬢様。目録とはそういうものでございま
す。」

「そうなのかー。じゃねえよ！こんちくしょー！びつくりした。マジでびつくりした。俺の寿命を返せ！この目録なんなの？訳わかんねー。」

ウォーディがどこからともなく水の入ったコップを取り出してきたので、一気に飲み干して、なにこれ冷たくてウマーってな感じで落ち着いた俺は居住いを正す。

「マツキノンの財産は常に当主とともにあるものでございます。つまり、目録を手に呼び出せば、マツキノンに属するものはいかなる場所へも馳せ参じ、光栄にも新たにマツキノンのものとなった物はその性質をつぶさに語り、宝物庫等のしかるべきところへ収まるのでございます。その旨は目録の初めのページに記されているはずですが？」

「俺、ゲームとか電子機器は説明書をきちんと読むんだけど、画集とかは適当に見るタイプなんです。すいません。今後気を付けます。」

「強力な呪いが込められたものもございます。説明や注意はゆめゆめ見落とすことがなきよう。」

「分かりました。」

俺は最初のページに戻って読んでみた。改めて見るとこの本黒塗りの結構頑丈でいわくありげな作りになっている。表紙には多分マツキノンって書いてあるんだけどアルファベットの装飾がもはや絵画レベルで読めない。家紋も複雑すぎて俺には描けそうもないな。

それはいいとして目録曰く、

・この本は当主にしか開けず、また読むことはできない。

・この本はいかなる時でも当主とともにあり、どんな結界の中でも呼び出せばやってくる。

・この本は濡れない燃えない切れない汚れない。そして魔法に強い。そこらへんは先祖代々が保証する。だからと言って盾には使わないこと。（昔、飛んできた死の呪文の角度をそらしたらしい。そのとき粉々になって今の黒龍鱗の表紙になったんだって。あの時は死ぬ

ほど痛かったとか、修復するなら綺麗にしてくれとか書いてある。

この本次の修復で喋り出しそうだな。」

・この本を閉じていても、この本を手にし、その物品名を呼べば、どんな結界や封印がされようとその物品はたちどころにやってくる。
・新たな品物を手に入れたとき、その品物が所有に「同意」すれば、この本を経由して、その品物をマッキノン家に送ることができる。そのときにこの本が、その品物の由来や効果を調べてくれる。ページは自動で追加される。（品物に意思ってあるんだ。そこらへんは良く分らん。原作では杖の所有がどうのこうのって言うってたな。）
・その品物が破壊、贈与、放棄されたときに目録は自動でその物品の項目をページごと削除する。呼び出したときは白紙になるだけで、登録は消えない。

・この本はページが増えることにその分だけ重くなる。マッキノン家の歴史を背負っていると思っていくら重くても持ち歩くこと。また、つまらないものを追加してむやみに重くしないこと。

・この本は呪われています。外すことはできません。ガシガシ魔力を吸い取ります。読んだ内容はその物品が放棄されない限り脳みそに刻み込まれて忘れません。副作用として、頭痛、吐き気、悪心、嘔吐、失神があります。長時間使用時には死亡もあり得ます。ヤバくなったら「癒しのソファ」をお使いください。

なるほど・・・なんか最後の注意書きが怖い。俺このソファに座ってなかったら死んでたんじゃね？あの頭痛は気のせいじゃなかったのね・・・注意書きって大切だね。

それにしても、この目録チート過ぎね？いくら二次創作でもこれは引くわ。ペベレルの死の秘宝以上にヤバいじゃん。え？なに？最初はその羊皮紙にするつもりだったけど怪電波を受信して進化した？・・・知らんそんなもん。

とにかく俺はこのあり得ないほど便利だけどクソ重い本を持ち歩か

ねばならんと・・・明らかにいらぬ項目を消していくべきだな。
そういつて俺は「鍛錬の腕輪」、「真理の指輪」を嵌め、ガキ共に
ダイブして涙やなんやらでどろどろになった服をウォーディに渡す。
先代のパンクなＴシャツに着替えリーヴァイスを穿き、「龍のベル
ト」を締める。「疾風のナイフ」をジーパンに刺し、「ゾクのはち
まき」を巻く。「美神のブラ」は・・・ゲフンゲフン！今日から体
重計に乗るようにしよう。

賢くなつて信念が強くなり、素早さの増した俺は昼飯前とばかりに
目録を整理してゆく。

なんか、明らかにゴミだろという感じで、何代目がどこどこに行つ
たときに拾つた石（特別な鉱石でもなんでもない）とか、庭でとれ
たセクシーな形の人参とか、^{ミイラになつてた}何代目が子供のころに初めて描いた絵
とか、流木とか折れた剣とかのガラクタは写真撮つて俺的秘宝ラン
ク４位の「虚無のくずかご」に捨てた。その写真は、親ばかつぷり
が爆発したような何代目の写真、生後０日目から千日目という感じ
に１００１ページも無駄に目録を占領してた写真と一緒に怒りを込
めて俺的秘宝ランク３位の「無限のアルバム」にブチ込んでおいた。
おかげで広辞苑大分薄くなつたよ。ありがとう。

ちなみにランク１位はこの本です。２位は・・・ゲフンゲフン！い
くら中身がオッサンでも乙女の本能には逆らえん！ちなみにソファ
ーはもう俺の一部なので番外です。

ついでに呪いの装備系の注意も見ていく。「怨念の画鋏」を使われ
た人は発狂して足を切り落として死んだらしい。恐ろしすぎる。き
れいな剣だなと思つていたうつくしい細身の剣の名前は見た目とは
大違いの「叛逆の剣」という名前だった。大理石もすっぱりやって
しまうほどの切れ味で、装備者が何かを切ろうとすると必ずすっぽ
抜けて首を落とすように落ちてくるらしい。その見た目に惑わされ
て今まで１００人の首を落としてきたんだつて。これはＮＧワード
だな。厨二ワードだし、調子に乗つてうっかり呼び出そうものなら
１０１つ匹デユラハンに仲間入りだ。

そんなこんなで広辞苑は、ずいぶん薄くなつて普通の辞書ぐらいになった。よくこんなの持ち歩いていたなマツキノ家先祖代々。

「お嬢様、昼食の用意ができました。」

とウォーディに呼ばれた俺はソファから立ち上がる。

「ふう・・・」

とため息をついてソファからのいた俺はズシリと体が重くなり、割れそうな頭の痛みに襲われた。ソファの底上げ効果忘れてた。

「やべ・・・さすが呪いの装備・・・ウォーディ、ホグワーツにふくろう送つといて・・・」

と呟くと同時に倒れてしまった。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

気が付いたら、フレイを倒れさせていた。すんなりダイアゴン横町に行ってもらうはずだったのに。ポルナレフ状態。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

うまく書けませんでした。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

俺の部屋だ・・・いつからだろう。

この夢の中で俺の部屋にすることが「帰る」から「来る」になってしまったのは？

俺の帰るべきところはどこではないということなのか？

しかし、向こうはどうなのだ？

フレイヤとしての居場所はあっても、俺としての居場所は？

他人は俺も含めてのフレイヤだと言っのだろうか？

例えそうだとしても、俺には・・・納得できない。

俺は床に落ちた「死の秘宝（下）」を拾い上げる。

既に外は夜になっていて、窓は鏡のように俺を映す。

そこには俺の姿はない。ただ・・・フレイヤ・マッキノンがいるだけだ。

光が目染みる。
「・・・」

そつだ、出版社に行かなくちゃ。

「・・・ま」

まだドラゴンボール訳してないんだよね。

「・・・さま」

つていうか誰がいる？

「・・・うさま」

・・・ここは・・・

「お嬢様！」

「ふえ？」

目の前はやたらと高い天井。体育館と見まがうほどでかい部屋。壁にかかる紋章をあしらったタペストリー・・・癒しのソファアの上か。ただ単に倒れたわけではないらしい。服は着替えさせられ、掛布団がかけられている。

「ああ、ここ孤児院じゃないんだ・・・おはようウォーディ。」

「おはようございます。お嬢様。お加減の方は？」

「・・・そうか。倒れたんだっかね？加減がいいかどうかはこのソファアを下りてみないとわからないかな？ソファアの上だと疲れていても分からなくなるし。」

俺はソファアの横に立っているウォーディを見る。ウォーディはいつもパリッとした執事服を着ているのに今はよれよれで、その顔も涙の跡がくつきり残っている。

「ひどい顔だ。」

と、目録からハンカチを取り出し、ウォーディの顔をぬぐってやる。

「お嬢様。勿体のうございます。」

「いいんだ。」

・・・不甲斐ない。

「すべての責任は私にございます。お側にお仕えしていながら腕輪

の暴走を見抜けず、お嬢様を危険にさらした失態、わが命に代えて償う所存でございます。」

「いや、その気持ちはうれしいけど、ウォーデイが責任を取る必要はないよ。ウォーデイは注意を促してくれてたのに俺がなめてたんだ・・・どうして倒れたか分かっている範囲で話をしてくれないか？」

「はい。」

といって、ウォーデイが、話し始める。

「鍛錬の腕輪は確かに使用者の体力や技量を判断し、作業を最適化させますが、お嬢様は癒しのソファアーにおかけになっておいででした。ですから腕輪はお嬢様の体力を見誤り、お嬢様の許容量をはるかに超える過度の負荷を与えてしまったと推測されます。たださえ目録を読むということはすさまじい負荷を与えるのです。その負荷から、今までの当主様は目録の整理などはなさったことはありませんし、癒しのソファアーに座って作業をなさるなどということは・・・いえ、言い訳が過ぎました。私は目録の危険性を知り、目録を整理なさるお嬢様を見ていながら、お止めしませんでした。これは重大な職務放棄でございます。なにとぞ、罰をお与えください。」

癒しのソファアーで体力を誤魔化していたから、鍛錬の腕輪が俺には体力があるものと勘違いして、俺が目録を整理するなんて普通じゃ耐えられないはずの負荷が掛かるのを許してしまったと。効率化とリミッターのつもりで付けた腕輪が逆に負荷を上げることになるなんて・・・いや、腕輪のせいじゃない。完全に俺の落ち度だ。

「いや、道具の平行使用をすればどんな副作用が起きるか分からないうし、その危険すら気づかなかったわたしが悪いんだ。そもそもただ目録を見ているだけでも、回復効果のあるソファアーに座っているのに頭痛を感じているということ。その事実にも思わないのがそもそも間違ってたんだよ。注意書きにも読んだことは頭に刻まれるなんて物騒なことが書いてあったし、それに対する危険性もちゃんと指摘されていた。だのにどこかで私は今までの当主たちと違うと

うぬぼれていたんだ。常に持ち歩く目録なんだから整理しようと考えなかった人がいないわけがないじゃないか？それなのに整理されていないという事実の裏にある理由に私は目をつぶり、何も考えずに調子に乗っていたんだ。」

どこかでまだこの世界が・・・現実じゃないと高をくくっていたんだ。ゲーム感覚で装備だの効果だのと・・・愚かしい。

「お嬢様は特別でございます！類を見ないほど優秀でございますとも！悪いのは私です。責められるべきは私なのです！」

「すまないな。ウォーディ。この件に関しては君を罰する権利は俺にはないよ。この目録は何よりも注意してかからねばならない鋭い刃なのに、おもちゃ感覚で扱った罰が当たったんだ。心配してくれてありがとう。」

強力な道具にはそれだけのリスクがある。分かっていると言っていたのは所詮口先だけで、何も理解しようとはしていなかったのだ。

「・・・息をしておいでではありませんでした。」

「え？」

ウォーディは俯きながらつぶやく。

「お倒れになった時、お嬢様は息をしておいでではありませんでした。」

私はただ、お嬢様をソファアに上げ、ソファアの力に頼るしかできませんでした。

私は・・・何もできない。」

「・・・」

俺は黙ってウォーディの話を聞く。口をはさむ権利なんてない。

「・・・先代様は私のせいで亡くなられたのです。」

ウォーディはぽつりとつぶやく。

「先代様とトラバースは旧知の中でございました。当時は闇の帝王の支配が拡大しつつあり、先代のマーリン様は、ダンブルドア教授を旗頭に闇の帝王の支配に抵抗するための組織、「不死鳥の騎士団」

の創立に尽力され、死喰い人と称する闇の帝王の配下と日夜苛烈な戦いをなさつておいででした。マーリン様はその卓越したお力で死喰い人どもを次々に打ち払い、闇の帝王の恐怖から人々を守っていらつしゃいました。

そんな中、ご主人様の元へトラバースが庇護を求めて参りました。当時、トラバースは死喰い人とは目されておりませんでしたし、ご主人様も旧知のトラバースならばと念のため私に調査を命じ、その上で受け入れることにしたのでございます。私は騎士団や、トラバースの近辺を駆け回りましたが、何も不審な点を見つけることはできませんでした。私の報告をお聞きになったご主人様は、死喰い人側の準備ができる前に会おうと、場所を変更なされ、戦闘に長けた一族を引き連れすぐにトラバースに会いに行かれました。私は騎士団へ場所の変更を連絡し、すぐにご主人様の元へ戻るはずでした。

しかし・・・騎士団に着いた私が聞かされたのはトラバースがすでに闇の帝王とつながっているという話でした。私は急いで騎士団の援軍を要請し、現地に向かいました。そこでは大量の死喰い人相手にご主人様と一族が奮戦なさっていたのでございます。ご主人様達は傷を負いながらも死喰い人を圧倒していらつしゃいました。私も戦線に加わるべく駆け寄ったのですが・・・

一瞬でした。闇の帝王が現れ、巨大な閃光が死喰い人ごとご主人様と一族を吹き飛ばしたのは。かろうじて避けたご主人様は闇の帝王に果敢に挑みかかったのですが、闇の帝王は卑怯にも一族の者を盾に使い、ご主人様に「服従の呪文」をかけ、この城への門を開けさせたのでございます。私は操られたご主人様とともに「姿くらまし」する死喰い人どもに追い縋り、この城の門を守るべく戦ったのですが力及ばず城壁に叩きつけられ・・・

城が襲われていると気付いた騎士団の援軍が着き、私が気付いた時にはすべてが失われた後でございました。城を守るガーゴイルはことごとく碎かれ、おそらく「服従の呪文」に抵抗したと思われる先代様は、奥方様、若様、お嬢様をかばうようにして亡くなっており、タペストリーからは焼き消されていたあなた様とあなた様のお母様の名が焼き跡ごと消失しておりました。」

「そうだったのか。」

「それから地獄のような毎日でございました。もしあの時私がもっと綿密な調査をしていれば・・・もしあの時、騎士団の援軍に城に行ってもらうように伝えていれば・・・自らが犯した罪に震え、私は残されたあなた様がどうかあ奴らに見つかりませんようにと願うのが精いっぱいでした。」

闇の帝王の野望が打ち碎かれたと知った時も私の心には自責の念しかございませんでした。主のいない私は自らを罰することもできず、無人の城を歩くたびに心は締め付けられ、碎かれた館を修復し、次の主に命をささげるこのみが罪滅ぼしだと、生き恥に耐えてきたのでございます。

そんな折、私の元にダンブルドア教授がいらっしゃいました。教授は私に次期当主たるあなた様の生存をお教え下さり、この城に迎える手伝いをして下さるとおっしゃいました。しかもあなた様は杖なしでも魔法を使うほどの逸材だとお聞かせいただいた時、私は例え命を差出してもあなた様を守ろうと誓つてのでございます。

しかし、実際にお会いした時、私は自らの認識の甘さにおのれの不徳を悔いました。あなた様は私の命程度では到底釣りあわぬほどのお方でした。先代の罪滅ぼしに尽くすなどという忠誠心の欠いた自

らの愚かさを呪ったのでございます。

そこまで思っていないながら、私はどの屋敷しもべも羨むほどの主人に仕えることができ、あなた様にねぎらっていただけることに浮かれ、あなた様の優秀さに目がくらんだ私は、しもべ妖精として万死に値する失態を犯したのでございます。私の命ではいささか不足でございますが・・・これでご容赦ください。」

ウォーディは短剣を取り出し、自らの喉を掻き切ろうとする。

「止まれ。ウォーディ。俺がそんなことで満足すると思ってるのか？短剣を捨てろ。首を斬るのは今ではないよ。」

ウォーディは短剣を捨て、何か言いたそうにしているが、俺の指示に従い、息も止めている。

「命は投げ捨てるものではない。深呼吸をして普通にしている。話がある。」

ウォーディは息を吸い、「しかし、罰を・・・」と言い出す。

「黙れ。ウォーディ。これから俺の話を聞き、だれにも漏らさず、俺が許したものの以外知ることがないようにするのがお前の罰だ。お前の命は俺をかばって死ぬか、お前の寿命が尽きる以外に使うことは許さん。」

ウォーディは静かにうなづく。

「主人に疑われるのはつらいだろうが、俺が今から話すことは俺の命にかかわる問題だ。ゆるせ。」

と、俺は言って白紙になっている目録のウォーディのページを開いた。

「戻れウォーディ。」

ウォーディの姿は掻き消え、目録のページにはインクが染みだし、ウォーディの素性がすべて明らかにされる。ウォーディは他の主君に情報を漏洩したり、服従の呪文にかけられたりはしていないよう

だった。

「来いウォーディ。」

姿現しとは異なる品物としての召喚で再びウォーディが現れる。

「お前の知る限り、ここで話したことは外部には漏れないな？」

ウォーディはコクコクと頷く。

「ここに死喰い人が入ってくる可能性は？この城を守る呪文は秘密の守り人か？ああ、言葉で返事してもいいよ。」

「前回の侵入は前当主が操られたことによります。当主が殺害された時点で、財産以外のものは一度強制的に排除されております。さらにお嬢様がご当主になられた時点で、この城に入ることのできるものはお嬢様が許可を出さない限り、お嬢様のみでございますし、それとは別にお嬢様が継承なさった時点で、自動的にお嬢様がこの城の秘密の守り人となっております。」

大丈夫そうだな。こちらに来てからずいぶん経つが、そろそろ一人で抱えるのにもつらくなってきたころだ。

「・・・なら話そうか。わたしと俺について。」

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

「・・・ごめん。ちょっと気が立ってたわ。いきなりシリアスモードで疲れた。っていうかウォーディーも大変だったね。まあ、ウォーディーは悪くないよ。悪いのは神（JKローリング）だからね。ここに座りな。」

わたしはポンポンと、ソファを叩き、ウォーディーを隣に座らせる。

「わたしはさ、フレイヤ・マッキノンなんだけど、俺はフレイヤ・マッキノンじゃないんだよね。」

俺はウォーディーの方を見て言う。ウォーディーは驚いた顔をしているが、何も言わない。

俺は手を組んで、膝の上に置き、ウォーディーから視線を外して前傾姿勢で考えるように話し始める。

「確かにこの世界においての俺の器としての体は100%混じりっ気なしにフレイヤ・マッキノンなんだよ。でも、俺の魂はどうなんだろうな？心身まとめてフレイヤ・マッキノンという存在だということならわたしはフレイヤ・マッキノンなんだろうけど、俺はどうしてもこの体に対してなんというか・・・心身の一致を感じられないんだよね。まるで、物語の中のキャラクターを動かしているみたいでさ。そんな調子だから、さっきみたいに大失敗して痛い目を見るんだ。倒れる時に感じたあの痛みが日和ってた俺にここは物語じゃなくて現実なんだって、分かったのに目をそむけていた俺の目を覚まさせてくれたんだ。」

俺は組んでいた手をほどき、再びウォーディに視線を向ける。

「なあ、ウォーディ。お前の主人の魂が、赤の他人にとってかわられたらどうする？」

ウォーディは、即答しようとしたが、その言葉を飲み込み、しばらくした後、口を開いた。

「何としてもお助けします・・・が・・・」

ウォーディは俺の言いたいことになんとなく想像がついているらしい。

「俺は気付いた時には5歳のフレイヤ・マツキノンという少女になっていた。そもそも俺の前にフレイヤ・マツキノンという少女の魂が居たのを俺が殺すことになったのか、それとも虚ろな体に俺が入ることになったのか、それは分からない。

ふふ、意味が分からないな。とにかく俺は5歳のフレイヤ・マツキノンになる直前まで2011年の日本に住んでいた魔法使いでも何でもない冴えない男だった。これは証明しようがないが、俺自身は本来ここに在るべき存在じゃないと思っている。

それで、ウォーディはどうする？」

「私は、お嬢様にお仕えます。」

「それは本来いたはずの彼女を取り戻すという意味か？俺を認めるということか？」

「私にはそれを決める権利は・・・」

「ウォーディの気持ちを知りたいんだ。」

ウォーディは下を向いて、考えている。

もし、主人たる人間が何らかの理由で入れ替えられてしまったとき、しもべ妖精としては助けに行かなければならない。例え本来の主が何処にいと知れずとも、偽者を食い止めなければならない。

しかし、「本来のフレイヤ・マツキノ」を知らないウォーディにとって、フレイヤ・マツキノとは俺である。もし、俺に仕えるとするれば、ここにはいない主人に対する裏切りになるが、ウォーディにとってはそもそも俺が偽者かどうか判断する材料がない。

俺ですら「本来のフレイヤ・マツキノ」と呼ぶべき存在がいたのかどうか分からない。「本来のフレイヤ・マツキノ」がいる、いや、いたなら俺は偽者だし、いなかったのなら本物だ。という考え方もできるし、これまでフレイヤ・マツキノとして生きてきた俺は既に本物であるともいえる。

ウォーディは俺に仕えるか、どうやったら戻ってくるかも知らない主人のために俺を抑えるのか、どちらかを選ばなければならない。

「私は・・・私は「今のお嬢様」にお仕えします。」

「いいのかい？それは「本来のフレイヤ・マツキノ」に対する裏切り、いや、マツキノ家に対する裏切りかもしれないよ。」

俺の言葉を聞いてもウォーディは動じない。

「そもそも裏切りになるのでしょうか？」

「？」

一体どういう意味だ？

「お嬢様は、意図して「フレイヤ・マツキノン」になったのではないしょう？これは事故と呼ぶべきなのではないでしょうか？「今のお嬢様」も、そもそもいらっしやったのかどうかはわかりませんが、「本来のフレイヤ・マツキノン」様も被害者でございます。つまり、「本来のフレイヤ・マツキノン」様に対して「今のお嬢様」が責任をお取りになるというのはそもそもお門違いですし、「今のお嬢様」は「本来のフレイヤ・マツキノン」様のなすべきことを十分果たしておられます。誰も「今のお嬢様」を責めることはできませんし、お嬢様がそれを重荷に思う必要はございません。」

「・・・私はそう思いますし、そのことで「今のお嬢様」を責める者がいれば、私は全力でお嬢様をお守りいたします。」

そうか、そういうのもアリなんだな・・・本物かどうかじゃなくて、そう思うのが間違いだってことか・・・俺も「本来のフレイヤ・マツキノン」も同じ事故に巻き込まれた不幸な被害者だと。まあ、もし俺が「本来のフレイヤ・マツキノン」だったとして、事故とはいえ自分のいるべき立場が奪われ、そこに他人がいるとするなら、いくらそいつが負わなくていい責任を果たそうとしても、完全には納得できないだろう。言い訳っぽいけど、取りようのない責任は仕方がないし、俺は俺ができることをするしかないか。

「・・・俺は・・・わたしはここに居てもいいのかな？」

「そう思います。」

「「おめでとう」「って言うて。」

「おめでとう」

「ありがとう。」

手に何かが落ちたと思ったら涙だった。

「ふふっなんかすつきりした。」

俺はソファーから立ち上がって伸びをする。心は晴れやかだったけど、立ち上がった俺はまだ軽い頭痛と痛みが残っているのが分かったので、もう一度ソファーに座り直す。ウォーディは心配そうに見ているが、大丈夫だ。

「さて、本題に入るか。」

「ええ?! 今までののは何だったんですか!?!」

いつも冷静なウォーディが素っ頓狂な声を上げてソファーから転げ落ちた。

こいつの突込み精神は感嘆すべきだな。

「ん? 前座。」

「ぜ・・・前座?」

床に転がったまま、ウォーディが答える。

「そう。今までの話はまあ、影響する範囲は広くてもマツキノン家だけだったけど、今からはなす話は魔法界の未来を左右しちゃうからねー」

「そんな話を軽く話さないでください!」

「えー？だって、なんかこう本物に対する呪縛的なものから解放されたしさー、それにシリ阿斯分は全部出し切っちゃって品切れなんだよねー」

「はぁ・・・」

「頑張れウオーディ。ちなみにこの話が外に漏れたらほぼ間違いない廃人になるまで拷問された挙句死ぬからね。ハハハ！」

「・・・」

そこから俺は、元居た世界のこと、その世界ではこの世界は物語として出版されていたこと、この世界に俺が生まれているのかは分からないことを話した。

「まあ、そこらへんは今の世界には関係ないんだけど、その物語が問題なんだよねー」

「どういうことです？」

「わたしはこの世界がこの先どうなっていくかの未来を知ってるってことなんだよね。一番重要なことはわたしがヴォルさんがまだしぶとく生きてるのを知ってるし、その完全な滅殺方法も知ってるってことかな？死喰い人が聞いたら一瞬で消したくなるのは分かるよねー」

「そ、それは大変なことじゃありませんか？今すぐダンブルドア校長に知らせねば！」

「いや、それはしない。俺が知っているこの世界にはわたしは居なかったんだよね。だから俺はできるだけ関わらない。物語が脱線してしまったらハリーがお辞儀を殺す運命が変わってしまうかもしれないし。まあ、私が関われば物語よりいい方向に導けるのかもしれないけど、悪い方に転がるリスクがある分、そうなった時に私は責任を取り切れない。なにより下手に関わって死にたくはないからね。もし関わるとすればそれはホントのほんとに最後、ホグワーツ決戦で犠牲者を減らすことだけだね。当面は巻き込まないように振る舞い、いざとなったら逃げ切れるだけの實力をつけて、準備をしくぐらいだね。」

「しかし・・・」

「わたしは自らの命を賭け金には差し出せないよ。最初にした約束絶対に違えちゃだめだよ？」

「承りました。」

「じゃあ、わたしが関わらなかった時の未来を話していこうと思うんだけど、長くなるし、いい加減お腹空いたからお昼にしようか？他の子たちも呼んできてよ。」

「分かりました。」

バチンと、ウォーデーは広間から去っていった。

「これから始まるんだな。本当の戦いが・・・」

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

フレイヤの心労が晴れたということです。
ちよっと分かりやすいように加筆。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

原作のものっそいネタバレがあります。ストーリーとしてはあんまり進まないのて読み飛ばしていただくか、あらずじを書いておくのであとがきだけを見てください。っていうかなかなかダイアゴン横町に行けない。次話からダイアゴン横町に行く。（フラグ）

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

「さて、飯だし手を洗いに行くか・・・」

と、ソファアールから立ち上がる俺。ちょうど済ませたかったしな。

頭痛と痛みが来ないかしばらく確認した後、大丈夫そうだったのでとりあえず大広間から出たものの・・・お手洗いは何処だ？

スーパーマーケットとかだと壁沿いに歩いていけば見つかるもんだが、日本の城ならまだしも西洋の城なんて歩いたことのない俺はトイレを探すうちにすっかり迷ってしまった。

「ウォーディを呼びばいいとはいえ、迷子になりましたとか恥ずかしすぎる。」

「過ちて改めざることを過ちという」なんて名言があるけど、それは間違いを認められるほど心の強い人限定です。

「トイレならばその突当りを左じゃ。」

「あ、どうも。」

と、振り向く俺。そこには誰もいない。

「俺も焼きが回ったかな？目録の後遺症で幻聴が聞こえるなんて。」

「いや、幻聴じゃないぞ。ここじゃここ。フレイヤよ。」

きよろきよろと周りを見回す俺。廊下にはやはり誰もいないが、視界の端に動くものがある。

何だと思ってみてみれば、壁にかかった絵だった。絵の中のダンブルドア先生とキャラがかぶっている長い髭に青いローブのおじいさ

んが手を振っていた。

「うわぁ・・・知ってたけど現実に絵が動くと・・・キモす」

油絵は液晶パネルみたいに平じゃなくて結構凹凸があるんだけど、中の人が動くとその凹凸ごと小蟲の大群みたいにぞわぞわ動いて実に気味が悪い。

「はぁ・・・この娘が儂の最後の子孫じゃと・・・まあ、仕方あるまい。」

なんかあからさまにがつかりされた俺はトイレに行きたいイライラも手伝って、腹が立ってきた。

「あんたいつたい何様なんさ？」

うおっほん。と絵の中の爺さんはもったいぶって咳をする。

「儂の名はマーリン。マーリン・シルベスター・アンブロシウス。おぬしの遠い祖先にあたるものじゃ。アーサー王伝説は知っておろう？あの話に出てくるマーリンこそ儂じゃ。」

「へー。至極どうでもいい。」

絵の中のマーリン爺さんはひどく動揺している。確かに偉い人なのかもしれないし、人間界にも物語として知れ渡っているぐらいだ。現実にはかなり有名なんだろう。でも、そんなの関係ねエ。すごい魔法を教えてくれるならまだしも俺は興味がないね。

「・・・と、とにかくじゃ、儂は次元の狭間に閉じ込められ、死すことのできぬ身じゃ。異世界を垣間見ることもある。おぬしの境遇はつらいものじゃが儂もおぬしに味方するぞ？」

こいつ今なんて言った？「おぬしの境遇はつらいものじゃが」だと？
「聞いてたのか？」

「ほっほ。もちろん。大広間のフレスコ画にも僕は描かれておるしの。」

「・・・爺さんの絵はあっちこっちにかかっているのか？」

「僕は有名じゃからのう。」

「・・・そうか。」

子孫だからと言ってこの爺さんが味方するとは限らない。最悪俺の握っている未来情報はこのマーリンの絵が掛かっている家系すべてにばれてしまうかもしれないし、その家の誰かにマーリンが肩入れしていたらそいつを助けるために俺の未来情報をばらしてしまうかもしれない。

幸いというべきかどうかは知らないが、「ヴォルさんの生存情報と滅殺方法」は今の段階ではまだ与太話に過ぎないし、詳細もまだウオーデイにも話していない。

「詳しいことは午後から話すと決めていてよかった。おかげで情報が漏れる前に対処できるわ。まず目の前のあなたを吹き飛ばして、お花を摘んだら次は大広間のフレスコ画ね？大丈夫。他の家にかかっている絵もちゃんと回収して始末しておくから。」

ぐっと、力を入れた手にバチバチと不吉な音を立てる気弾が生成される。最近やってなかったからストレスたまってたんだよね。

「ちょ、ちょっと待つじゃ！一体どうするつもりじゃ？」

マーリン爺さんはひどく動揺している。伝説の魔法使いともあろうものが嘆かわしい。

「知れたことを。お前が他の家に情報を漏らす前にすべてのお前の絵をこの世から葬り去る。」

「止めるんじゃ！儂の絵は次元の狭間にいる儂の唯一の窓なのじゃ！」

へー魔法使いの絵はゴーストみたいに残留思念的なものかと思っただけど、この爺さんは特別らしい。

「そんなの関係ないね。お前が他の奴に情報を漏らす可能性がある以上、わたしの平穩のためにお前の絵には消えてもらう。」

「そんなことは誓ってせぬ。おぬしは儂の最後の子孫なのじゃぞ？それでも信じられぬか？」

「信じられないね。もし毎日お前の絵に話しかけてくれる他家の子供が、俺の目指す運命では死ぬことになっていた時、お前はその子供を見捨てられるのか？しかも、その行為は見かけ上俺にわずかな負担を課すだけだ、「何の不都合もない」・・・が、それはいずれ俺を死に追いやる。許す訳にはいかない。」

マーリンの絵はあちこちに掛かっている。中には物語のヒーローにあこがれるようにマーリンにあこがれる子供もいるだろう。次元の狭間に閉じ込められ、永遠の孤独に耐えねばならないマーリンにとって、自分の絵に無邪気に話しかけてくれる子供はどれほど貴重な

存在か、筆舌に尽くしがたいものがあるだろう。そのような子が避けられる死のレールに乗せられていると知った時、たとえ身内の負担が増えるとしても、その避け方を教えるのは人として仕方がないことだ。

だが、俺にとつてはそんな情は迷惑にしかない。俺は少なくとも今後7年間は、神の敷いたレールから物語が脱線しないように慎重に行動しなければならない。確かに目先だけを見れば、俺が少し頑張るだけで、マリーリンと俺はその子を救えるのかもしれない。だが、今現在のほんの少しのずれが、将来的に途轍もない差になってしまう可能性は大いにある。唯でさえ「存在しないマツキノ家の生き残り」がいるのだ。もうずれ始めていると考えて差し支えないだろう。もし、この神のレールが余裕のあるものならばいいのだが、具合の悪いことに俺が目指す神のレールは嘘のように偶然がハリー達の味方をして出来た紙のようにうすく、もろいものなのだ。

例えば、原作3巻の「アズカバンの囚人」では、クイデッチ中にハリーが”偶々”襲ってきた吸魂鬼のせいで筈から落ち、主の失ったニンバス2000が風に流されて”偶々”暴れ柳に捕まり、砕かれる。そのことを”偶々”知ったシリウス・ブラックが”偶々”知られずにグリンゴッツから自身の財産を引き出すことに成功し、ハリーに炎の稲妻、ファイアボルトを送る。ファイアボルトを得たハリーはその後、「炎のゴブレット」でドラゴンを出し抜くための相棒としてファイアボルトを使ったりとさらなる活躍をすることになる。

例え、ハリーが吸魂鬼に襲われたとしても、スポーツには一度として同じ試合がないように、ニンバス2000が暴れ柳の方に行くとはい限らない。もし、ニンバス2000が暴れ柳と異なる方向に飛んでしまったら、わたしは歴史を守るために、強力な防護呪文が掛かったニンバス2000をも欺くほど強力な「錯乱の呪文」をかけ、

所有権を誤魔化したうえで暴れ柳の側から「呼び寄せ呪文」をかけなければならぬ。しかもその全てを誰にも悟られないように。だ。考えるだけでも頭が痛い。しかも私のカバーできる範囲はホグワーツだけだ。外の世界で想定外のことが起こっていてもわたしにはどうしようもない。

そのような綱渡りをしなければならない私はできる限り不確定要素はつぶしておかなければならない。逆にもし、干渉するとするなら徹底的にしなければならない。

わたしは「炎のゴブレット」でヴォルデモートが復活するまでに隠され、厳重に守られたすべての分霊箱を破壊し、

ハリーの血を使ってヴォルデモートを復活させ、

偶然にも最後の分霊箱となっているハリーを殺して、ヴォルデモートの分霊箱のストックを0にし、

ハリーの血を使ったことでリリーの「死の犠牲」の呪文の効果が発動し、愚かにもハリーの「疑似分霊箱」ともいうべき存在と化したヴォルデモートによってハリーが蘇生し、

その上でヴォルデモートを殺す。

+その間に死喰い人の弾幕に一発でも当たるとアウト。

という凄まじいというより命がいくらあっても足りないような行為に手を染めなければならない。何より消費魔力がすさまじく多い「死の呪文」を2回使わなければならない。ってというか現代日本人の

俺の精神は同級生を殺し、直後に殺人鬼とはいえ人を殺すという行為に耐えられるのか？

仮にハリーを見捨て、お辞儀を殺すことだけを目的にしても、「復活した直後で復活を喜び、油断してお手てを見ているヴォルさんの後ろに瞬間移動し、ヴォルさんを殺す。」というのが見かけ一番勝率が高いように思える。

が、これも穴だらけだ。あまりにも連発しまくったせいで最早「死の呪文」のエキスパートと化したヴォルさんよりも早く「死の呪文」を唱え、さらに連続姿現しの疑似ドラゴンボールバトルに慣れたヴォルさん相手に成功するとは思えない。

さらにこの方法だと例えヴォルさんを殺したとしてもハリーの中の分霊箱が発動し、ハリーとヴォルさんは同一個体になってしまう。いや、ハリーの精神はヴォルさんに殺されてしまうだろうから、わたしは不意打ちで何とかヴォルさんを殺せたとしても、その直後復活したヴォルハリーさんと戦わなければならない。死の呪文を使って魔力を消耗した上で。だ。

ダンブルドアは助ければいいじゃんとか思ったそこのあなた。ヴォルさんはダンブルドアが生きている限りハリーの前には姿を現さないだろうし、現したとしたらそれは確実にハリーと一対一になる状況しかあり得ない。そうなると、ダンブルドアは生きているので死の杖はヴォルさんにパクられず、「実はヴォルさんの持つてる死の杖はハリーのものだったんだよ！ なったってー」作戦が使えない。無理です。リリーの力で一度復活したとしてももう一遍ハリーが死ぬこと請け合いだ。

結論・・・無理。どう考えても無理。スペランカー先生がスーパー

マリオを全面クリアするぐらい無理。実は首位の高さの落下までは耐えられるスペランカー先生でも体の10倍以上の高さから落下しなければならぬマリオでは、1-1のゴールを踏むことさえ不可能だ。前提からして詰んでいる。

バチバチバチツという気弾の音に俺は現実に戻される。

目の前のマーリンは俺に消されまいと絵の中で無駄な抵抗を続けている。しかし、俺にとって即死級の毒となるマーリンの絵も、裏を返せば、多くの魔法使いの家（純血主義とか古い血統の家とかにはスパイを恐れて置かれてはいないだろうが）をスパイする有用なツールだ。ホグワーツから出られない俺にとってマーリンの絵は、いや、マーリンが俺に従う限り貴重な情報源となりうる。

・・・ホグワーツに魔法使いの絵が多いのは、その絵を通して家の方がその子女がうまくやっているかを知る電話代わりになっているのだな。今分かった。

一度深呼吸した俺はマーリンを見据え、問いかける。

「選べ、服従か、消滅か。」

取り乱していたマーリンの顔には恐怖が張り付いているが、俺の声を聴くとぴたりと止まって、考え始めた。

しばらくして、顎に当てていた手を放したマーリンはこちらを見据えた。

「降参じゃ。まったく、とんでもないのがうちの子孫に入ってしまったもんじゃ。」

「俺の魂も含めて、わたし、フレイヤ・マツキノンだ。爺。

お前はこれから例えどんな事情があろうと、俺自身の情報、俺の知っている情報、俺の目的すべてを口外することは許さん。うかつな一言が俺とお前の絵を殺すと知れ。そして、俺の求める情報はすべて嘘偽り、誘導の意思なしに俺に伝える。例えそれが他家のもので。最後に、お前の魔法について教える。今後必要になる。あと、今日午後に俺がウォーディと話しているときは席を外せ。その時に取られたメモは今後読んではいけないが、もしそのメモが奪われそうになったりしたらすぐに俺とウォーディに知らせるんだ。」

「分かった。そうしよう。おぬしには敵わんよ。」

「そうか。信用している。」

そう言っただけ俺はマーリンに言っただけ、俺はトイレに駆け出していた。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

トイレに行くついでに手を洗いに行く↓ご先祖様マーリンの絵に会う↓ご先祖様を脅迫、スパイとして雇用↓トイレに走るがちよつと漏らす

「漏らしてねーよ！」

オリキャラまとめ

フレイヤ・マツキノ

死喰い人に滅ぼされたはずの「マツキノ家」の忘れられた最後の生き残り。母親がスクイブで、もともと隠されていた上に、彼女曰く「テラ他人ww」の先代当主マーリンの最後の「追跡阻害呪文」により生き延びた。

が、その魂は冴えない日本人転生者のオッサン。ドラゴンボールが好き。殺伐とした魔法世界に対して過剰な警戒感を抱いている臆病者。自分が傷つくことを恐れる臆病ゆえに、「傷つけられる前に殺る」という理論に飛躍しているがあまり自覚はない。自分がチート転生者じゃないことを自覚しており、ヴォル様に睨まれたらどうしようとおびえる日々を送っている。

その一方で、長年「本来のフレイヤ・マツキノ」に対する罪悪感も抱えており、原作に居なかったから俺は彼女の立場を奪っていないという考えと、この世界は俺がいる時点で原作の世界ではないだろうからやはり「本来のフレイヤ・マツキノ」の立場を奪ってしまったのでは？という板挟みに陥っていた。

その悩みもしも妖精「ウォーディ」の理解によってだいぶ軽減している。

しもべ妖精ウォーディ

先代からマツキノ家に仕える屋敷しもべ。一族滅亡のきっかけを招いてしまったと感じ、罪の意識におびえていたが、フレイヤ・マツキノという新たな主を得て自らの進むべき道を見つけた。フレイヤ・マツキノの告白（恋愛的な意味じゃないよ）を受け、現在のフレイヤに仕える決意をする。

伝説の魔法使いマーリン

キリスト教徒の陰謀で愛した美人の泉の妖精に嵌められ、次元の狭間に閉じ込められたおっさん。彼の絵はたくさんの魔法使いの家にかけられているので、フレイヤは自身の持つている情報が彼から漏れるのではと戦々恐々している。彼自身は彼女を売る気はさらさらないので、フレイヤの情報は魔法世界を揺るがしかねないので口では「信用している」と言うもののまったくマーリンを信用できない彼女を哀れに思っている。彼自身も彼女の持つ情報の重大性を理解しており、同じく次元を超えた苦難に陥っている彼女を何を犠牲にしても助けたいと思っている。

その思いがフレイヤに届くことはないが。

ちなみに次元の狭間から見えている異なる次元のテレビアニメ「魔法少女まどか マギカ」の1話目を見ていたく感動し、彼は最終話まで見ようと思っている。

前主マーリン

作者の都合により非常に濃いキャラにされてしまった人。原作にも出てくるが、殺されたとしか触れられないので、触れるのも嫌なほど濃い人だったということになっている。

しもべ妖精 ヌー、イーティ、スーツ

城の設定を適当に考えたためできてしまった不遇な3人組。彼らはきつと維持の大変なマツキノ城を守るために陰から頑張っているんだよ！今のところ出番は食事の時ぐらいしかない。

フレイヤが吹っ切れたときの7年後

起動要塞スピリット・オブ・フレイズウィル

7年の歳月をかけて魔法と気と陰陽術と科学の融合によって魔改

造されたマツキノン城。その主砲は50キロ離れた先からでもヴォルデモートを消滅させるほどの威力を備え、6本の足で自立歩行が可能である。不可視かつ探知不能であるため、どこから来るか分からない主砲と、いつ撃つたのか分からないミサイルに闇の陣営は恐怖する。

機甲機動骨格式《アーマード・モビル・フレーム・ソルジャー》
AMFS-00typeε

フレイム・グリント

7年の歳月をかけて魔法と気と陰陽術と科学の融合によって作り出された強化鎧という名の夢の巨大ロボット。

式神技術から、分身の術とその巨体を動かす操機術を、防御機構として攻撃を受けなかったことにする変わり身式神と、ダメージを肩代わりする身代わり式神を取り入れている。

魔法技術からは防御術、自己修復術、反射術、硬化術、機動性を上げつつ、打撃時の威力を上げる重量自在術を取り入れている。

科学からは強化チタン合金製のフレームや動力系、武装、内装の電子機器、戦闘支援AI技術を取り入れている。

例えばバッテリーが尽きても操縦者の気力が尽きることがない限り戦い続けられる「根性システム」を搭載している。

フレイヤの脳が目録の電波によって侵されたために生まれた狂気の兵器。ライフルからはビームが出、レールガンの狙撃銃が火を噴き、打ち出すパイルは相手を光にし、ミサイルは地の果てまでも相手を追いかけて消し炭にし、ブレードは鋼をバターのように切り裂く。元ネタの白い悪魔の速度で飛び回り、ザクマシンガンでも傷一つつかない。さらに、フレイヤ搭乗時には瞬間移動も使いこなす化け物。適性がないと体がミンチになるが、耐えられるのはドラゴンボール方式の訓練をこなしたフレイヤのみ。初起動時でも1秒間に16人のヴォルデモートを葬り去ることができる。戦闘を重ねることに進化していく。

自律改良型人工知能ADA

魔法と陰陽術とプログラミング技術の融合によって誕生した「戦うたびに学び、進化するAI」クーデレ。気の理論が入っていないので「根性システム」に否定的。でも、限界を超えて戦う操縦者にはデレる。例えば彼女がプログラムだとわかっていても、操縦者はやる気を出してしまうので、「砕け散るまで戦う」ための燃料となることこそが彼女の真の使命である。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

「ハッ！」

なんだかよく分からない電波を受信してたような気が。AMFS？
なんだいそれは？

それにしても便座が冷たい。もうだめだね。ウォシュレットのない生活を6年も続けてこれたことに感動するよ。とにかくウォシュレットが発明されるまで便座を温める魔法とお尻をきれいにする魔法を習得して誤魔化すしかないか。

マーリン爺さんに帰り道を聞いた俺は変わらず大広間に戻って来る。扉の前にはウォーデイが立ってた。身だしなみはいつものようにきれいなものに戻っている。

「準備のほどは整っております。お嬢様。」

と、広間のドアを開けてくれる。
扉の向こうにはコック服、メイド服、作業着を着た屋敷しもべが立っていて、俺にお辞儀をしている。ウォーデイが3人の前に進み出た。

「こちらの3名が我が家の屋敷しもべにございます。」

「料理を担当いたしますヌーにございます。」

「きゅっ給仕と館の清掃を行っております、イ、イーティでしゅ。」

「そどまわりをたんどういだしますすーづでございます。」

いやー屋敷しもべってぼろを着てるんじゃないの？みんなちゃんとした服を着てるんだな。一人ぐらいトンでいらっしやる方がいるかと思ったけど、ふっーだったね。そして、メイドのイーティ。分かっているじゃないか！

「ほへー。みんなきちんとしてるんだね。私はフレイヤ。コンゴトモヨロシク。」

3人とも俺があいさつしたことに驚いているようだ。ウォーディだけはいつも通りのポーカーフェイスだが目が笑っているぞ。

「ご、ご主人様があ、挨拶だなんて、そんな畏れ多い。」

「こまけえこたあいなんだよ！それよりもみんなきちんとした格好してるね？しもべ妖精は衣服を貰えないって聞いたんだけど。」

俺の対応に戸惑っている3人を制してウォーディが答える。

「確かに我々が衣服を下賜されるということは即ち、解雇されるということです。しかし、「借りる」ならばその限りではありませんし、衣服ではない布や、糸、ボタンを頂いても問題はない。そう先代様は仰っていらっしやいました。それらの布でまともな衣服を作るようにと。」

「なるほどねー。先代は弱者を助ける立派な法律家に成れるよ。」

先代って結構まともな人種だったんだね。

「まあ、それは置いといて飯にしよう。ああ、皆も椅子に座るんだよ？異論はあるかもしれないけど、今日は特別だ。私とおなじものを食べて、マツキノンの家の再k・・・じゃなくて、今まで君たちがこの城を守ってくれたことのお礼をしたいんだ。」

あぶないあぶない。マツキノンの家の再興とか言っちゃったら結婚しろって言われるじゃん。まだ俺の心は日本男児だからね。

俺はウォーディに誘導されるまま一番奥の最上座まで誘導される。つていうか遠い。

ウォーディが椅子を引き、俺はそこにかける。

ウォーディ達は一礼して椅子に座った。じゃあいつとくか。

「手を合わせてください。」

俺が手を合わせると4人は戸惑いながらも手を合わせる。

「いただきます。」

「・・・いただきます。」

俺が倒れたのを心配したのか、食事はあんまり濃いものじゃなかった。良く火を通した野菜とか鶏肉はあっさりしてうまかった。イギリスの飯は何か脂っぽくて苦手だったんだよね。リーマンからもらった醤油とかで騙し騙しやってたけど、コックのヌーに日本食を作ってもらえるように頼んでみるかな？

「ヌーさんはどんな料理が得意なんだ？」

「ご主人様の望むものなら何でもお作りいたします。」

ヌーさんに話を振ったがこれじゃあ続かん。メイドのイーティはどうだ？

「・・・なあ、イーティは何か得意なこととかある？」

「ひゃっ！ひゃい。メイドの仕事が得意でっす。」

「裁縫とか掃除とか？」

「そ、そうです・・・」

黙ってしまっイーティ。俺何か悪いことしたか？

「スーツはこの城のどこが好き？」

「このしろのそどはみんなすぎだす。」

「いや、担当場所・・・なんでもない。」

しかし・・・会話が続かん！

「しもべ妖精はこのように主人と同席することなどございませんでしたから、3人ともなれていないのでごさいます。お気を悪くならなideくださいます。」

気まずいよーどれぐらい気まずいかっていうと、あのしもべ妖精と主人は馴れ合わない方がいいと言っていたウォーディが俺のフォロ―に回ってくれるぐらいきまずい。葬式か！ええい！こうなったら

どんどん話を振っていくぞ！

「ヌーにはさ、これから新しいタイプの食事を作ってもらうことになる・・・かな？」

「いかなるものでもお作りいたしましょう。」

「日本食なんだけど。大丈夫？」

「日本食でございますか？」

お、こいつあれだな。難しいものを提示されると燃えるタイプだな
なんか目の色が違うし。

「うん、こっちの料理とは根本的に違うから苦労するかも。まあ、
材料からして違うし、こっちじゃ手に入れないものもあるからこの
夏休みに日本に行っているいろいろ買ってくるよ。日本食はわたしの精
神衛生の為には必須なんだ。」

「かしこまりました。」

うんうんと頷く俺。近い将来日本食には苦労しなくなるかもな。次
はイーティだな。

「イーティにはそうだね・・・しばらくはスーヅと一緒に魔法薬の
原料の薬草とか育ててもらおうかな？ いいかい？ イーティ、スーヅ
？」

「は、はい。分かりました。」

「わかりますだ。」

おお、こいつらもなんか生き生きしてきたな。

「イーティには薬草の栽培記録を取ってもらいたいんだ。肥料は何にしたかとか、何日に何インチ伸びたとか、ああ、センチでも書いてほしいね。葉っぱはどうだとか、花は何色かとか・・・まあそんなに細かいことまで書かなくてもいいけど、できれば絵付きでお願いしたいかな。後は進行状況にもよるけど、顕微鏡とか、マグルが使ってる分析機械とかも使ってもらうようになる・・・かな？」

まずはプリンス本のメモを回収して、分析しないとね。前から思ってたけど魔法使いの世界って「学」とかあるけど、どれもこれも個人技能の域を出てないんだよね。明確な学会とかないし。まあ、魔法界全体が「技能」その人の価値」の域から脱し切れてないから仕方ないんだけど、このままだと絶対にマグルに負けちゃうよね。一つ一つは強力でも圧倒的に普及性が悪い。マグルの世界だと買ったら済むものが、魔法使いだとその魔法を使うために一から訓練しないとイケないとか効率が悪い。あーアイポッドほしーわ。

魔法が絡むと不確定要素が多すぎて難しいところもあるんだろうけど、魔法界にもできるだけ科学とかを取り入れて「権威の誰かが言っていた」じゃなくて、「数千回の実験の結果、こうなると思われます」にしていかなくちゃいけないと思うんだ。

「イーティにやってもらう仕事はもしかしたら無駄になるかもしれないけど、一方で魔法界に名を遺すことになるかもね？」

「が、がんばります。」

「とりあえずはマンドラゴラを栽培してもれおうかな？期限は来年の11月位かな？最悪4月に間に合えばいいよ。」

俺がバジリスクに石化を食らわないとは限らないからな。来年は伊達メガネ必須だな。最悪軍用暗視スコープでもいいかも知れん。直接で死亡。間接で石化。ならば、一度外部処理された映像が映っている画面はどうなんだ？痺れる位なんだったら逃げることもできるだろう。魔法の監視のない入学前の今にコマンドー式の買い物に行くか。銃器も欲しいな。夏中に錯乱の呪文と目くらましの呪文を覚えねば。研究用の機材は・・・コピー系の魔法を覚えてからでいいや。無理に奪って行ったら研究者がかわいそうだ。

あとはハーマイオニーさんの石化を解いてあげてホグワーツ特別功労賞を上げたいね。これぐらいの改変なら大丈夫だろう。

「スニッツにはイーティの手伝いと後もしかしたら城の補修とかをしてもらうかも。わたし練兵場使いたいし。」

「しょうちいたしまづだ。」

多分練兵場っていうぐらいだからそれなりの防御はしてあるんだろうけど、かめはめ波とかはどうなんだろう？

まあ、そんなこんなで、食事会は今まで大変だったろー、いえいえそんなことは、ぬかしおるはっはーな感じで和やかに終わったわけですよ。

食事の片づけも終わり、3人が立ち去った大広間には俺とウォーディだけが残った。

「さて、ウォーディ、用意はいいか？」

「かしこまりました。ございます。」

分厚い羊皮紙とメモを取り出すウォーディ。

「じゃあ出て行ってもらおうかマーリン。ちなみにほかの絵とか外部に話を漏らすことのできる者はいないな？」

と、おれは最上座の席から降り、後ろの壁のフレスコ画に呼びかける。

「おらんよ。まったく。漏らさんというておるうに・・・」

フレスコ画からマーリンだけ抜け出し、壁の向こうに消えてゆく。マーリンの居た所はくつきりとその形のシルエットだけ残った。

俺は癒しのソファーにどさっと寝ころぶと、「原作」の話をし始めた。

メモにはできるだけ余裕を持って書き込んでもらい、思い出したことを順次追加していく。時たま手を休めて矛盾がないかどうかチェックしてゆく。しかし、こっちに来てから6年近く経っている。俺はこの世界がハリーポッターの世界だとは知らなかったから記憶も結構あやふやだ。こんなときこそ夢の中で原作をチェックできた方がいいのに。

でもそれは逆に怖いな。「原作」にとられ過ぎて「現実」が見えなくなるかもしれん。まあ、背景情報とかは必要だ。モブキャラの名前とかもうほとんど覚えてないし、覚えていても名前だけだ。

俺とウォーディは遅くまで未来情報を書きとめ、とりあえずのプランを話し合った。

明日には、ダイアゴン横町に行こう。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

これ伏線になりそうだなと思ったものは忘れないようにしたいです。

フレイヤマツキノンは賢者の石を知らない？（前書き）

デストロイ！続きを読む他の作者さんの作品が更新されてな
かったら、そのストレスで更新してしまう。あはははははははははは
ああはははははは

フレイヤマツキノンは賢者の石を知らない？

「こつちで確認しろとか無茶なことを」

ああ、また夢か。今日は何秒いられるんだ？外は墨を流したように真っ暗で、窓に映る少女は困惑した目でこちらを見ている。

仕方がないと、本棚から「賢者の石」を取り出すが、手に力が入らない。

「時間か、だがハリーに関わらないなら問題はないのだろう？夢の中の情報なんてそつちと変わらんよ」

窓の少女は肩を落とす。

・・・もうちょい粘れよ夢の中の俺。一説には起きてる時よりも寝てる時の方が昔のことを思い出しやすいらしいぜ？まあ、次回に期待だな。

目を開けた俺は昨日の服のままでソファーに寝ていた。布団が掛けられている。昨日倒れたときと変わらないな。

広間のテーブルには昨日メモった大量の羊皮紙がある。とりあえず順次修正していくとして、おおまかに歴史に変更がないかどうかウオーディと連絡を取り合うつもりだ。

もちろん途中で奪われる可能性も考えてホグワーツからふくろう便

を送るなんてことはしない。昨日ウォーディーに話しながら、休憩を利用したりして俺は目録でちよつとした実験をしていた。

実験で確認できたことは5つ。

目録の絵はその品物の「ページを開いている現在」の情報が反映される。つまり、本などではページを開くと目録のその本の絵はそのページを開いた状態になる。しかも目録の絵は写真並みだ。本を丸ごと写真記憶できる可能性があった。

俺はウォーディーには書庫に行つて指定した本を開き、10ページだけめくるように指示していたので、目録の絵は動画のように変わっていた。ウォーディーがそうしている間、俺はソファアから降りていたが頭は痛くならなかったし、目を閉じるとめくつたページの細部まで思い出せた。そこから考えられる結論は頭にかかる負荷はどうやら「情報量」依存じゃなく、「ページ依存」だということだ。たぶん、目録は持ち主が新しいページを読むたびに「決まった分の容量をまず確保して、そこに情報を足していくよう設定したようだった。まあ確かに細かい内容の訂正とかはその方が脳の負荷は少ないんだろう。最初にこの目録を作った先祖はできるだけ情報の多いもの、つまり重要なものだけを載せるつもりだったんだろう。現実には一文しか書き込んでいなかったものもあったが、そういうのは処分したから、もう無駄はほとんどない。しかも、ページを開いている間は「現在」として扱われるので、目録を開いたまま、すべてのページを捲れば、一冊丸ごと写真記憶できた。こんなことをしていたら脳がパンクするかもしれないが、いざとなれば物品の所有権を放棄して、目録に再登録し、そのページを読まないようにすれば、俺の脳は負担から解放される。というか、一度そうやって覚えた本をとじ、もう一度目録のページを読むと映像として覚えた情報はすっぱり消えてしまい、頭には表紙の絵しか残らなかった。これは気

をつけねば。

それに倒れた理由も分かった。内容が1文分しかなくても、1ページごとに数万文字と絵の分の容量を一つとっていたんだ。一時的とはいえ膨大な記憶領域を無理やり削り取られた脳が限界を超えてしまったんだろ。癒しのソファに座ってなかったら頭パーン！ってなっていたね。確実に。っていうかあの1001枚の無駄な写真のせいだな。絶対。くそ！アイツら殺す。あ、もう死んでるのか・・・呪ってやる！まあ、普通じゃ痛くてそれだけの領域を提供できないけど、あの時の私は調子に乗って腕輪とソファの禁忌のデスコンボを使ってたからね。自業自得だ。

さらにもう一つ。「物品はマッキン家のふさわしいところに送られる。」というルールだ。俺は本を「書庫にあった」2冊用意した。つまりこの本は書庫にあるのがふさわしいことだろう。俺は、一つは普通に「戻し」、二つ目は「この本はウォーディのところにあるべきだ。」と念じながら戻した。結論から言うと実験は成功。本は次の瞬間にはウォーディの手に収まっていた。

次に俺はウォーディの手の中にある本を「呼び出し」、次は普通に「戻し」た。本はウォーディの所には行かず、書庫に戻っていった。つまり、ウォーディの所に行ったのは俺がふさわしいと願ったという「特別な」事情があったためで、本のあるべき場所がデフォルトの書庫から変わったわけではないということだ。

これらの事実から、俺とウォーディはホグワーツとこの城間のふくろくに頼らない通信手段、そして遠隔地の監視方法を手に入れた。

俺とウォーディは登録したメモ帳を取り出したり戻したりで通信できる。メモ用紙を切り取り「ウォーディへ」と書いたら深く考えな

くてもちゃんと届いた。まあこれは、目録上にメモとメモ用紙の2つの容量が必要だから一見無駄だが、ウォーデイがそのメモ用紙に返事を書けば目録を見ている俺は返事を得るためにメモを呼び出さなくていいし、ウォーデイの方でメモを破棄すればページは消え、俺がソファアーに座れば容量は解放されるので問題ない。

いや、この際いつそのことウォーデイ側に受信用メモ帳を用意しておいて、俺の質問が書いたメモ用紙が届けばそこに質問を写し取り、回答を書くようにすれば、メモを受け取ったことの返事にもなるし、回答を書いたメモ用紙を破棄する必要もないので俺が見落とすこともない。これなら俺の方はメモ帳を登録せずに済むし、送るメモ用紙は捨てるの前提なので別に屑キレでもいい。使われた送信用メモの分の容量はこまめにソファアーに座ればリセットされるから問題ない。たぶん。なんか地味に寿命削りそうだけど。

手の内をさらすことになるので他人に使う気はないが、いざとなったらピンポイントにメモを飛ばして救援等を求めることも可能だ。

次に遠隔地の監視だけど、これは単純極まりない。遠隔地の情報が反映されるものをその場所にあるのが適切だと思ふことで設置すればいい。始めは小枝か何かを置いておいて、それに足形が着いたりするのを目録で監視しようと思ったが、やっぱカメラだよな、どっちかというと画面にリアルタイムで映像が映るデジカメ。でもまだいいのは発売されてないし、でんちが・・・っていうか鏡でよくね？って思ってたために鏡は登録してないかと思ったが、なかったの、ウォーデイに手鏡取ってきてもらった。手鏡を持った俺は、この鏡は俺の目の前にあるのがふさわしいと念た。俺の前に四角い手鏡が現れ、俺の姿を映す。目録を見ると、鏡の絵の中に目録を覗く俺の姿が描かれ、現実の俺が手を振ると、目録の俺も手を振っていた。

その後調子に乗った俺は孤児院やら出版社やらに手鏡を送り込んでいったが、あるとき唐突に頭が痛くなり、記録映像の容量限界に達したことを知った。

俺は一度鏡の所有権を放棄し、目録からページを消した後、ソファ―に座った。

「なるほど、目録に鏡がないのはこういうわけか。常時の監視はできないと。でも任意の場所に目を滑り込ませられるというのは非常に魅力的だな。」
と納得した。

「っていうかまた「裏事情」を見抜けずに墓穴を掘ってしまったんだが・・・睨むなウォーディ。」

ウォーディにお説教を食らいました。まあ、そんなこんなで昼から夜までずっとこんな調子でやっていたので、俺はソファ―で寝ていたのに気付かなかった。というわけだ。

フレイヤマツキノンは賢者の石を知らない？（後書き）

ストレスが原因で書いたせいでなんかへん。読み返しても意味が分からない。使うかどうか分からない設定を追加してしまった。次話！フレイヤ、ダイヤゴン横丁に立つ！こうご期待。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？（前書き）**

前話はいませんでした。まともな精神状態じゃなかったと反省しています。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

「うう…あたいつてば てんさいね…」

「うああ！」

キヨロキヨロと辺りを見回す俺。

「あるえゝ（・ε・）」

「おはようございます。御気分の方はいかがですか？ずいぶんと、うなされていらっしやいましたか。」

「え？」

俺、起きてたんじゃ？

「わたし…寝てたん？」

「今起きられた所でございますよ？」
ウォーディは朝食の用意をしている。

「昨日の夜実験したよね？」

「…しておりません。」

「え？」

「ホグワーツからの連絡法とか、遠くの監視法とか、写真記憶とか！ウォーディにも書庫に行ってもらったりしたじゃん！」

うわ…ウォーディがなにか可哀相なものを見るような目でこっちを見ている。

「誓って申し上げますがしておりません。」

「…」

俺とウォーディは互いにお互いの目を見ている。ウォーディの大きな目には焦った顔のわたしが映っていた。

「ズバリ！わたしが倒れた原因は脳記憶域に対する過負荷である！」

ビシッつと左手でウォーディをを指差す俺。

「…違います。」

それにお茶を注ぎながら冷静に返事するウォーディ。

「…あるえ（・ε・）」

なんか気まずい。昨日まで築き上げてきた何かがガラガラと崩れていく。

「だって…」と言って俺はウォーディからメモ帳を貰い昨日のようにウォーディに送る。

「所有！転送！」

ボシュツ音がして、ウォーディの手元にメモが届く。

「おお！お嬢様！？これは！」

メモを送られたウォーディは初めて電話を使った子供のように驚く。

「ウォーディそのメモ裏返して返事を書いて。」

ウォーディがメモに返事を書くと言録の絵が変化していく。質問の内容は「浴室の特徴は？」だ。わたしは浴場に一度も言っていないのでなにがあるのかも知らない。

「湯の注ぎ口かグリフォンの頭…？」

ウォーディは驚いてこっちを見る。もちろんこっちからウォーディの手元は見えない。

「ほら！」

といって俺はウォーディに目録の絵を見せる。

「…申し訳ありませんが私には読めませんので。」
そつえば当主にしか読めないって…

「…もしかして私は他人から見たら白紙の本を熱心に読んでる痛い子？」

「残念ながら…」

しよぼーん（・ω・）

その後、俺は俺とウォーディがやったと思っている実験について話していく。

反しているうちにいろいろ矛盾点が見つかる。例えば鏡、目録の中に鏡がありました。映像も映っていたけど頭は痛くならない。ウォーディ曰、魔法使いの写真や絵と同じで魔力は消費しないらしい。

写真記憶は無理だった。

「…とにかく昨日は実験はしていないと。」

「目録の酷使で御倒れになったお嬢様がそのような実験を行うのを私が御止めしないはずがないじゃないですか！」

確かに…改めて考えるといろいろおかしい。

「なんという夢落ち・・・じゃあ、わたしが倒れた原因は？」

「魔力切れにございます。」

「脳がパンクしたんじゃないくて？」

「目録は魔力を削ると書いてあったのでは？」

「でも、脳みそに刻まれて忘れないって。」

「恐らく比喻でございましょう。」

魂に刻み込むと同じレベルか・・・

「負荷って情報負荷？」

「魔力負荷にございます。」

確かにウォーディは情報負荷とは一度も言っていない。

「頭痛くてだるいのは脳負荷の後遺症じゃないの？」

「典型的な魔力切れにございます。」

「原作に魔力切れは…あつたかも…」

っていうか死の呪文を連発してた魔法使いが二人しかいない時点で魔力の容量的なものは裏設定として存在していたはず・・・かな？つまり、俺は盛大な勘違い野郎だったと。ああ、野郎じゃないのか、勘違い娘か。

「…お嬢様。」

ウォーディが憐れむような目で見てくる。

「…何も言わないで。」

うおおああああ！恥ずかしい！

両手で顔を押さえて床の絨毯を転がる俺。

「…お嬢様は魔法界を揺るがすほどの情報をお持ちになり、自身についてお悩みになり、マッキノン家当主という重責までも負っておられます。そのような悪夢を見ても致し方ないかと。差し出がましいようですが、原作という枷に囚われ過ぎず、もう少し自由にして頂いてもよろしいかと。」

おおあああい！ウォーディめっちゃ心配そうな顔をしてるし！違うから！わたし正常だから！

「トウツトウルー！出でよ！ドクター・ペーパー！」

目録からカルテ用紙が現れ、わたしの診断結果がカルテに滲み出てくる。

『フレイヤ・マッキノン Age 11 Female

診断結果

身体

―魔力切れ

込み

安静状態にて3日、癒しのソファ―にて3時間で回復の見

精神

―うつ病

理由のない罪悪感

脳への後遺症という疾病妄想

過度の被害妄想

論理の飛躍

うつ病に伴う身体症状

―性同一性障害

軽度。問題無し。経過観察』

「だめでしたー!!」

うおー。そういえば前世で真面目で責任感の強い、信念の人ってやつがうつになってたけど、俺が…

orzしてる俺にばんばんと手を当てるウォーディ。

「魔法界に転生したけれどわたしはもうダメかもしれない。」

「大丈夫でございますよ。お嬢様。」

ははは…笑っちゃうね。自分では責任なんてスルーしてしよい込んでないと思ってたけど、がつつり背負ってました。

もう過度に原作とか気にしないようにしよう。もうハリーさん等がどうなっても知らん！ダンブリードに任せておけばいいのさ。わたしが一々面倒を見なくてもいいし、もしあいつらが負けたらこの城に引き籠っちゃえばいいじゃん！わたしが「服従の呪文」を喰らわない限りこの城は探知不能、侵入不能の不落要塞だからね！ご先祖様グラッツェと言いつつ寝たきり生活をしてればいいのさ。

前話の前書きからしてデデデデストロイとか電波に汚染されてるじゃん。？話だったし仕方がないね。

「そうだダイアゴン横町行こう。」

ウォーディは俺が元気になったことを喜んでいるが、困った顔をする。

「よろしいので？今日は…」

「いいんだよ。特にすること無いしね。」

手を洗って朝飯を食ったわたしはウォーディに先に行って貰い、瞬間移動で追いかけた。まだダイアゴン横町に行ったことのない俺は煙突飛行が出来ない。次からは行けるだろう。

俺はパンクなＴシャツに腕輪とベルトとナイフを装備し、ゾクのは

ちまきをバンダナにしている。ブラ？わたしはサラシ派じゃないし、女の子だからしてるに決まってるじゃん！

それはそうとこの鉢巻き、「服従の呪文」に対しても耐性をくれるらしい。流石、かみから直接「くいあらためよ」と言われても耐えられるだけある。これをしている限りわたしの城は安泰だ。

腕輪とソファアのデスコンボで痛い目にあったわたしは、ソファアに座る時は必ず鍛練の腕輪を外すようにしている。が、それ以外の時は四六時中つけている。そのお陰で身のこなしとか地味にいろいろ上達している。

「おーここが」

「漏れ鍋にございます。」

俺の前には汚いパブ。反対側にはレコード店。人の流れは不自然なほどレコード店に集まり、誰も「漏れ鍋」に見向きもしない。

だが時折人ごみの中から奇抜な格好をした人が店に入って行ったり、いかにも魔法使い風の人が出てきては「姿くらまし」していた。しみじみとパブを見ていた俺は後ろに控えるウォーディに視線を向ける。

「ウォーディはダイアゴン横町への入り方を知ってるんだよね？」

「もちろんでございます。」

いつもの調子でウォーディは礼をした。

「手持ちのお金は？」

「3ガリオン6シッケル5クヌートと、きっかり50ポンドでございます。」

ガリオンとかは分からないけど、50ポンドは6千500円前後。ハリーの杖は確か7ガリオンだったか？日本円でどれくらいか分からないな。

「漏れ鍋でコーヒー飲んでお金の価値を大体調べてからグリーンゴッツでお金を下ろそう。後、グリーンゴッツではポンドにも両替出来るんだよね？」

「恐らくは可能でしょう。」

俺は漏れ鍋へ一歩踏み出した。

「じゃあコーヒー頼んで、隅っこに場所借りてソファー出してのんびりしよう。」

「畏まりました。」
ウォーディが俺について来る。

わたしは、ほいと目録から透明マント（マーリン製。性能はハリーの以下高級市販品以上）を取り出しウォーディに被せ、登録したメモ帳を渡す。マントの下ウォーディの顔は多分驚いているのだろう。

「今後の為にわたしが「歴史あるマッキノン家」の当主であることは内緒にする。校長しか知らないし、彼は余計なことと言わないからね。だから、今から外では私はマグル育ちなので偶々名家と苗字が

同じなただの「フレイヤ・マツキノン」。オツケー？」

ウォーディはすぐに事情を察したのか、目録の中のウォーディに渡したメモ帳の絵には綺麗な字で、

「承りました」

と、書かれていた。

さあ、誰も知らない生き残っちゃった女の子の魔法界デビューだ。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

次話に出てくる貨幣単位は妄想です。別解釈もあるかも。クイデッチ今昔と魔法生物とその生息地の考察では、英語版で1クヌート1円、日本語版で2円ぐらいという結果が出ていますが、多分原作中の本はハードカバーのイラスト付き豪華版なので、マグルの世界で売られているなんちゃって版よりだいぶ高いはずだというのが私の持論です。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

あの人に会います。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

カランカランと乾いた音を立ててベルが鳴った。

「いらっしやいませ」と言う頭のさびしいマスターに俺は近づいて行く。

「おはようマスター。わたしはフレイ。マグル育ちなんだ。今日魔法界デビューってやつさ。ひよつこだがこれからよろしく。」
と、右手を差し出す。

「おお、これはご丁寧に。漏れ鍋店主のトムだ。」
と、トムは俺の手を取り、握手した。

「ところでなんだけど、こっちの物価が分からなくてね。シッケルやらクヌートやら・・・ちょっと教えてくれないかい？コーヒーツ頼むよ。」

「そついうことならお安いご用だ。25クヌートだが、特別だ。20クヌートでいいよ。」

「クヌートって銅貨だっけ？5枚しかないよ。銀貨は6枚あるんだが。」

「十分だ。1シッケルは29クヌートだからな。」

俺はポケットに手を入れるふりをしてウォーディから1シッケルを受け取る。

「これで良いかい？」

と俺はカウンターに1シックルを置くと、トムはお釣りを渡してきた。

「ほら、釣りの9クヌートだ。ちなみに金貨のガリオンは1枚で17シックルだ。」

「ありがとぅ。10進法じゃないから慣れないね。」
俺は手の平を広げて釣りを受け取る。

「マグル育ちの通る道だ。」
トムはがんはれよと俺を見た。

「なるほどね。ところであそこの空いてる所を使って良いかい？自前のソファアで寛ぎたいんだ。」

とおれは釣りの9クヌートから5枚をチップとしてトムに渡す。

「自前のソファアかい？」
トムはじつと俺を見る。俺がどこにソファアを隠しているのだろう
と思っっているらしい。

「ああ、どこでも運べる形見のソファアさ。」
・・・嘘は言ってないよ。

「そういうことなら構わないさ。出来次第コーヒーを持って行くさ。
座って待つてな。」

「ありがとぅ。」
と、俺は薄暗い店の奥、隅っこの空いたスペースにさりげなく癒しのソファアを呼び出し、透明なウォーターディに合図して一緒に座る。

コーヒー一杯500円として1クヌート20円、1シッケル600円、1ガリオン1万円ぐらいか？為替レートは分からないから物価が高いのか安いのか分からないな。

向こうでは確かクイディッチ今昔とかで魔法界の貨幣体系が考察されてたけど、向こうで出版された本とこっちの原本は少なくとも表装とかサイズとか違うしな。当てには出来ない。

そうこうしている内にトムがコーヒーを持って来てくれていた。

「いいソファーだな兄ちゃん。」
嬢ちゃんです。

「そうなんだよ。座るかい？」
コーヒーを受け取った俺はトムに尋ねる。まあ、座らないだろうなとは思っているが、社交辞令だ。それにしてもコーヒーはいいにおいだ。落ち着く。

「そうしたいが仕事なんだな。飲み終わったらそのテーブルに置いて置いてくれ。」

「分かったよ。」
わたしがそう言うのとトムは満足したように去って行くが、ふと何かを思い出したように振り向いてきた。

「ところで兄ちゃん。横町への行き方は知ってるかい？」

コーヒーから口を離れたわたしは微笑みながら答える。

「聞いてきてるから大丈夫だ。ありがとう。」
ウォーディがいるしね。

「魔法使いの口にするものってなんでこんなにうまいんだろうね・
・長生きするわけだ。」

ソファアの上でまったりモードに入った俺は、1杯目の残りを見えないようにウォーディにやったあと、2杯目を頼んでいた。ぼーっと見ているだけでも、山高帽の魔女、シルクハットの紳士、ターバンの怪しい人、マントの吸血鬼っぽい人、ペイントレード要員の死にかけのカースメーカー、ガチムチの黒人と、いろんな人種がいて楽しめた。

そんなこんなでかれこれ朝からソファアに座って通産で3時間が経とうとしていた。おかしな人間に慣れてしまった俺はドアからやらでかい人影が入って来たのに気にも留めなかった。ましてやその影にいるものなど。

ウォーディと筆談していたわたしはそろそろ出ようと、残りのコーヒーを一気にあおり、バーテンのトムの

「ハリーポッター！」

という声に驚いて思いっきり吹き出してしまった。

「ブフォ！ガハッゲホッ！ゼーゼー。ハリーポッター！？」

口と鼻からコーヒーが垂れ息が苦しい。空気がコーヒー臭い。幸いにも吹き出したコーヒーは目録のお陰で広がらなかったが、「汚れ

ない」目録は雨樋のようにコーヒーをわたしのジーンズに流し込み、容赦なく下着まで濡らした。

「最悪…ゲホツ…いでよ便利な拭布。」

便利な拭布で顔とジーンズを拭くと、コーヒーはシミごと吸い取られた。濡れた衣服はからりと乾いている。最早四次元ポケットな目録。

見るとハグリッドの隣のハリーポッターは蟻にたかられる角砂糖のように揉みくちやにされている。じゃあ、あのターバンはクィレルか？少し落ち着いた俺はウォーディに確認した。

「今日って28日じゃないの？」

「8月1日にごさいます。」と、目録のページが更新される。

「…わけがわからないよ。」

キンクリか？キングクリムゾンなのか？スタンド攻撃なのか？

「倒れられたお嬢様は四日間お目覚めになりませんでしたから。」

「それはヤバいね。ああ、だからウォーディはわたしが起きた時、この世の終わりみたいな顔をしてたんだね。」

なるほどそりゃあれだけ取り乱す訳だ。

「ええ、あの時はもうお嬢様はもう一生目覚めないのと思いましたから。」

なんか忘れてる気が…

「あ！ハガキは！？ホグワーツの！」

目録には冷静な文字で

「期日までに既にアルキメデスが届けております故、ご安心下さい。」

ほつと薄い胸を撫で下ろす。

「良かった。… だけど日付を確認しないで突っ走ったり、目録に毒されてトンデモ理論をぶちかましたり、わたしつか俺つか結構思ひ込みが強い？」

「以後お気をつけ下さい。」

「そうします。しゅん（・ω・）」

ウォーディに暗におつちよこちよいだと言われて落ち込む俺。

俺は、ハリーさんはどうなった？と見上げた。バーテンのトムが俺の方を指差し、ハリーとハグリッドがこっちを見ている。ハグリッドの方は普通だが、ハリーの視線がなんか痛い。あれか、あれなのか？同じマグル育ちだから変なシンパシーを感じているのか？

っていうかトム！聞こえてるぞ！「あの兄ちゃんもここは初めてらしいから一緒に連れていつてやってくれないか？」だと！？ふざけるな！ハーマイオニーより先にハリーに出会ってたまるか！ハリーと知り合いになんてなったら、なまじ「ヴォルさんのせいで一族最後の一人」とか境遇が似ているせいで親友認定されかねん！聞こえてないふりだ。聞こえてないふり。

わたしは瞬間移動を試みたが、結論から言うと無理だった。漏れ鍋と外の間には恐らくマグル避けとかの結果があるのだろう。単純な

結界でも空間を弄らない瞬間移動じゃ超えられない。

「まずいねウォーディ。緊急事態だよ。ポッターに目をつけられた。瞬間移動も使えない。」

「緊急事態でございますね。お嬢様。」

ヤバイ！あいつら近づいてきやがった。っていうかハグリッドでかい！もじゃもじゃ！怖い！

「ウォーディ。ここにマントを置いて一旦屋敷へ。合図したら戻って来い。」

「承知しました。」

とウォーディは小声で答えた。

バチン！

ウォーディが消えた瞬間、俺はウォーディの被っていたマントを掴んでかぶり、音と動作で一見姿くらましましたように見えるようになった。

「え？ハグリッド。消えちゃったよ？」

「姿くらましか？いや、ありえん。あいつも1年生だろう？」
吃驚している二人をマントの中から見るわたし。

二人がなんやかんや問答した後、裏庭に出て行ったので、俺はクイレルの後ろに歩いて行って、マントを取った。ハリー達が私のために時間を食ってしまったのだ。わたしもさりげなくこいつをしばらく

く釘付けにして「賢者の石」の回収のために時間を稼いでやろう。

っていうかこいつのターバンの裏ってヴォルさんなんだよな？しかし！ゾクのはちまきなめんなよ！開心術なんて効かないからな！安心感ばねえwwかみにも特攻できるわ。

「さっきのでかくてもじやもじやで怖い人と、黒いちっさいのは何だったんです？」

「うひゃい！」

おーおー驚いてやんのクィレルのヤロー。

俺を売ったトムも俺の再登場に驚いている。

「兄ちゃん「姿くらまし」したんじゃ？」

「ははっトリックですよ。わたしが「姿くらまし」何てできるわけではないじゃないですか。爆竹とこれですよ。」

爆竹じゃなくてしもべ妖精の転移音だけどね。トムは俺の持っている透明マントを見る。

「これは・・・透明マントかい？」

「そうですよ。わたしに手紙を持ってきた人の真似を試みたんです。魔法使いって案外手品に弱いんですね。」

「はは！これは一本取られた！」
わはは！と大声で笑いだすトムから視線を外した俺はクィレルに話を振る。

「さっきの人たちと仲が良さそうでしたが、お知り合いですか？」

「わ、私は、ほ、ホグワーツで、や、闇の魔術に対する・・・ぼ、防衛術を教えていますので。も。森番のは、ハグリッドとは、し、知り合いです。」

実に聞き取りにくい。こんな演技はやめてほしいね。

「この方はホグワーツの先生のクイレル教授だ。それで、さっきの
でかい大將がホグワーツの森番、ルビウス・ハグリッド。」

トムがフロアに回るので、反応しておく。知ってるのにもう一度
話すなんて疲れるな。ホグワーツではいつも本読んでる無口キャラ
で行こう。そうしよう。いまから小声で「そう。」という練習をし
ておこう。百万回生き返ったぬこを読むのもいいかもしれない。

「へー、同僚だったんですね。っていうか先生だったんですね。9
月からよろしくお願いします。」

ぺこり。クイレルはどこかへっというかグリングッツへ行きたそう
だが、そうはいくか。

「まあ、さっき言った二人も十分有名だがな、ハリーポッターには
敵わねえな。」

トムが出っ歯を出してにやりと笑い、胸を張る。あなたはハリーの
なんなんですか？モブ男め。

「ハリーポッター？すいません。マグル育ちなんで。クイレル教授
は良くご存じなんですか？」

クイレルは中庭の方を見ているが、こんなにやりたいことがバレバ
レの奴だとヴォルさんも大変だ。

「へ？あ、ああ、よ、よくご、ご存知です。はい。」

あーこいつからかうのおもしれーわ。自分、DSですから。

「おいおい兄ちゃん。あんまり先生をいじめるもんじゃないぜ。」

この後トムが「名前を言うてはいけないあの人」と言った数二十数回。13回目からめんどくさくなってやめた。クイレルは中の人に急かされてるのかだんだん顔色が悪くなる。

「へー。すごい英雄だったんですね。あのやせっぽっちの黒髪のクソガキ。」

「おいおい。英雄様に対してひどい言いようだな。」
トムは苦笑する。

「自分毒舌ですから・・・ところでクイレル教授はどちらに？」

「ぐ、グリーンゴツツまで。」
こうなんか口から魂抜けかけてるよ。

「そうなんですか、お引止めしてすいません。わたしも買い物があるので、ここで失礼します。」

俺はトムとクイレルにぺこりと挨拶するが、頭を上げたときにはもうクイレルは中庭に走って行っていた。

「おう。またな。」

と、トムが言い、俺はソファアを回収に行った。

ソファアを回収し、裏庭でウォーディを呼び出すか。と思って裏庭に進んでいた俺は急に目の前に現れた壁にぶつかった。

「いて。何だ？」

「おい気をつける。って、さっきの小僧じゃねえか？」
なんかはるか上から声が聞こえる。

俺は散歩下がつて、上を見上げると、そこにはモジャンボ。

「・・・」

いや、リアルで見るとすごいわこれ。らーらー。ー、らーらー。ー。こ
とーばにーでき。ーい。グリンゴツツのトロツコで気分悪くなつて
リポD飲みに来たんだっけか？ハグリッドが気分悪くなるグリンゴ
ツツってどんだけ・・・行きたくなくなってきた。

「おめえ一年生だろ？一年生なのに「姿くらまし」ができるのか？」
ああ、めんどくせえけど、もう一度言うか、

「透明マントと爆竹でそれっぽく見せただけの手品ですよ。あなた
たちが慌ててる時も側に居ました。」

ハグリッドは驚いた顔をしているが、すぐに不機嫌そうになる。

「なんで隠れる必要がある？」

ハグリッドはいけすかねエ野郎だと思ってるらしいが、こっちは
乙女なんだけどなー。まあバンダナジーンズでパンクTシャツに・
・絶壁だし。間違えられてもしようがないのか？でも髪は長いし。
いや、よそう。トムも勘違いしてるようだし、学校では女の子らし
くしてればハリーも「漏れ鍋で出会った男の子」だとは分かるまい。

「いや、知らないでかいモジャモジャの人がずんずん近寄ってきた
ら逃げたくなるでしょ。」

ハグリッドはちょっとショックを受けたようだった。目が泳いでいる。

「まあ、俺のことはええ。でもハリーのことは避けないでやってくれよ？あいつもお前と同じマグル育ちでよ、ひでえめにあってきたんだ。友達もいねエし、ホグワーツでは仲良くしてやってくれ。」

全力で「NO」と言いたいと言えないのが日本人の魂が入ったイギリス人の私。生粋の日本人なら「ニホンジンエイゴワカラナイ」って誤魔化せるんだろうけど、くやしい！

「はあ、まあ機会があれば。」

前向きに検討しますとは言わない。イギリスではこの言い回しが通じないことは検証済みだ。こいつら容赦なく「Yes」だと思ってくるからな。May beとかProbablyで誤魔化すしかない。

「そうか、よろしく頼むぞ。」
「だめだったー！」

はあ。とハグリッドと別れた俺は裏庭にきた。他人を呪わば穴二つ。ハグリッドの任務が円滑にいくようにクイレルの邪魔をしたら俺がハグリッドに絡まれたでござる。

とりあえずウオーディを呼び出して、グリーンゴッツに行こう。魔法薬の薬草の種とかも買わないといけないな。イーティたちにもメモを送っている聞いてみるか。

「来い！ウオーディ！」

バチン！

「お疲れでございますね。」

「人を呪わば穴二つ。クィレルの邪魔をしたら帰ってきたハグリッドに絡まれた。」

ウォーディは肩をすくめる。

「災難でございましたね。」

「これもシナリオの為さ。」

俺が目くばせすると、ウォーディはどこからともなく取り出した長いステッキで、一つの煉瓦を3回叩いた。場所覚えとこう。

目の前の煉瓦の壁はパズルのようにカチカチとアーチになり、ダイアゴン横町への道が開けた。

「さて、行くか。」

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？（後書き）**

フレイヤはまだツルペタです。AAです。だがそれがいい。

フレイヤの存在がわずかに状況をずらしていく。そして少しずつ巻き込まれていくわけです。

クイレルがフレイと会話できるのはマッキノン家の子孫のフレイヤではなく、別人の魔法学校1年生の男子生徒だと思ってるからです。そういう理屈なわけです。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

左手に原作を右手にキーボードを

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

「へーすごいもんだ。」

ダイアゴン横町の中はメインストリートというだけあっていかにも魔法使いな奴等ばかりで、いわゆる「まとも」な格好の俺はめちやくちや浮いていた。ウォーディはまたマントで消えてもれっている。

「ローブに着替えようかな・・・」

なんか、周りの同年代とかそれ以下の子の視線が痛い。でもまあ、俺にはウォーディが付いているし。と、透明なウォーディをぬいぐるみよろしく抱きかかえる俺。傍から見てもおかしくないように目録も抱えている。

通りを進む俺の前にはフクロウ屋やら、箒屋やら、鍋屋やら、魔法薬だのなんだのかんだの・・・

「ぶっちゃけがらくたにしか見えない物ばかりなのは気のせいだろうか・・・」

こう何と言つか、大体は魔法を付与すればいいっていう発想のせいで、機能美が全くない。

「服でも見るか？」と、適当に服屋を覗く俺。

中にはブロンドの高慢そうな少年とポッターが採寸していた。っていうかフォイフォイがハリーに絡んでいた。「やべ。」と思った時にはもう遅かった。

「ハッフルパフになんか入れられたら退学するね。見るよあそのアイツ。いかにもマグルくさいじゃないか？ハッフルパフに御似合いだね。」

フォイフォイ君に目をつけられる俺。ああ、このシーンか。と思って俺はダイアゴン横町の入り口を見る。ハグリッドはアイスを買っていた。早く来いよ・・・

「君だよ君、聞いているのかい？」

ハグリッドを見ている俺に無視されたと思ったのかマルちゃんが、絡んでくる。ハグリッドが来るまで1分ぐらいか？それぐらいなら付き合ってやろう。

「失礼いたしました。才気にあふれるスリザリンにふさわしい名家のご子息とお見受けしますが、わたくしはマグル育ちの身にて魔法界の礼儀について知らぬものですので、ご容赦ください。」

「フン！最低限の礼儀ぐらいいは分かっているじゃないか。」

おだててやったらすぐ機嫌を直しやがって。扱いやすいな。ハリーにも釘を刺しておくか？

「ああ、その黒髪の君はさきほど漏れ鍋で一緒にしたね。あの時はすまなかった。君の連れにに驚いてしまつてね。まああれは手品みたいなもんだ。君の連れに種明かしをしたから後で聞くといいよ。君はグリフィンドールかな？誰かに守られたことがあるんだろう？人を守るために強くなるならグリフィンドールをお勧めするよ。」

ハリーは興味深げに俺を見ている。俺と同じ所に行きたいと思うなよ。

「君はハツフルパフに行くのかい？」

「さあねグリフィンドールかもね。でも一つだけ言っておくと、友達はこの寮に行っても会えるが、自分の人生は変えられない。何になるかよく考えて選ぶんだ。わかったね？じゃあな。」

ハグリッドがやってきたのでさりげなく俺は去っていく。ハリーには思いつきりグリフィンドールを押しておく。名字的にわたしの方が先だから、「ダイアゴン横町の少年」「フレイヤとならないようにしなくちゃな。」

キングズクロスではこの格好でいるか？ハリーを誘導できるかもしれないが、いや、下手に関わるのはここまでにしよう。9 + 3 / 4番線でハリーに合わないように出来るだけ早く乗り込んでおくか。荷物は・・・ダミーでも普通にしておくか？俺は目録だけで済んでしまうんだが。まあホグワーツで目録が使えないという可能性も無きにしても非ず。普通にしておくか。

「シナリオ通りにするのは大変でございますね。」
俺に抱えられた透明のウオーディがつぶやく。

「全くだ。あとはハリーがウィーズリー家とグレンジャーとよろしくやってくれればいいのさ。」

グリンゴッツの前に着いた俺の前には顔が真っ青になったクイレルがいた。ここで変に関わると逆恨みされそうだ。俺はクイレルに会いたくはなかったので、手近かな書店に入ることにした。

そういえば教科書が必要だったな。しかし、全部買うには金が足り

ない。クィレルが去ったのでグリンゴッツに行くかと、そうこうしているうちにまた来ちゃったよハリーさん。もう勘弁してくれと、俺はハリーに会わないように別の列の本棚から外に抜けていく。

ハグリッドの身長からは本棚の上からこちら側が見えるが、ハリーと話しているらしく幸いにも此方を見てはいない。本棚の向こうから「爆竹と透明マントを使ったらしい。」「へー透明マントって？」とか聞こえるが気にしない。

本屋を抜けてホツとしたところで俺の肩が掴まれた。ぎよっとする俺。俺なんかしたか？

振り向いてみると本屋のエプロンをしたオッサン。

「坊主。万引きとはいただけねえな。他の奴はごまかせても、その動きただもんじゃねエ、俺には誤魔化せねえぜ。」

ウホツすごく誤解です。

っていうかまた鍛錬の腕輪のせいかな・・・呪われてるな。ぶつちやけここで弁解してもいいんだけど、俺にはハリーさんに見つかりたくないという制限があるからなーとほぼ。っていうか目録持ったまま本屋はいるとかうかつだった。現代のT。TAY Aみたいなシステムがないからなー。普通の本とかなら万引き防止呪文的なのがあるのかもしれないが、高級な本だったら目録と同じように魔法を跳ね返しそうだ。一旦レジに断っておけばよかった。

「誤解だと思いますが、ここで言っても無駄でしょう。そちらとしても店先で騒がれるのは迷惑では？」

「良く分かってるじゃねエか・・・来い。」

はあ・・・何これ。

・・・失敗だった。そう。痴漢冤罪にあった気分だ。あの時全力で逃げるべきだった。本とか通販でいいじゃん古い本でいいじゃん。ウィーズリー家を見習おうよ。亡くなったマータイさんに失礼だよ。日本人なんだからもったいないってさー。

もうね・・・辛い。何を言っても意味がない。っていうかマツキノ家当主という事実を知られたくないという時点で詰んでいる。っていうか言っても信じてもらえないということが分かった。

「この本は元からわたしのものです」と言えば、「お前みたいなガキがそんな本持っているはずがない」と言われ、「この本は元からここにはなかったはずです。」と言えば、「そんな黒龍鱗表紙の本はここにしかない。」と言われ、「家の家宝です。」と言えば、「そんな大切なものを持ち出す訳がない」と言われ、「じゃあ取ったところの本棚が開いているはずですよ。これだけでかい本ならその隙間は埋められない」というと、「確認している間に逃げる気だろう」と言われ、どうせ呼び出したら来るので「じゃあ、この本はあなたに預けますから確認してきてください。」という、「認めたな？俺はお前に反省してほしいんだ。本を返せばいいってもんじゃない」と言われた。もうだめば。ゾクのはちまきしてなかったら精神攻撃で狂ってたね。鍛錬の腕輪は俺に面倒事しか呼んでこないけど、はちまきには助けてもらいっぱなしだ。ありがとう！そうちょう！

座らされている俺の膝の上で、透明マントをかぶったウォーディが、屈辱に震えているのが分かる。面と向かって当主が馬鹿にされてる

もんな。俺が耐えろと言つてなかつたら目の前のこいつぶつ殺しそうだ。人殺しで打ち首になろうとも嬉々として受け入れるだろう。それぐらい負のオーラがにじみ出ている。ウォーディのマントを外し、ウォーディの存在を明かしてしまつて、「どうせ盗むんならこのマントを使う」とか言えば、「しもべ妖精まで使つて盗みを働くとは。嘆かわしい。」と来るんだろうな。こいつ俺以外には白紙に見える中身を見せても裸の王様みたく「読める」とぬかしやがつたので、俺は「そーですか」。私には白紙にしか見えませんがね。あなたに所有権があるんでしょ。サツにでもなんでも引き渡してくださいよ」と諦めモードだ。もう警察的なところで反省文書く方がずつとましだ。いいかげん膝にウォーディのせたまま冷たい床に正座とか痔になるし。このオッサンも俺が男だつて誤解してるしな。

はっ！あれか？はちまきからあふれ出る漢気がそう見せているのか？だからムサイこいつが反応してきたのか？うおー乙女なのにゾクのノリの汗臭いオーラがにじんでいるのか？

もうぐだぐだ。反省しろ！って手を上げてきたけど、疾風のナイフのおかげで俊敏になつている俺にはかすりもしない。危なくなつたら本を盾に使っている。こいつでも本は殴れないらしい。もうだるいわー店長を呼べ店長を。

もういい加減足が限界だったので殴つてきたところをカウンターで合わせ、思いつきり目録を振りぬいてオッサンを吹っ飛ばした。

「よろしいので？他の方が来ますよ？」
と、立ち上がるうとするが、足がしびれて動けない俺を支えようと
する健気な透明ウォーディ。

「誰が来るにしてもあいつよりましだ。」

「確かに。そうでございますね。」

いてと、足をほぐし、ようやく立てるようになったとき、売り場からおじいさんが応援にやってきた。渾身の力で会心の一撃を放ったはずなのに、オッサンも再起動している。もうダイアゴン横町出入り禁止とかでもいいわ。おうち帰りたい。

「おやじ、こいつは万引き犯だ。罪を認めたのに、反省もしねエ！しかも本を盾に使いやがる！ゆるせねえ！焼きいれるから手伝ってくれ。」

あーあの爺さんこのオッサンの父親か。そういえばガチムチ具合がよく似てるな。こいつもどうせ脳筋なんだろうな。本を盾にして逃げるか。

「はあー・・・あ！」

ぼん！と裏表紙に拳を打ち付ける俺。瞬間移動すればよかったんじゃない。結界の外には出られなくても、そのギリギリまでなら瞬間移動で逃げるができるし、ウォーディはしもべ妖精だから結界は関係ない。

「どうして一時間近くもここに居たかな・・・無駄じゃん。」

オッサンはお構いなしに構えているが、爺さんの顔色が悪い。っていうか大丈夫か爺さん？真っ青どころか白いぞ？

「観念しろ小僧。」「観念するのはお前じゃバカ息子！！」

いきなり爺さんに殴られたオッサンはドゴン！といい音を立てて頭が床にめり込んでいる。

「え」

どうやら爺さんはこの目録のことを知っているらしい。どうせこれからややこしい説明とか謝罪があるんだろうけど、ぶっちゃめんどいし、時間の無駄だ。そんなのは願い下げだし早く城に帰りたいのでどさくさに紛れて俺とウォーディはグリンゴッツ前に瞬間移動した。

「はぁ・・・これならハリーに見つかった方が良かった。」

「あの親子に賠償を求めなくてよかったのですか？罪には正しく償いをさせねばマッキノンの名が廃ります。」

「時は金なりっていうしね。あの程度のところで受けられる賠償のために時間を潰すぐらいなら、他のことに使った方が有意義だよ。」

「全くでございますね。」

にやりとウォーディが嗤う。こいつ屋敷しもベネットワーク的なものに報告するんだろうか？そんなものあるかどうか知らないけど。フローリッシュアンドブロッツよ。こいつが何かする前に這ってでも謝りに来た方がいいかもな。まあこっちは飛んで逃げるが。

っていうか魔法使いつてなよっちいのばっかなんじゃないの？何あのゴリゴリ筋肉ダルマ等。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？（後書き）**

なんか変なことになりました。プロットにはこんなことはなかったはずなのに。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？（前書き）**

交渉はパワーです。

フレイヤ・マッキノンは賢者の石を知らない？

瞬間移動は便利なんだけど、ウォーディに先導してもらわないといけないのがなー。めんどい。NARUTOの四代目みたいなマーカ―があれば良いんだけど。そういえば目録に超占事略決があったよな？式神ってマーカ―になるかな？でも、あの本、封を解いたら前鬼と後鬼が出てくるんだよなー。日本に行って降魔調伏教えて貰うか？

グリンゴッツに入る前に俺はウォーディにかけた透明マントを外し、目録にしまう。

「ウォーディ、帰ったらで良いんだけど、魔法省にわたしが日本に行っても問題無いか聞いという。何かあるなら申請に行くわ。久々に日本の地を踏みたいし、陰陽術も習いたいし。」

「畏まりました。」

ウォーディはぺこりと頭を下げた

グリンゴッツは白い堅牢な建物でさながら白い巨塔だった。本屋からあの親子が出て来たが関係ない。俺は扉の両脇に立っている小鬼に会釈し、門をくぐった。俺はクイレルにもシカトされる注意書きとかどうでもいいので読み飛ばしてさっさとカウンターに向かって歩いて行った。

「鍵は・・・目録にあったな。」

と俺は思い出す。

「左様にございます。」

ウォーディもそういつているし、間違いない。

静かな店内をつかつかとカウンターまで行く俺。なんかカウンターはやたらと高いところにあつてうざい。あれか？普段いるんな意味で見下されてるから、ここでは見下してやろうってことか？

普通ならこんな武家の商法じゃやってけないけど、そこは天下のグリンゴッツ。信頼があるから多少の小鬼の意匠返しも許されるんだろつ。

でもこんなことしてるから種族間の溝が・・・止そう。こうなつた背景からして魔法使いが悪いからな。

「おはよう小鬼の兄さん。マッキノンのフレイだ。鍵はここに。」「
目録から鍵を取り出してカウンターに置く俺。

小鬼の兄さんはチラリと俺を見てウォーディを見た。なんかすごい機嫌が悪そうです。

「申し訳ありませんが、ただいまトロツコの整備中でございます。金庫からの引き出しはしばしお待ち下さいませ。両替ならばあちらで承ります。」「

と、俺から見て左後ろを指差す。

「なんかあつたの？回復にはどれくらいかかる？」「
何事かしら。

「龍の機嫌が悪いものでして。もうしばらくかかるかと。」「
兄さんは会釈しているがイライラオーラを隠そうともしない。

「さいですか。またくるよ。」「

そういえば店内にはすさまじいほどの殺气的なのが溢れている。俺以外の人間はあまりの気まずさに逃げ出しているようだった。

「ああ……」

クイレルが押し入ったからこんなになってるのか。自慢の金庫に侵入されてプライドがずたずたな上に、犯人の目星もつかないから殺気立ってるのな。

こいつらの面子丸つぶれだし、不様にも「ドラゴンの機嫌が悪い」とか嘘を吐かないといけないなんて臍煮え繰り返るほどの屈辱なんだろう。

そんな険悪な雰囲気の中、ゾクのはちまきをしている俺はそんなの関係えねえ！とばかりに特攻したと。

うわ、性悪りー！小鬼にとつたら「ねえねえどんなきもち？ご自慢の警備を出し抜かれてどんなきもち？」って言われてるようなもんじゃん。俺に対する視線も空気嫁↓殺気↓呆れ↓諦めと変わっていつて今となつては吹っ切れて賞賛になっちゃっている。なんか視線が生暖かい。

恥ずかしい。帰りたい。ウォーディもいつも通りにポーカーフェイスだけど、っていうか顔が引き攣っているのか？スマン！とは言っても先立つ物は金だ。

俺は両替っていうか質屋みたいになってるカウンターに行った。目録の中のガラクタで、価値があると書いてあったために捨てられなかったものを処分しないといけないからな。

例えば、初期の蛙チヨコレートの包装とか俺にとってはゴミ以外の何物でもないが、コレクターにとっては喉から千手観音が出るくらい欲しい、涎れがナイアガラな物らしい。3つもあるし2つぐらい売っても良いだろう。物好きな子孫のために一つは取っておくが、こいつらも価値を知る人に愛でられる方がいい。

っていうかなんで時代毎に3つずつあるかな？！あれか？保存用、鑑賞用、実用か？そんな物を集めて喜ぶか！変態どもめ！

「こいつらの鑑定と引き取りをお願いします。」

目録を使って両替カウンターにガラクタの山を築く俺。

目の前の小鬼の爺さんは興味深そうに俺を見ながら髭を撫でている。

「このような雰囲気の中、豪胆なことでございますね。そのバンダナでしょうか？我等の鍛えた銀に匹敵するほどの強い信念を感じます。」

「そうだね。ある偉大な漢の遺品さ。着けてれば神様にも特攻出来るらしいよ。」

ほう・・・と俺を値踏みするように見つめる爺さん。

「そのバンダナでしたら即金で金貨五千出しましょう。」

このゾクのはちまきは俺の天敵「服従の呪文」に対する唯一の盾だ。いくら積まれても無理だね。

「安いね。これが欲しいなら今すぐ、金貨百万と闇の帝王の首と遺品を差し出しな。」

小鬼の爺さんは怯むどころか嬉しそうだ。周りの小鬼もほう・・・とか

言ってる。

グリーンゴツツの金庫が破られたのだ。小鬼もきな臭い雰囲気とヴォルさんの影は感じている。俺の「首」発言は、暗に金庫破りがあったのを知っていると言つことで俺の目は節穴じゃないと示してくれる。

「流石はマツキノンの御当主。お見それ致しました。ご無礼をお許し下さいませ。」

試されるのは嫌だ。はちまきしてなかったらパニックになってたな。小心者だからね圧迫面接なんて無理。女の子だもん。

「いいよ。忙しいところに押しかけたのはわたしだしね。今度マグルの最高の鍵屋を連れて来るさ。」

笑いながら侮辱するわたしに、爺さんは不敵な笑みを浮かべる。

「次回目録の修理が御入り用な時にはお申し付け下さいませ。特別に金貨五十万枚で御引き受け致しますよう。」

五十億円か…だがその手には乗るか。

「本体価格だけじゃなく手間賃、技術料、アフターサービス、そして・・・そちらの『所有権』の永久放棄とマツキノンへの『所有権』の永久譲渡を含めるといくらだい？」

爺さんの顔から余裕が消え、気合い砲かと思紛うばかりの威圧感が襲う。小鬼は小鬼製品に誇りを持っている。彼らにとって売買とはレンタルではない。売っ払って返せという気がなくとも、彼らの素敵理論の上では「永遠に貸している」だけなのだ。

「・・・金貨五十億枚でございます。」

五兆円か…豪気だな。ポケモンの世界売上でも二兆円だったか？

「マツキノンの資産っていくらだいウォーディ？」

ウォーディは素晴らしいよ。執事の鏡だね。世界最寒のシベリアよりも寒いこの雰囲気にも吞まれていないんだから。

「金貨五十億と五千枚ほどでございます。」

ウォーディはさらにと答えるが、その手は少し汗ばんでいる。

「へーうちってすごいんだね。」

まさかそれだけあるとは。それよりもこの爺さん知ってて吹っかけて来たな？

「我が城の基礎には勝利と繁栄を約束する聖剣エクスカリバーがささっております故。富が失われることはございません。」

うちの湖やけに幻想的だと思ったらまんまアーサー王伝説の舞台だったのな。フヒヒ。約束された勝利の剣のオリジナルが我が手に…あ、涎れ出て来た。

「ぱねえwwwマツキノン家ぱねえwww滅んだのが不思議。エクスカリバーも小鬼製なの？」

「いいえ、ブリテン島が出来た時には既にあつたとされる神剣でございます。なんでも光で出来ているとか…」

ふーんと俺はウォーディから視線を爺さんに戻してにやりと嗤う。振り向く体勢はシャフ度でだ。

「本が壊れたら金貨五十億枚で後腐れなく全力で修理してくれるんだな？」

小鬼製品となった我が家の『目録』の『所有権』、その他が、我がマツキノンとその子孫、縁者、更にはその属する魔法界に未来永劫あると認め、小鬼その他は『所有権』等一切の権利を永久に放棄し、返還等を求めないと。」

小鬼の爺さんは俺が次に言うことが分かっているのだろう。迂闊な発言をしたことに、齒茎から血が出るほど齒を食いしばっている。まともな精神の奴ならマツキノンが14世紀かけて貯めた資産を手放すはずはない。この爺さんはそう見立てたのだろう。

・・・愚かにも。

だが俺は「まとも」じゃない。この話がそれだけの価値があると知っている。

「・・・我等は金貨五十億枚で『目録』の修理に全力を尽くし、『目録』がマツキノンとそれを継ぐもの、果ては魔法使いに属するものとなるよう誓いましょう。我等は『所有権』を未来永劫放棄し、『所有権』をマツキノンとそれを継ぐものに永久に譲渡し、例えばマツキノンの系譜が絶えても、魔法界へ返還を求めません。メンテナンスは無料で行いましょう。我等の負けです。狡い真似は我等の信念に誓って致しません。」

「お前等は最高だ。金は今すぐにでも金庫から持っていくといい。交渉成立だ。宜しく頼む。」

爺さんと握手するわたし。ウォーディも驚かない。周りの小鬼も拍手している。

燃え尽きたっぽい爺さんが心の底から優しい顔で聞いてくる。

「何故、こんな無茶な契約を？他の魔法使いのように『借りて』いればよろしいではありませんか。」

「さっきも言っただろ？お前等は最高に馬鹿で狂ってる。良い意味でな？でもわたしは究極に狂ってる。それだけさ。面白いものを見せて貰ったお礼さね。」

「・・・貴方を普通の魔法使いと思ったのがそもそも間違いでした。他の魔法使いのように我等を認めず見下しているのだと舐めていたのです。小鬼の長老と謳われる儂としたことが、子羊と侮って魔王に喧嘩を売るとは。…もう一度お名前をお聞きしてよろしいですか御当主。」

わたしも優しく笑う。

「フレイヤ・マッキノンだ。あんたも凄かったよ。このはちまきが無かったら気絶してたね。」

ハハハと爺さんは笑う。

「金貨百万と闇の帝王の首と遺品、即金で支払えば良かったのですな。今思えば安い買い物でしたのに。」

「そうだろう？わたしは優しいからね。君等と違ってぼったくらないよ。しかし我ながら高い買い物をしたもんだ。魔法界の歴史に残るね。」

「例え魔法使いが忘れようとも我等は永劫忘れませんよ。こと交渉

事で我等と正面からぶつかって、我等を完膚なきまで叩きのめしたのはこれまでも、そしてこれからも貴方様のみにございましょう。我等は今後最大の持て成しを致します。今後とも御贔屓に。」

ゾクのはちまきをわたしは撫で、

「交渉と言っても特攻しか出来ないけどね。」
と、いたずらっぽく笑った。

それから俺の周りに小鬼が集まり、口々に爺さんをやり込んだわたしを賞賛したり、俺のように小鬼を認め、正面から来た奴はいないとか、いいチャージインだ！とか言って回った。

ウォーディも、あんな主人なら仕えごたえがあるだろうとか、お前はある意味一番幸せな屋敷しもべだとか、あんな化け物に仕えられるなんてお前はなんて優秀なんだとか言われていた。

「なんか小鬼族全体から狂人認定されてる気がするんだけど。」

「既に認定どころか我等の歴史に、空前絶後の狂人として名を刻んでおるよ。」

ずっと小鬼の爺さんがよってきて言う。

「傷付くなあ」

俺はしゅるりとバンダナにしてたゾクのはちまきを外す。俺でさえわたしの雰囲気が変わるのが分かった。予想通り着けるとものすごく漢らしく見えるみたいだね。

「・・・わたし乙女なんだけど。」

ええええ！とグリンゴッツが小鬼の叫びに揺れる。驚いてずっこける奴多数。ま、た、コレか！

「よし！お前等全員表へ出る。小一時間説教してやる。」

そのあと、はちまきを巻き直して契約書を書いた。俺とウォーデーで20回確認して10ヶ所のごまかしを見つけた。小鬼油断ならねえ。ケロツとして、合格ですとか言いやるし。

なんだかんだあって、結局あのガラクタは28ガリオン8シツクル3クヌートになった。けど革袋にはざっと見ただけで50枚以上の黄金色のお菓子が入っているように見えた。疲れて視力がおかしいらしい。

くたくたになった俺とウォーデーは足を引きずり杖屋に瞬間移動した。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？（後書き）**

個人で兆規模の買い物ができる人っているんでしょうか？

たぶんフレイヤは面倒事でハリーたちの前に現われる時にはパンクTシャツ、リーヴァイス、ジャケットにゾクのはちまきと漢気溢れる頼れるフレイ兄さんとしてあらわれるようになると思います。あくまでも予想ですが。

っていうか書いている私も話の展開がどうなるか分かっていません。なんか勝手に進んでしまうので困ります。私が考えてるのじゃないみたい。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

今日は眠いので少しだけにします。フレイヤは無双になるか、器用貧乏になるのか、私にもわかりません。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

さて、これで「炎のゴブレット」でセドリックにぶちあたる「死の呪文」を目録で防いでも、壊れた目録は小鬼が直してくれると。まあ、助けに行くかどうかは微妙な線だが。

フヒヒ。これは秘密の部屋でのバジリスク戦のどさくさにまぎれてバジリスクの毒牙とフォークスの流す不死鳥の涙を手に入れておかねば。

小鬼製の銀表紙になった目録にバジリスクの毒と不死鳥の涙を浸透させれば、叩きつけては分霊箱を砕き、手を触れては最強の解毒と治癒を約束する究極の鈍器と化すことだろう。

あれ？破壊と再生ってエクスカリバーと同じ能力だよね？これはあれだな。エクスカリバーの管理をしていたマーリンの子孫たるわたしに天が現代のエクスカリバー（鈍器）を作れと告げているに違い無い！

ガイアがわたしにもっと輝けと言っているのだ！フウツハハハハ！最終決戦では死喰い人の死の呪文を目録で打ち返して回ろうそうしよう。

「お嬢様？目が座っていらっしやいますが大丈夫でございますか？」

「はッ？・・・ヤバイまた電波を受信してた。ありがとウォーディ。」

「
危うくダークサイドに堕ちるところだった。危ない危ない。」

まあ、グリーンゴッツでは疲れたしね。とウォーディにつぶやく。面倒いのでマントはしまった。

まあ、ざつくばらんに言うウォーディは城に帰って貰っても良いんだけど、ここは魔境ダイアゴン横町。心細くて一人じゃ歩けない。細心の注意を払ってハリーの後ろを歩くしか・・・

「クイレルの足止めした後、帰って出直せば良かったんじゃない？」

「そういえばそうでございますね。」

ウォーディも気付かなかった。という感じだ。

「」

「」

「ねえウォーディ。」

「なんでございましょう？」

「わたしって脇役だよね？」

「人生誰もが主役でございますよ。」

「いや、原作的な意味でさ？」

「もし原作にお嬢様がいらっしゃったのなら、名前すら出て来ない脇役でございますね。」

「でしょう？でもなんかこのトラブル体質。主役っぽくない？」

「あまりお気になされすぎるとお体に障りますよ？」

「次は例え巻き込まれても途中で離脱するわ。」

「それがよろしいかと。」

カランカランと杖のオリバンダー？オリバンター？杖屋に入るわたし。

恐らく少し前までは整頓されてたんだろうけど、今はカウンターやら床やら靴屋の靴箱のような杖の箱が所狭しと散らかっていて、竜巻にでもあつたようになってる。

ハリーポッターエ。いくらトラブルメーカーの主人公でもこれはひどい。オリなんたら老も片付けに夢中で俺には全く気付かない。

「…すいません。杖を見繕ってほしいんですけど。」

「？！ああ、散らかっていて済まないね。杖の御所望かい？初めての杖かね？」

オリ…オリ爺さんがひよつこりとケースの山から顔を覗かせる。なんだこの人瞬きするじゃん。きつと相手がハリーだから瞬きを忘れるほど凝視してたんだね。

「そうです。利き手は…どっちだっけ？」

俺の利き手は右だったが、わたしの方は左らしい。今では両利きだ。

「いや、わしが見よう。」

オリ爺さんが近づいて来て俺が出した手をフムフムと見はじめる。

爺さんの顔がなんかだんだん怪訝なものになっていく。

「これは…？いや…しかし…それしかなさそうじゃが…」

「どうかしましたか？」

またトラブルとか嫌だぜ？

俺の両手を交互に見ていたオリ爺さんが顔を上げ俺を見る。

「おぬし…既に杖をもつとるんじゃないのかの？」

「？誰かに貰ったり、買ったりしたことはありませんか？」

「知らぬ内におぬしの物になつとるやもしれん。おぬし、おぬしの家に伝わる杖等は無いか？」

押しかけ女房か！知らない内にアイテムボックスにあるとか、ある意味呪いだな。

「そんなんあるの？ウォーディは何か知ってる？」

俺はウォーディに問うと、ウォーディは頷く。何か知ってるようだ。

「マーリンの杖。というものがございます。我が家に伝わる物ですが気難しく、御せるのは十数代に一人とか。先代の奥方様が言うには「2、3本飛んで行った頭のネジが、あらぬところにブツ刺さってる人しか使えない。」らしいのです。先代様が使い手でしたのでお嬢様ではないと思っておりました。」

「なにそれこわい。頭逝つてる人専用ってこと？っていうかウォーディがわたしのことまともな人種だっと思ってくれてたのを聞けただけでうれしい。」

「先代もまともなお方でしたよ・・・ちょっと変わっていらっしやいました。」

だめだこりゃ。

「・・・しもべ妖精のちよつとはこつちじゃ壊滅的っていうんだよ。」

「マーリンの杖ということはおぬしはマツキノン家か？」

オリ爺さんはまるで絶滅したはずの珍獣を見るような目でわたしを見る。毎回こんな風にみられると嫌だなー。ポッターはもつとだろうけど。

「ええ、でも内緒に置いて下さいね。『あの人』一派の残党に睨まれたくないですし。」

オリ爺さんも黙って頷く。

「ああ、良く分かっておるよ。しかし、マーリンの杖が。強力だとは聞いてはおるが、僕も見たことはない。使用者はことごとく有名じゃが、その一方でだれも口にしたらならないと聞く。」

「先代が使ってたって聞くだけでどういうことか分かります。とりあえず自宅警備員の人は総員第一種戦闘配備って訳ですね。分かります。」

はあ・・・とため息をつく俺。もういやだマツキノン。目録見ても変人しかいないもん。その末席に名を連ねているだけで無条件に奇人扱いされそうだ。あ、わたしもう小鬼全体に狂人扱いされてるやはは・・・

「とにかく呼び出せばいいんでしょ呼び出せば。」

左手で目録を支え、ページをめくってゆく。オリ・・・ゴメンちょ

つとググってくるわ。

オリバンダーでした。オリバンダー老は俺が白紙にしか見えない分厚い目録をめくっているのを興味深そうに見ている。傍から見たらものすごい痛い子だけど、この爺さんは「分かてる」方の人種らしい。

「あつたあつた。出でよ。マーリンの杖。」

ぽふん。と音がして、杖が俺の手に収まる。というか収まりきらない。杖というよりもこれじゃ最早・・・長い！重い！模様がすごい！剣か？！

これが俺の杖なのか？それにしても・・・

「・・・別に何ともないんですけど。あつたかく感じたり、風が吹いたり、BGMが変わったりとかしてないし。」

「そんなはずはないんじゃないか・・・ちよつと見せてはくれんか？」
オリバンダー老も首をかしげている。俺はこつちに関しては門外漢？娘なので、素直に渡す。

俺から杖を受け取ったオリバンダー老は虫眼鏡を取り出し、フムフムと見てゆく。

「これは・・・長さ52センチ、恐ろしく硬い。材質は・・・なんと！いや、ありえん。これでは制御などそもそも・・・だからこそ使用者というわけか？しかし、先ほどのを見るに・・・じゃが忠誠はあるようじゃ・・・」

日本語でおくって無理か。イギリスだし。

「あのーわかりやすく説明してただけませんか？」

夢中になっていたオリバンダー老はハツとしてわたしを見る。俺、最近変な人に絡まれたり、人外と仲良くなったり、シカトされまくったりと扱いがコロコロ変わるんだけど。

「ああ、すまん。なにせ、非常に・・・珍しいというか、僕はこれを杖と呼んでいいのやらどうやら判断がつかんくての・・・」

杖じゃない？ どういうことだ？ 実は剣ですとか？

「どういうことです？」

ふむ。と、オリバンダー老は一息吸った。

「確かに見た目は非常に長いが杖の形をしておる。造りも申し分ない。じゃが問題は素材じゃ。この杖の素材は・・・唯のユニコーンの角じゃ。それ以上でも、それ以下でもない。」

「ユニコーンの角？ 珍しいんです？」

ゲームとかではよくありそうなもんだが。

「この杖は1本の、それも恐ろしく強力だったと思われるユニコーンの角を「ただ削りだした」だけのものじゃ・・・今となってはユニコーンの角をここまで精巧に削り出す技術は失われておる。」

「失われた技術が問題なんですか？」

オリバンダー老は頭を抱えている。こういう反応をするってことは何かしらの「変態技術」を目にしたってことだろうか？ いや、恐らくそうだ。だってマツキノンだし。

「いや、削る技術は問題ではない。素材は現在使われている杖のどの心材よりも強力なものじゃ。じゃが、それが問題じゃ。」

「・・・」

「この杖は「本来心材であるべき」素材「そのもの」で出来ている。その意味が分かるか？」

「なんかやばいってことはわかります。」
「つていうかウオーデイの出番がない。」

「普通、「杖」というものは、魔力を束ねる「心材」と、その心材に集められた魔力を包み、導く「外装」の木材で出来ておる。その点このマーリンの杖は「心材そのもの」つまり、現代の意味では「杖」とは呼べぬ代物じゃ。」

「・・・おそらく魔力を限界まで高めることのみを追求したのじゃろう。表面に刻まれたルーンが辛うじて「外装」の役目を果たしているが、それも申し訳程度じゃ。杖に頼らずとも卓越した魔力制御を行える者が使うことが前提になっておる。つまり、制御を度外視しておる。下手な魔法使いが使えば軽く暴発し、腕が飛ぶどころかその命すら危ういかもしれぬ。」

なにそれ・・・変態ってレベルじゃねーぞ！ジェネレーターオンリーでヒートシンクとかの冷却系もなく、電子制御のどの字もないってことだろ？爆発してあたりまえじゃねーか！頭のネジが2、3本飛んでるってレベルじゃないよ！全部飛んで刺さっちゃいけないところに刺さってるよ。反逆の剣より性質が悪い。

「絶望した。マッキノン家の変態理念に絶望した。」

この杖持っても何も反応しなかったし、しまいます。と、目録を閉じて右手に抱え、オリバンダー老から、杖を返してもらう。

「確かにこの杖の忠誠心はおぬしにあるんじゃが・・・」

「勝手に忠誠を誓われ、て・・・も・・・！！！！」

オリバンダー老から返してもらった杖を「左手で」受け取った俺の全身が総毛立つ。

「ぐっ！」

まさに雷に打たれたようにという感じで杖から全身に電撃が走る。杖が歓喜しているのが分かる。全身が痺れて痛い！だが俺も感覚的になんか欠けたパズルのピースが嵌るようにこいつだと分かる。

俺の回りが爆発したように吹き飛び、バチバチと閃光が走る。

「お嬢様！」

ウォーディが駆け寄ってくるが周りの杖のケースとともに吹き飛ばされる。

もうめちゃくちゃだ。店のものを弁償しないといけないかもしれんと、心配していたが、オリバンダー老は、子供のように食い入るように見ていて、吹き飛ぶ商品に見向きもしない。

ああ、こいつも変態だったんだな。と思った俺の右から、吹き飛ばされた杖がヒュンヒュン！と飛んできたから「あぶねエ！」と、咄嗟に掴んだ。

稲妻の暴風は収まっていた。

「これは・・・やはり。」

と、オリバンダー老が呟く。

そうですよ。わたしは杖からも変態認定されてしまったわけです。

「なんかいろいろすいません。吹っ飛ばしちゃって。あ、この杖返します。」

と、俺は右手に掴んだ飛んできた杖を差し出す。

「いや、いいものを見た。今日はホンにめずらしい日じゃ。まさか兄弟羽の杖と左右で違う杖とは・・・その右手の杖もおぬしのもんじゃよ。」

「ほえ？」

何言ってるのこの爺さん。俺の杖はこの左手の変態ユニコーンブレードなんですよ？

「魔法使いの杖は一本だけでは？」

おお、ウォーディ。吹っ飛ばして悪かったね。そして久しぶりのまともなセリフだ。

「分かっておるのじゃろ。その杖をもう一度よく握ってみなされ。」
オリバンダー老は風のせいで服とか髪の毛とかぐちゃぐちゃだが、いい顔で笑っている。

「はあ・・・」

ため息をついて右手をじっと見る。その間も左手の変態ブレードはバチバチしている。いい加減痺れてきた。それに比べて右手のこい

つはなんか優しいというか、人肌というか、落ち着くというか、左手の変態ユニコーンブレードとは別の意味でかけていたピースを埋めているというか、この感触はまさか！

「まさか・・・6年前に生き別れた相棒！？？！AIBOなのか！？」

この握り心地、この手触り、この暖かさ、そして世界で一番握りやすいところにあるようなこの絶妙なフィット感！！まさに転生前まで生まれた瞬間から連れ添った相”棒”、AIBOに違いない！！

「おおおおおおお！！！！！！！！！！あああああああああああ！！！！！！！！！！まさか・・・まさかこんなところで再会できるとは・・・」

あまりの懐かしさに泣き崩れる俺。もう放さないよ！相棒！！

感涙してむせび泣いている俺をよそにオリバンダー老がウォーディに説明している。

「30センチ、桜の老木にドラゴンの琴線。しなやかで固い。

・・・まさかとは思ってたが、同じ時期に左右の手でそれぞれ違う杖が忠誠を誓うとは・・・」

オリバンダー老は散らかしっぱなしにしていた自分が悪いし、傷ついていたのはケースだけだから弁償代はいらないと、杖代だけでいいと言っていた。俺は吹っ飛ばした負い目もあったし、何より相棒と再会できたことがうれしかったので、杖代は7ガリオン5シクルだったが、俺は熱い涙で服と杖をびちゃびちゃにしながら、釣はいら

ねエと8ガリオン渡した。

便利な拭布であちこち綺麗にした俺とウォーディは「世話掛けたな」と、杖のオリバンダーを後にした。ぼろぼろのオリバンダー老は満足そうに「またのお越しを」と言っていた。

外に出た俺はもうずいぶん日が高くなった天を見上げた。

「今日はいろいろいい買い物をした。」

総額50億と8ガリオン。

今地べたに這いつくばって土下座をしている筋肉ダルマの持っている教科書と高そうな本はもちろん無料だ。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？（後書き）**

少しと言いつつ悪乗りしてしまった。

前に前鬼、後ろに後鬼、左手に変態ユニコーンブレード改め月光、
右手に相棒、背中に目録を背負い、舞空術で空を舞う最強の戦天使
！パーフェクトフレイヤ！

私も賢者モードで庭に植える用の魔法薬その他を忘れていました。
あと、孤児院への寄付も。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

下ネタに走った時、その人はネタ切れだそうです。空知先生が言うてました。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

「・・・ふう。」

あー疲れた。わたしは城の広間にソファーを呼び出しどさつとダイブした。

あの後、杖屋を出たわたしの前に肉だるまが寝そべっているのに気付かず踏んでしまったようだが多分気のせいだ。肉だるまは親切にも教科書と魔法薬大全とか言うでかい本をくれたので城に送った。

店でお詫びがしたいとかいうから、俺とウオーディはホイホイついて行った訳だ。俺は肉だるまの顔も見なくなかったが、どこぞの名医のお陰かは知らないが、ア。パンマンそっくりになっていたからアンパ。マン好きに悪い奴はいねえと信じることにした。

途中、友達になったアソパソマソを連れて魔法薬系の種とか肥料とか器具とか買ったら、優しいアンパンマ。が今年分のオトモダチ料だからと払ってくれた。今まで愛と勇気しか友達がいなかったから、わたしが友達になってあげたのがよっぽど嬉しかったらしい。

本屋に入る前に孤児院の寄附の為にグリーンゴッツで両替したかったけど、グリーンゴッツ前は金庫破りを嗅ぎ付けたパパラッチで一杯だったので諦めた。ポンドに両替したいというとあんパンの人は快く承諾してくれた。

ちょうどマグルの金が邪魔だったらしいので良心的なレートで両替してくれた。替えてもらう前に「そういえば日本の1万円金貨って3万円ぐらいで買えたな」と雑学を披露したりした。

パン工場はよつぽどガリオン金貨が足りなくて不便だったらしい。俺が30枚もガリオン金貨をあげたらアンピーマンとジャムをじさんは泣いて喜びながら、世紀末のトイレットペーパーを分厚い塊でくれた。

彼らは気前良く金貨をくれた俺を痛く気に入ったらしく、毎年、教科書をくれるらしい。親切ばかり受けていては申し訳無いので、知り合いにもイイ店だったと伝えておくと言っておいた。

そういう訳で俺は知り合いの屋敷しもべのヌーに「パスポート取りに行ってから帰るから昼飯宜しく。P.S. パン工場は良いところだった」って目録経由でメモを送った。

そんなこんなで、パスポートを申請し、孤児院の口座に50万円分のポンド札をダンクシュートした俺は、ジャケットやら今まで着たことのないスカートやらを買い込み、カメラも買った。

どうやら「魔法使い用カメラ」があるんじゃなく、普通のカメラを「魔法使いが使い」、魔法使いの現像屋で現像すると、動く写真が出来るらしい。

俺はジャムをじさんに信用できる写真屋を聞いてみたら、一見さんお断りの、普通の3倍の代金を取るが絶対に中身を漏らさない盲目の写真屋「Half Moon - SEMI。」を紹介してくれた。おじさんも若いころよく使ってたらしい。「おぬしも悪よのう」と言っただのに、顔を引き攣らせてフリーズして反応してくれなかった。これだからダッチは嫌いなんだ。

まあ、これで11歳英国少女の記念撮影のめどが立ったわけだ！あ

う。うとかセ。トなんてぎ。ぎりじゃなく、あっちのア。トからこ
っちのアウ。までセレブ買いしよう。ちょうど小五口…じゃなくて
悟りの道に興味が出て来たしな。日本旅行で寺社仏閣を巡って心身
を清めよう。

え？エロス？紳士？何勘違いしてるんだ？11歳の乙女がそんなこ
と考える訳が無いじゃないか。

まあそんなこんなで城に帰ったわたしはソファでごろごろしたり、
しばらくぶりのシャワーを浴びて、そういえばと、倒れてた間、体
を拭いてくれたイーティにお礼を言ったり、6年ぶりの風呂でヒヤ
ッハーしすぎてのぼせたりしたわけだす。

何故か風呂入ってる間も月光と相棒はネオジウム磁石みたいに腕に
張り付いていて取れなかったから怖くなったが、呪いの装備だと割
り切って諦めることにした。っていうか百歩譲って変態ユニコーン
ブレードの月光は仕方ないとしても、なんで相棒まで外れないんだ
？確かにもう放さないって言ったけどなにもここまでしなくても・

「いつもソファで寝てたから寝室とかベッドとか懐かしいぐらい
だな。」

「左様でございますね。」
と、俺を寝室に誘導するウォーディがしみじみと言う。

「よく考えたら、わたしとウォーディってまだ出会ってから一週間
も経って無いんだよね。なんか不思議。」

ウォーディも一瞬はつとしてわたしを見つめる。

「いろいろございましたからね。」

俺も遠い目で窓の外を見る。月の無い夜空には星々が踊っていた。

「いろいろあったねー。でも、あれだけあったのに1クール分ぐらいなんだよなー。もう身が持たないよ。」

フツとウォーディが笑う。

「寝室にございます。良くお休みになって御自愛くださいませ。」
ウォーディが扉を開ける。

予想してたけど寝室もばねえwwwベッドの上に天蓋まであるし。
寝室に入った俺はウォーディに手を振る。

「じゃあまた明日。お休み！」

「お休みなさいませ。」

ウォーディは一礼して扉を閉めた。

「ふへー。」

マッキノン家のベッドはソファァーに劣らずふかふかだった。わたしは自由落下するみたいに眠りに落ちていった。

「よう。久しぶりだなわたし。」

俺は俺の部屋のベッドに座り、真っ黒な鏡になった窓に映るわたしを見る。

「よう俺。っていうか大丈夫なの？コレ？二重人格っぽくない？」

わたたと慌てるわたし。

「どうせ夢の中だ。誰もきやしないし、ちょっとくらい俺にも息抜きさせる。ここじゃ息が詰まる。」

この俺の部屋は俺にとって最後の砦だ。もう、ここが窓が外の世界を映すことはない。俺にとっての外の世界はもうとくに削り取られて存在しない。

「まあ、そうだけどさ。」

肩を竦める鏡の中のわたし。

それを見てつぶやく俺。

「え……」

怪訝な顔で俺を見るわたし。

「どうしたよ？俺？」

「……萌え。」

頭を抱えるわたし。

「……スマン最近幻聴がひどいんだ。」

俺は真剣な顔でわたしに問う。

「……なあ、わたし？俺がわたしの写真を撮って愛でても法的にはセ

「フだよな？」

窓に映るわたしはドン引きしている。

「めっちゃくちゃアウトだよ！…でも悔しいけど法的にはセーフ。なんでだろうね。今世紀最大の謎だよ。」

ゲンドウポーズで不敵に嗤う俺。

「問題無い。」

頭を抱えて悶えるわたし。

「なんでこうなった…」

「それはそうとわたしよ…帰りたくはないか？」
居住まいを正して俺は問う。

「わたしは…」

俯くわたし。

「まあ、わかってるがな。…最近外向きの一人称は全て「わたし」だし、体と中身を合わせて言うときも「わたし」、他人から見られている自分も「わたし」。「俺」の領分はわたしの「中身」だけだが、それも最近怪しくなってきた…。もう一度聞ぐが、帰る気は無いか？」

黙り込むわたし。答えは決まっているのに俺に憚って答えられない。

「なあ、わたし。もう良いんじゃないか？いずれにせよ帰ることは出来ないし、いつまでもうじうじしてたって無駄だ。いつかわたしは俺を諦め、捨てなくっちゃならん。俺に構うことはない。ここま

でわたしを受け入れられたんだ。大丈夫さ。すっぱり諦めてこつちの現実を受け入れる。」

顔を上げたわたしは鋭い目で俺をみる。その目には涙が滲んでいた。

「そんな顔をしている奴の言うことが聞けるか！まだ時間はいくらでもある。まだまだ…まだわたしは答えられない…」

フフフツと俺は笑う。

「不様な顔をしているのはわたしの方さ。まあ、いい。こつちにもウォーディやらなにやらいろいろ出来たしな。何よりその右手には俺のサン・ステイグマまである。俺もここからのんびり眺めているさ。」

窓の向こうのわたしも笑う。

「あ、でも婿どのとベッドインするときまでには決めといてくれ。俺には耐えられん。」

「もー！」とわたしが怒って窓を叩く。

「おっと。時間だ。じゃあな！一番良い写真を頼む。」

わたしが何か言っているが「あーあー聞こえないー」してやった。

「うへ・・・はあ」

確かに良く眠れたんだけどいつから俺はロリコンになったんだ？

「まあ、起きてる間はわたしも俺もわたしだからなー」

ごそごそとベッドから起きて着替える。最近心なしか虚しい胸板から天保山くらいになつてきたのか？今後に期待だなと目録からアレを取り出し、ホックをかける。

光の射すまどからぼんやり外を眺め、そろそろわたしにも月例行事がくるのかな・・・と憂鬱になった。昨日ウォーデイに先に帰って貰ってから、薬局に行ったから万全とは言え不安なものには違いな

い。
っていうかあれか？昨日の薬局での買い物が万年純潔の魔法使い間近の俺の精神が分離する決定打になったのか？

俺エ・・・

無駄に広い広間で朝飯を食うわたし。後ろにウォーデイが控えているとは言え、ガランとした食堂はめちゃくちゃ淋しい。

「そうだテレビ買おう。」
うん。そうしよう。

飯を食ったわたしはトイレの帰り際にマーリン爺さんの絵を外してウォーデイに運んで貰った。マーリン爺さんはなんか遺影みたいだ。なんかぶつぶつ「マミさんが・・・」とか言ってるが、なんのことやら。

暫くしてこっちに戻って来たマーリン爺さんはわたしの左手を見て、

「ほっほ！まさかおぬしも儂の杖を継ぐとはのう。」

とか寝ぼけたことを抜かしやがったので、月光をバチバチさせて近付けたら黙った。

庭に出るとスーズとイーティが薬草畑を造っていたので挨拶しておいた。彼等もプロなので俺が挨拶してもうろたえずに挨拶仕返してくれた。

そんなこんなでパスポートができ、日本行きが決まるまで城の練兵場で、午前は気の、午後には呪文の訓練することにした。

久々で鈍ってたのか最初のかめはめ波を打つのも苦労したが、ドラゴンボール式に練兵場とソファアを往復する内に、鈍ってるのもあるが、打ち出す前の気というか魔力が目録と月光にこっそり持つて行かれているのに気付いた。

ちなみに目録はいつの間にやらいーティが仕立ててくれた肩掛けでリュックみたいに背負っている。肩掛け鞆みたいに斜めに掛ける方が見た目的には良いんだけど、成長期だし、背が歪むのは嫌なのでリュックタイプにしてもらった。遠目に見ると、亀仙人っぽい。

「…これじゃあ、かめはめ波は戦闘向きじゃないな。出が遅いし。」

1日目は、頑張って捻り出したかめはめ波なのに、練兵場の鎧を着たガーゴイルを1メートルのけ反らせただけだった。このガーゴイルは衝撃が大きすぎると自分でバラバラになって破壊を防ぐらしいが、この自壊機能を引き出せたのは5日目、ソファア回復を挟み、目録と月光の魔力吸収に慣れた後だった。

マーリン爺さんは初めはかめはめ波を笑っていたので、一々黙らさなければいけなかったが、三日目の朝、わたしがガーゴイルを吹っ飛ばした辺りから静かになり、五日目に自壊機能まで引き出しはじめた辺りから青くなって「ありえん…」とか言っていた。

いやーでもすごいのは、鍛練の腕輪と癒しのソファーだね。同時に使うと命が危ない禁忌のコンボだけど、用法を守って交互に使うとここまでとは…

既に孤児院での鍛練ペースで10年分ぐらい行きそうだ。初めは目録と月光のせいで形にすらならなかった気円斬もスーヅが持つて来てくれたでかい岩を5往復させてもまだ余裕があった。

ガーゴイルはそれなりの使い手の「盾の呪文」程度の防御力があるらしいが、一度真つ二つにしてからはもったいないので使っていない。今はスーヅが練兵場の端で喜々として修理してくれている。主人がいない城では、あの惨劇で破損したヶ所を修理しきってしまった今では、直すものが無くて暇だったらしい。このワーカホリックめ！

舞空術も最初は浮くだけで汗だらだったが、今では競技用箒より速く、さらに小回りが利く。

午後の魔法の方はそれなりだった。相棒は素直で忠実にわたしの言うことを聞いてくれたが、月光が相棒に送った魔力まで吸い取るせいで発動しても威力が低い。しかも、月光よりましというだけでやはり30センチという長さは振りにくかった。

月光の方はどうしようも無い。長い重いでめちやくちゃ振りにくく、振るとなんか「ブォン！」とかいう幻聴がしてうっとうしい。わたしの中で見物してる俺に幻聴を押し付けた後どうなったかは後

にするとして、この杖なんか始終バチバチ言っていて暴発しないのが不思議なぐらいだった。だが、まだわたしはこの杖を嘗めてた。

ただの浮遊呪文のはずのウィンガーダイヤモンドレビオーサを岩の上の落ち葉に掛けたのに、次の瞬間、岩が文字通り「飛ぶ鳥を落とす勢い」で「発射」され、飛んでた鴨を撃ち落とした。その日の夕飯の鴨ソテーは旨かったけど、月光にかかればどんな些細な魔法も攻撃呪文と化して、魔力切れるにも常識的にもいっような意味で頭が痛かった。

いろいろ総合すると、かめはめ波とか気円斬は攻撃呪文より物理的破壊力が圧倒的に高く、誘導も出来るが、呪文より発動が致命的に遅く、ただでさえ消費魔力が多いのに、目録と月光が貯めた魔力をバカス力吸うせいで、洒落にならないことになっている。

呪文の方は相棒が頑張ってくれているが、月光は変にテンション高いし、地味に目録が魔力を吸ってくるせいであまり芳しくは無かった。

結局舞空術しか使えないじゃん！とわたしは後一步でスーパーサイヤ人になるほど内心切れかけだった。

パスポートは1週間で出来るらしいが、6日目の朝、いよいようつとおしくなったので、目録と月光に限界ぎりぎりの破裂寸前まで魔力をほうり込んだら、わたしがプツンしたのが分かったのか、それ以来大人しくなったので大分燃費はましになった。

後マーリン爺さんは始終空気だった。何のためにいるんだ？顔のとこだけ綺麗に吹っ飛ばしてマミらせようか？

なんかわたしの鍛練法だと有り得ないほどお腹が空いて、食費が一
日一ガリオンとか、節約番組とウィーズリー家に喧嘩を売ってるみ
たいなことになってた。

6日目の夜財布を見たら2ガリオン少しとポンド10万円分ぐらい
になってた。パン工場で両替しなけりゃ詰んでたな。

実はダイアゴン横町から帰った日から、日刊預言者新聞を取ってる
んだけど、わたしの買い物は小鬼が黙ってくれてるらしい。だが、
新聞には載っていないだけで、あの後、小鬼の爺さんから届いた手
紙によると、あの時気まずい雰囲気グリンゴッツに特攻したわた
しの目撃情報から、パパラッチが四六時中張り込みしてはそれらし
い人物を拉致って回っているらしい。

恐ろしすぎる。まあ、わたしの日頃の行いの良さと聖剣エクスカリ
バーのお陰で、親切なあんパンさん達に出会うことが出来たので、
今後とも品行方正に努めようと思いました、まる

え？ガリオンの数が合わないし、それよりも幻聴はどうなったって？

わたしの中の俺に幻聴を押し付けたら、その夜の夢会話で俺がつか
み掛かって来るほどの勢いで飛び掛かり、窓を叩いて「このドクサ
レガー！」って言うてきたので、チラチラと写真を見せたらあつさ
り黙りました。

鍛練とか寝る前に、休憩だからと人払いをしてから撮った素敵写真
は、知る人ぞ知る写真屋「Half Moon - SEMI。」に現像
してもらいました。

写真屋はダイアゴン横町のぱつと見ただけでは絶対に分からないよ

うな路地裏にあり、合言葉を知らなければ扉のノブが掴めない仕様だった。ちなみに合言葉は「手応え…あり！」で、呟くと、ノブが掴めるようになるという洒落た仕掛けだった。

店内は薄暗く、途方も無く静かだった。わたしが入ると「この風、御新規さんかい？」と言う言葉とともに音も無く、SEMI。老が現れた。

わたしは「そうだ。よろしく頼む。」とフィルムを5本カウンターに置いた。

SEMI。老はフィルムに触れるとにやりと笑う。

「兄さんこれはまずいやね。ここ以外には止めとくこつた。」
と言った。だから嬢ちゃんだと…もういいや。

わたしはこの老人のフィルムを持っただけで中身を見抜く洞察力と、その能力をも嫉伏せるゾクのはちまきの漢気に驚いたが、冷静に答えた。

「わかるかい？これ以上無いほどの「素敵」写真だともうがね。」

「へへっ違いねえ。」

と盲目のSEMI。老は奥に消えて行き、ものの30分もしない内に戻って来た。

「15ガリオンだ。また「素敵」な写真を頼むよ。ヒヒヒ。」

15ガリオンは高かったが、写真は最高の出来だった。ある意味戦略兵器以上かもしれない。これが世に出ると100年後の地球には

戦争も環境破壊もなくなるんじゃないかな？だって原因がいなくなるし。

夢会話の中でこれを一枚だけ俺に見せたら

「我が生涯に一片の悔い無し！」
と叫んで動かなくなった。

この調子じゃわたしが俺であることを諦める前に、俺の方が先に昇天しそうだ。小出しにしなくては。

かくして7日目。パスポートを取りに行く朝にアルキメデスが魔法省から日本行きの返事を届けに来た。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

次回、「フレイヤ、日本に行つてさつさと戻つてきてホグワーツ特急でハリーを目録で吹っ飛ばしたら面白いのかもしれないけど私にはそんなストーリーを書く実力がないからそろそろ失踪するかも」をお送りするかもしれません。

つていうか日刊一位とか幻覚だよね？ああ、日付変わつてすぐだからそういうこともあるのか？瞬間だからね？つていうか面白いのこれ？大丈夫なの私？プレッシャーとかパナイ。きっとこの一位は更新の速さというか、毎日更新されるだろうという信頼感からきていると思います・・・じゃあ、失踪できねーじゃん。あたま痛い。何が言いたいかつていうとありがとうございますつてことです。しかし、早くどこかの誰かさんが絶対不動の一位を取ってくれないかな？私は最高でも99位ぐらいでいいです。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

今日遂に衆人環視の前で寝てしまいました。ちょっと休ませてください。すいません。あと、他の書いてた奴もひと段落するまで休ませてください。本当に申し訳ありませんが、今はフレイヤにしばらくできるので手いっぱいです。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

丁度食堂で朝食を取り終わったわたしの前にスイーと、アルキメデスが優雅に降りて来て、わたしが差し出した右手に寸分違わず止まった。

いやーアルキメデス格好良いわ。見た目もそうだけど、止まるときに全く抵抗を感じ無かったし、今も爪を立てずに鷹揚とわたしの腕に佇んでいる。

「ご苦労さん。アルキメデス。今日も決まってるね。」

わたしが左手を差し出すと、アルキメデスはうやうやしく手紙を渡し、わたしの髪を揺らす事もなく静かに去って行った。

「ばない。アルキメデスばないわー。擬人化したら惚れてまうわー。」

「

「アルキメデスも当家に仕えるものですので。当然でございます。」

ウォーディ…多分言葉通りなんだろうけど、なんか嫉妬に聞こえるのは気のせいかな？

「擬人化なんてしなくてもわたしはウォーディに惚れてるよ。プロの技的な意味でな。」

ウォーディは一礼する。

「身に余る光栄。」

「はいはい。まあ、それは良いとして、まほーしょーはなんて言っ
て来たんだろうね？ ついでだからって勢いでパスポート取っちゃっ
たけど、ぶっちゃけわたしの扱いってどうなんよ？」

「と言いますと？」

「わたしってば一応書類上ホグワーツに在籍してるけど、まだ魔法
教育の触りも受けてないじゃん。だから、どっちゃって言うと、マ
グルとおなじ方法で・・・サラッとマグルとか言ってしまうとは
…わたしも相当こっちの世界に毒されてるな」 orz」

「お気を落とさないでくださいませ。」

「まあ、ぶっちゃけ日本には飛行機で行こうと思ってた訳よ。ここ
からじゃ、昔会った日本のリーマンの気が感じられないから、日本
にも博霊大結界的なものがあるんだと思う。だから、日本には瞬間
移動出来ないし、例え出来たとしても事前に了解を得てないと不法
入国になるしね。」

だから、マ…一般人と同じく正規の方法で入国するけど、魔法界的
には杖とか目録みたいなマジックアイテムを海外に持ち出したりし
て大丈夫なのか確認したかったんだ。

それに、日本の魔法界もわたしが断りもなく目録を持ち込んで、検
閲を受けずに城と物品をやり取りしたら迷惑だろうし、持ち出して
貰いたくない古文書とか教科書とか品物があるだろうからね。

で、差し支え無ければ滞在期間中、陰陽術を覚えてくれるところを
紹介してくれませんか？ って大和撫子精神の思いやりに溢れている
事態な訳だ。

それで…ウォーディは？」

「先日その旨を魔法省に伝えておきました。差し出がましいようでございますが、お嬢様の日本での魔法使いとしての身分保障、万が一の場合の魔法等の使用申請もしております。」

「…いや、マジで凄いやウォーディ。平然とわたしの予想の斜め上を行ってくれる。そこに痺れる憧れるう！世界三大執事に推しても良いぐらいだね。裏切りのせいでポイント落としては言え、The Butler とまで言われたウォルターと良い勝負が出来るよ。」

「私は裏切りませんからね。」

「ホントだ。勝ってるんじゃないか？」

「でだ。」とわたしがウォーディに右手を差し出すと、ウォーディはスツとハサミを渡してくれる。

「魔法省の返事は？つと。」

ジヨキジヨキと封を切り、分厚い封筒から中身を取り出すわたし。こんだけ分厚いんだから、さぞ目録とかのマジックアイテムの注意書とか、規制品リストとか、海外旅行の心得とか、ビザとか身分証とか魔法使用許可証が入ってるんだろうなと思ってた訳ですよ。

封筒から出て来たのは原色が目に痛いパンフレットと虹色のチケット、それに薄い羊皮紙一枚だった。

「・・・なんじゃこりゃー!?!」

「えーなになに?この度はイギリス魔法省、日本呪術陰陽道教会友好年につき開催される「7日間、日本を旅行してついでに陰陽道も習っちゃおう」プランに御申し込みありがとうございます。つきましては本日8月8日午後3時迄にカーデイフ国際空港国際線22+2/5番搭乗口にお越し下さい。―魔法省国際協力部―8月8日敬具

「ウォーデイ。」

なんでかな…涙が出ちゃう。

「お気を確かに。お嬢様。」

「…もうね…ツツコミ所満載っていうか、もはやツツコミ所しか無くて突っ込んだら何も残らないような気がするんだけど、わたし疲れてるのかな?」

「お嬢様…」

どれくらい頭痛いかって言うと、ウォーデイがフォローしきれないぐらいに重症。

「魔法省の役人は化け物か!わたしはこんな申し込みはしてないし、何よりわたしが聞いたたり、ウォーデイが申請してくれたことに何一つ応えていないじゃないか!友人とか知らんし、明らか今朝書いたばっかじゃねーか!まだインク乾いて無いよ!手に付いたし!しかも22+2/5番搭乗口って何処だよ!下手に25とか名付け

たら後で正式な25番搭乗口が出来たら困るのはわかるけど2/5
つてなんだよ！1/2でいいじゃん！っ！ゲホッゲホッ・・・ゼー
ゼー。もういやだ。ツツコミが追い付かん。」

ウォーディは黙っている。もはや魔法省に弁護の余地はない。この
状況で魔法省を弁護するのはよっぽどのバカか、大金を積まれた悪
徳弁護士だけだろう。

「
...」

わたしはそつと目録に触れる。

ウォーディは一步下がった。

「ブルーシート、コンクリートブロック2、瓦50」

椅子を降りたわたしの前に瓦割セットが出現する。

わたしは瓦の前に立ち。深呼吸する。

「ふーっ・・・せい！」

ゴッ！っと乾いた音を立てて瓦がガラガラと崩れる。

「ふう・・・ウォーディ。片しといて。後、旅行の準備を。」

「畏まりました。」

パスポートと旅行用のビザ、念のために5万円分のトラベラーズチ
エックをちゃちゃっとなんたら国際空港に来た。

荷物はチケットに書かれた大手航空会社にの預けたが、わたしがチケットを見せた途端に受付の女の人がレイプ目になって明らかに操られてます感が出ていた。彼女は大丈夫なのだろうか？後遺症とか出ない？そもそもマグルだからって魔法かけていいのか？

その後、出国審査に行ったが、目録はX線で全く透視出来ず、画面上真っ黒になったので、中身を見せる羽目になった。当然ながら目録の中身は他人の目には白紙にしか見えないので、わたしは、中身白紙のでかい本を持って一人進む痛い子扱いされた。なんかいろいろ辛かった。

明らか金属っぽい月光は、どういう原理か目録に仕舞うのに抵抗して仕舞えなかったので、ボディチェック覚悟でゲートを潜ったが、何故か金属探知器にかからなかった。

私が去った後ゲートがなにか焦げ臭さかったけどきつと気のせいだ。

はちまきは印象が変わりすぎるのでしてないし、腕輪もベルトもナイフも金属だし、いろいろ面倒なので外している。

普段いつも着けている身を守るアイテムを外しているせいか、なんだか自分が酷く小さく思えて、夏服の薄手のスーソーする白のワンピースがこの上なく頼りなく思えた。

そういえば、わたしは11歳の小娘だったなと今更ながら思い出して、思わず苦笑した。

そういう訳で目録を背に背負い、チケットを手にしているわたしは、22+2/5番搭乗口に向かうべく、22番と23番の間の椅子が

並んでいるところの柱やら何やらを無邪気な子供の振りをして調べて回ったんだが・・・

「どこよ？22+2/5番…」

9+4/9番線の要領で調べてみたけど、柱とかには何もおかしいところは無かった。もう3時までほとんど時間も無いのに、22+2/5番搭乗口への行き方はさっぱり分からない。魔法省のプランもどうでも良くなってきたのもういいや。とわたしは椅子に座った。

が、座れなかった。掛けようとした椅子はものの見事に擦り抜け、わたしは一回転して床に投げ出された。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

ハリーさんは夏休みの一月ほぼ軟禁状態で過ごしたため、数行で終わっていますがフレイヤの夏休みはこれからです。っていうか体調が真剣にヤバいです。癒しのソファアがほしい。夢の中でもこれを書いて展開が浮かばずうなされました。死にそうです。寝るとよくなると思います。二次創作って大変ですね。ルールがあるから始めるのは簡単だけど、いざ始めるとルールという枷がものすごく負担です。まあ、原作ブレイクできる技量はないので原作はわたしにとっては諸刃の剣です。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？（前書き）**

よく眠ったら大分元気になりました。次話の途中でホグワーツ特急に乗るはずです。

フレイヤ・マッキノンは賢者の石を知らない？

いてて、ここが22+2/5番搭乗口か？なんか違和感が・・・

「大丈夫かね？」

すつと差し出された痩せた手を私は掴んだ。

「ああ、すいません。まさか椅子から入るとは思わなかったんで。」

「そうか、君はマグル育ちだったね？案内を送るべきだったか、フレイヤ女史？」

ポンポンとワンピースに着いたほこりを叩き、わたしはわたしの名前を呼んだオッサンを見た。なんていうか・・・いろいろ残念な人だった。多分昔はふさふさだっただろう髪の毛は見事に禿げ散らかっているし、イケメンだったはずの顔も痩せて皺が寄り、自信のなさがあふれる雰囲気と相まってじよばくれた印象を与えていた。

「お気遣い感謝します。御仁。失礼ですがお名前をうかがっても？」

残念なオッサンの後ろにいる数人は魔法省の文官だろうか？しきりに腕時計的なものを見ているが、私にはその文字盤をどう読むのかさっぱりだ。他にはやけに落ち着いているのが2、3人。こいつらは戦闘民族っぽいなー。特にあの。泉風の人。オッサンはごほん。と咳払いして、私に一礼した。

「私は、コーネリウス・ファッジ。魔法大臣だ。」

ああ、まほうだいじんのおっさん略してマダオのファッジさんか。大臣がここに居るってことは国の行事か？日本との友好年とか言っていたし、どうやら私は嵌められて使節団的なものに強制加入させられたと。うわー歸りてー！。日本とか一般人とおなじように通常便で行きますので歸してください。お願いします。」

「へー。フレイヤです。なんかわたしあなたに嵌められたっぽいんですけど、この件が済んだらわたしのことは忘れてください。っていうか今すぐ歸してください。」

ファッジ大臣は・・・マダオは済まなさそうな顔をするが、顔だけだ。内心では全然そう思っていないに違いない。こいつ顔芸もできるのか？流石腐っても大臣か。マダオと呼ぶのはやめとこう。フアッ。大臣でいいや。その方が尊敬感が出るし。

「すまないが、ここへの入り口はもう閉じてしまった。君は我々と進むか、1週間ここで過ごすかのどちらかだよ。」

ぶつちやけ目録がある時点で城から食料を送ってもらえば1週間ぐらいどうってこともないんだけど、はつきり言って時間の無駄だ。いや、1週間だらだら生活も悪くはないが、どうせなら城でだらだらしたい。

「はあ、別に1週間ぐらいどうってことはないんですが、マグルの孤児院出身ですし。時間の無駄なんでついてはいきますが、どうしてこうなったかお聞かせいただいても？」

文官的な人がファッ。大臣に耳打ちしている。時間が・・・とか言っているのだろうか？もう3時まで5分ぐらいしかない。大臣は「かまわん。」とか言っていた。時間を取らせて申し訳ないとは思わ

ない。迷惑をかけられたのはこちらなのだ。日本人気質で思わず「すいません」と言いそうになるが、そんなことをすれば問答無用で連れて行かれるに違いない。イギリスまじ怖えわ。

「うむ。知っているとは思うが、今年は我が魔法省と日本呪術陰陽道協会の友好年だな。両国から文化交流として1週間交換学生を出すことになったんだが・・・」

「誰も集まらなかったから、必死こいて探したら自分で日本に行くことになっている私を見つけたと？」

ウホッなんという飛んで火にいる夏の虫。

「そういうことだ。どうも我が国の子女は自国の魔法以外には興味が無いらしい。先方には5名程度は送ると伝えていたのだが、担当者 の怠慢で報告が上がっておらんくてな。急遽君に手紙を出したというわけだ。」

大丈夫なのか魔法省？こんなだからヴォルさんに良いようにされるんじゃ・・・まあ、人口の少ないイギリスで、さらにごく一部しかいない魔法使い人口から優秀な人材を募ることは難しいんだろうが。っていうか今思ったけど基本的に「1年の魔法使い出生数 1年のホグワーツ入学数」なんだよな？ああ、魔法界終わってるわ。これに純血主義とか言い出したら一瞬で滅ぶんじゃない？

「それでわたしは明らかに罠の匂いがプンプンする手紙の通りホイホイここに来てしまったと。」

ファッ。大臣は肩を落とす。

「済まないがこれも我が国のためだ。」

我が国とか言われてもいまいちピンとこない。そういえばイギリスの国歌ってなんだったっけ？「星条旗よ永遠なれ」？ああ、これアメリカか。そういえばアメリカの魔法界ってどうなってるんだろうか？パッチ族とかいるのかな？今度行ってみよう。

「そうですね。誰かさんのメンツのために一肌脱ぎましょう・・・乙女の素肌は高くつきますよ？」

「ああ、心得ておくよ。」

そういうわけで、わたしは大臣から「臨時特使」的なものに任命され、マジックアイテム使用無制限、魔法使用無制限、治外法権その他諸々の国賓扱いを受けられるようにされてしまった。いや、確かに似たようなものを申請したけどさ、これはちよっとオーバーすぎなんじゃね？過ぎたるは尚及ばざるが如しっていうし、ちよっと責任的なのが重い。あと、基本的に日本の物品は「目立ちすぎないように」なら持って帰っても良いらしい。今回は3年後ぐらいにそこから辺の条約の制定準備もしに行くんだってさ。制定後に両国とも相手国に持ち去られた貴重なアイテムを交換し合う予定になっていて、水面下で日夜血みどろの仁義なき宝の奪い合いが行われているらしい。

・・・調子に乗ってたくさん持って帰らないことにしよう。超占事略決も秘密にしておこう。唯でさえヴォルさん関連で平穏な日々が脅かされているのに、忍者とも戦わないといけないとかいやすぎる。伊賀でガチバトルした先代の前科があるしな。

「で、どうやっていくんです？」

と、気を取り直した私はファッ。大臣に問う。

さっきまで感じていた違和感の正体は、出発までもう時間がないのに、このターミナルには「飛行機が止まっていない」事だった。わたしは魔法使いのターミナルだから飛行機じゃなくても、龍的なものが引くゴンドラ的なファンタジックビークルで行くんだろうと思ってたわけだ。だが、わたしの質問を聞いてもファツ。大臣はいまいちピンときていないようだった。数秒して、なんか納得したのか、ポンと両手を叩いた大臣は無垢な子供を見るような目で答えた。

「そのゲートの向こうが日本だ。と言っても潜れるのは午後3時から5分間だけだね。」

ファンタジー世界の住人よりもファンタジー脳になっていた私は激しい自己嫌悪に襲われた。

はい！そういうことでタノシイタノシイ日本旅行から帰ってきました！今現在癒しのソファアに埋もれております。

え？キンクリ？スタンド攻撃？何言ってるんだ？あれだけ充実した日々を送ったじゃないか？忘れたとは言わせないよ？

と、まあ日本旅行は充実してたわけですよ。

日本の空港に着いたと思ったら、フラッシュの嵐でムスカ大佐の苦

労を味わい、パパラッチに取り囲まれて「どうして日本の陰陽術に興味を持ったのか？」と、へたくそな英語で聞かれ、意味を把握するまでに数秒かかってしまって黙ってたら、どうせ分からないだろうと『なんだよ、お高く留まりやがって』とかあーだこーだ文句を言われた。

自分で罨に嵌りに行ったとはいえ、ファツ。大臣関連で沸点の下がってたわたしは思わず。

『日本人は品格を重んじる民族と聞いたんですが、とんだ間違いでしたね。』

と言ってしまった。文句を言った記者は思わず頭を下げてきたが、そのあと私が日本語を話せると知ったパパラッチの人。波を食らってしまった。地。大国怖いわー。イギリスじゃ。度2でも大地。扱いですからな。

やつのことで人。波から逃げ出し、使節団の居る。台に避難してきたが、それを見ていた大臣に、その場で「使節団御つきの通訳」を仰せつかってしまった。

「断固拒否します。って言っても無理でしょうから会談1回ごとに200ガリオン要求します。」

って言ってやった。が、ゾクのはちまきをしていないせいか、まだ攻めが甘かったようだ。その場で1000ガリオン渡され、驚いている私を見たファツ。ンファツ。大臣はニヤニヤ笑って。

「今回の訪問で5回の会談がある。よろしく頼むよ。下手に通訳呪文を使うと日本側も分かっていると思って交渉してくるからね。通訳

の存在はありがたい。国益を考えればそんなものはした金だ。」

「やっちまったああああああああああ！！」

その後、空港を出たわたしはクソ大臣と別れた直後、イギリスからの留学生を迎えにきた日本の魔法学校の先生らに拉致られた。わたしはこの。ーさん？って感じの黒塗りのリムジンに放り込まれ、観光する間もなく、あり得ない速度で高速を爆走するリムジンに酔いながら、京都の嵐山まで連れて行かれた。

頻繁にソファ―に座っている城に居る時には気付かなかったが、地味に目録と月光が魔力をチューチュー吸っていたので、嵐山に着いた時のわたしは満身創痍で、マジで死んじゃう5秒前だった。日本の魔法先生方に土下座して、生命維持装置もとい、癒しのソファ―に座って回復した。休んでいるので動けないわたしは、仕方がないとはいえ、彼らの文句を聞かされる羽目になった。

曰く、はじめは交換留学生を持ちかけてきたのはイギリス側で、定員は20人規模だったらしい。先生方は嫌がる日本の旧家を回り、

「なぜ誇り高き陰陽術の旧家たる我が家の子女が、イギリスなどの棒切れから球を出すしか能のない奴らに教えを請わねばなんのだ！」

と罵倒を浴びつつも、期日の迫る中、苦勞して定員を集めたらしいやれやれこれで日本とイギリスの関係がこじれないで済むと安心したのもつかの間、土壇場でイギリス側が

「やっぱ20人も集まらんから5人枠にしてよ。こっちも受け入れられないし。」

とか言ってきたらしい。先生方は今度は、嫌々ながらも行くと言った限りはと、イギリスで舐められないようにその家の威信をかけて準備をしていた生徒の15人の家に土下座して回ったらしい。

さらに極めつけはさらに土壇場の今朝。

「学生5人枠分の優秀な人材を1人見つけたからその娘を送るわ。」
って言われたんだってさー。わーい。イギリスは戦争でも起こした
いのかね？そしてわたしは英日ファンタジー大戦を避けるための人
柱になってしまったと。

「・・・平穏な日々は何処へ行ったあああああああああああ
あああああああ！！！」

そこからはやばかった。日本呪術陰陽道協会から派遣された先生5
人だけでなく、なめきったイギリス外交官にメンツをグーパンでそ
げぶされ、プツンした日本の陰陽道旧家からお忙しい中、親切に
も時間を割いていらっしやった、いかつい御仁15人。合計20人
のあり得ない猛攻に、慌てて目録からいつものフル装備を呼び出し、
特攻精神で迎撃したわたしだったのだが、物の1時間もせずになた
しはぼろ雑巾になっていた。

これわたしじゃなかったら軽く100回は死んでるんじゃない？と思
いながら全身から魔力を絞り出してやつのことでソファーを呼び
出し、なんとか倒れこんだ。20人の一流陰陽師のリンチを1時間
とはいえ凌いだ私に、阿修羅と化した20人は「イギリスにもそれ
なりの気概のある者もおるのだな。」とか言っていたが、わたしは
最後の力を振り絞って、「いるとしても多分わたしだけです。ほか

のダッチはヘタレですから。」と言っしかなかった。

ソファアに倒れこんで気絶した私はこれで解放されるのだとか甘いことを考えていた。

「起きろ」

ボカッ！

「いったあ！」

あたまに衝撃を受けた私は、また弾幕勝負か？と辺りを見回した。

あれからどれだけ経ったのかは知らないが、どうやらソファアごと別の場所へ運ばれたらしい。私の目の前にはSP風のグラサン高身長イケメンさん。その手にはお札を持ってる。なんか怖い。

「ここはどこです？」

あたりをきよろきよろ見回すわたし。私は、どこかの高級そうな部屋で式神のガチムチ鬼さん達に囲まれていた。

「東京だ。我が国と貴国の会談会場の控えた。」

どうしてそんなところにいるんだー！嵐山じゃなかったけ？

「何故私が？」

「通訳なのだろう？貴国の代表は通訳なしでは交渉の席に着く気がないらしい。」

そういえばそうでした。なんかめっちゃ気まずい。ファツ。ン大臣め！給料分働けこの税金泥棒が！あ、わたしもお金貰ってたんだっ
た！しまったー！！

イケメンSPさんはなんかぶつぶつ言った後、持ってたお札を投げつけてきた。気絶する前のお札パーティでお札がトラウマになっていた私は、反射的に避けようとしたが、回復しきってなかったので無理でした。

「っ！・・・」

なんか札が当たったのに痺れもしないし、痛くもない。変な幻覚もこないし、札から現れた鬼に金棒でどつれてもいない。ゆっくり目を開けた私はもはやぼろぼろで黒こげになった白のワンピースから素人目にも高級だとわかるオーラが半端ない着物に着替えていた。

「杖と本を外せ。」

と、着替えさせられてテンパってるわたしにSPさんがイラついた声で言ってくるが、

「本はいいですけど、杖は無理です。呪いの装備なんで。」

と言ったら、虚空から3枚の札を取り出した。ああ、この人もダンブルドア先生みたいにどこから何を取り出しても驚いてはいけない人種なんだと納得した。っていうかわたしもある意味そうか？目録あるし。

何するんだ？とわたしはSPさんを見ていたが、SPさんはわたし

の杖と目録にペタペタと手際よく札を張っていった。相棒はともかく月光是札から逃れようとわたしの腕を蛇みたいに逃げ回って気持ち悪かったが、SPさんはあっさり捕まえた。札を張られた月光と相棒は今までわたしの腕から決して離れなかったのがウソみたいにぼとりと力なく落ちた。

「すごいですね。でもどうして目録まで？」

久々の解放感。物理的に重いつていうのもあるけど、魔力吸収がなくなつた私は全身が軽くなるのを感じた。きつと呪念錠を取つた瞬間ってこんな感じなんだろうな。

「おまえの手の内は先ほど見せてもらった。念のためだ。」

へー抜かりない。っていうかわたしが空港で通訳に決まつた時から、あのリンチとか全部予定調和だったのか？確かに使節団の中でわたしはぽつと出のイレギュラーだから手の内を把握しておきたいっていうのは分かるけどさ。まあ目録はわざわざページを開けて仰々しく物品名を呼ぶようにしてたから、触つて念じるだけで呼び出せるとは知られてないだろうけど、手の内を知られるっていうのがこんなに怖いことだとは思わなかった。

それにしても、わたしこの兄さんに調教されてない？いつもの調子が出ないんだけど。

「時間だ。行け。」

と、SPさんの鬼にせつつかれて部屋の出口の扉に手をかける。

「あ、そうだ。」

とわたしは振り返る。

「なんだ？」

うわ、SPさん機嫌悪そう。でもわたしは引かない。

「あのお札今度ダース単位で譲ってくださいませんか？御代は弾みます。」

SPさんは肩を落とした。

「分かったからさっさと行け。」

よし、これでまたこの解放感を味わうことができるぞ！

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

ご迷惑をおかけしてすいませんでした。ペースうんぬんよりも丁寧に作っていきたいです。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

わたしは人に対してはドSだけど、自分に対してはドMなのかもしれない。

っていうか前話の中で時差のことをまったく失念していました。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

控えを出たわたしは別のSPさん（女性）に連れられて会談の会場へ行ったわけです。

いやーこの迎賓館？日本にこんなところがあったんですね？6年前まで日本人だったわたしですがこんなところに来るのは初めてなわけですよ。なんか調度品が一式すごい。赤いふかふかのソファーにシャンデリアとかあと、壁と柱。どこかの偉い人が言っていました。「壁と柱を見ればどの程度分かる」と。確かに調度品とかは高いものを置けば誤魔化せるけど建物はごまかせないもんねー。

えらいところに来たもんだ。はっはっはー帰りたい。

「こちらにございます。」

と、SPさんが扉を開ける。いや、この人まじで美人だわ。6年前だったらジャンピング3回ひねりスライディング土下座しておつきあいを申し込んでたね。

「ありがとうございます。」

と、一礼して会場にはいる私。扉をくぐった私に注がれる視線多数・・視線が痛い。これやばくね？ファツ。大臣が通訳こなけりや話さないって言ってたといっても、結局はわたしが国際会談を遅らせていたってことですよね。うわーい。

っていうか、長いテーブルの両サイドに日本とエグレスの代表が座っているんだけど、日本側の代表はうさぐさい微笑みを、イギリ

ス側の代表はしまったという顔をして青くなっていた。何だか良く分らないが、通訳は初めてなので至らないところもあります。がよろしく願います。って言っという。ああ、胃に穴が開く。

両国の事務次官レベル？的な会合らしく、わたしは相手の言葉をそのまま伝えればいいと言われたので、そうすることにした。っていうかわたしにはこれが国際会議なのか良く分からなかった。お世辞とか、寿司はうまかったとか、どこかは良かったとか、今度温泉に行きませんかとか、お前ら通訳祝文でいいんじゃない？って思っていた。両国の代表が雑談を終わらせたとき、今度は日本側の代表が青い顔をしていて、イギリス側の代表が勝ち誇った顔をしていた。

で、その後、外交ガチバトルが始まった。わたしは元日本人的な意味で日本に肩入れ気味だったが、いや、余計なことはすまいと、全自動翻訳機になっていた。初めは気落ちしていた日本代表もすぐに気を取り直してイギリス側と一進一退の交渉をしていた。なんか、両国とも相手国に渡った物品の交換基準になるランク付けについて話しているらしかった。

特に、その品物が所有者を選ぶ系のアイテムは難航していた。が、結局その品物が両国の外の第三国に渡らないようにすることだけを確認して、交換はアイテムの所有者ごとするのか、アイテムだけなのかとかの交渉は次回に持ち越された。っていうかさらっと怖いことと交渉してるな・・・

そんなこんなで会談は終了し、わたしはイギリス代表とともに会場を出たんだが、控えに帰るとき、代表に感心された。

「通訳なんてやったことないんですけど、うまくできていました？」

「いや、それもあるが、それより、その着物を着ていて何ともないのか？」

事務次官のオッサンはかなり背が高いので見上げないといけない。首が痛い。

「は？なんともないですけど？」

この着物はまた呪いの装備系なのか？でも魔力は吸われないし、普通に高級な着物って感じなんだが。

「君が会場に入ってきたときはやられた！と思ったんだが・・・」

控えに着くまでオッサンはいろいろ話してくれた。どうもこの着物、やはり所有者を選ぶ系のアイテムらしい。なんでも伊勢の斎宮がうんぬん日本の神の加護がどうたらすごい霊装で、資格がないものでも身に着けられることは身に着けられるが、無理に着用すると「I LOVE JAPAN」な性格になるんだそうだ。もうね・・・何も言わん。まだホグワーツに入学もしてないのに早くも廃人にされるところだったよ。で、日本好きになってないということはわたしはこの着物に認められたということらしい。今の段階ではわたし所有の無害なすっごい霊装だと。

オッサンはこれでアレを取り返すカードができた。ふふふ・・・とが言っていた。日本側はなめ腐ったイギリスに仕返しをするという目論見が外れてタダでイギリス側っていうかわたしにアイテムを渡してしまったと。

まあ、そんなんでもいいわ。と、わたしは控室に戻る。

扉を開けるとさっきのSPの兄さんが、バチバチと電撃を放ちながらわたしのところへ飛んで行こうとしている月光をボロボロになり

ながら抑えていた。月光についていた札は追加に張られた分まで焼き切れていた。

「・・・プっ」

あまりにも必死なのでわたしは思わず笑ってしまった。

「笑うな！」

と、兄さんは月光を放す。兄さんの頭はアフロになっていた。このドリフだ。

月光はずっとお預けを受けていた子犬のようにわたしの左腕に引付いた。なんかいつの間にか相棒も右手に戻っている。札をはがして、目録を受け取った私はSPさんに後ろを向いてもらい、服を呼び出して着替えた。着物はちゃっかり目録に登録されていて、着物を目録で転送したのを見たSPさんは驚いていたが、「所有者と認められたそうです。荷物を預かっていたくださりありがとうございます。」と、いうとSPさんは苦い顔をしていた。SPさんにお礼を言ったわたしは、迎賓館を後にした。預けていた目録と月光はいつもより魔力を吸い取ってきてげんなりした。

そんなこんなで、6日間、朝は嵐山で陰陽師と弾幕バトル、気絶して目が覚めたら座学を受け、夜は東京に拉致られた。会談の控室では、もらった着物に着替えて、目録と月光をSPさんに預けた。月光は次第に魔封じの札に耐性ができてきたようで、回を重ねるごとにSPさんのボロボロ具合がひどくなっていた。そして、会談が終わったら黒いリムジンで高速を爆走し、戻ってきた目録と月光に魔力を吸われてソファに倒れる。

そういう過酷な生活をしていた私は最後の1日までに、「瞬間移動用のマーカー」「変わり身」「身代わり」機能を備え、簡単な命令

なら自律してこなす式神を作り出すことができるようになっていた。しかもこの式神、わたしの所有物扱いなので目録を開くと式神の視界が映し出されるというおまけつき。戦闘力はないが、たくさん作れるので、戦闘時に大量にばら撒けば、瞬間移動で高度な三次元戦闘ができるようになると思う。

ちなみに超占事略決の封印は解かなかった。っていうか解けなかった。だって本から出てくるオーラが朝の一流陰陽師耐久リンチよりも遥かに強力なんだもん。無理。パーフェクトフレイヤへの道は遠かった。まあ、地道に鍛錬することにしよう。

そして今、わたしはある町に来ている。今日の午後4時までは自由行動が与えられていた。そして夜6時から8時まで晚餐会的なのに出席した後、午後9時に空港からゲートでイギリスに帰るらしい。

「懐かしい公園だ。」

あの鉄棒では結局逆上がり出来なかったなとか、あのブランコで調子に乗って飛び出したときに着地に失敗して捻挫して怒られたっけとか思いながら、わたしは公園の真ん中にあるでかいドーム状の象のすべり台に近づいていく。

「お、いたいた。」

わたしは象の側面の覗き穴から中を覗き込む。

「あんただれ？」

穴の中にはどこにでもいそうな黒髪の少年。小1ぐらいか？分かったやいるんだけど態度悪いな！。

「初対面の人間にあんた誰はひどいね。となり、いいかい？」

ぶずつとした少年は小声で「いいよ。」という、わたしが入る分のスペースを開けてくれた。

この象のすべり台の中に入るには象の後ろの大きな穴から入るのが普通だ。覗き穴から入るにはちよつとしたコツがある。自分以外ここから入ることができる奴がないのが小さいころのわたしには自慢だった。

「昔取った杵柄ってやつか・・・」

と、わたしはのぞき穴からずりりと滑り込む。フレイヤになる前のおっさんだったら無理だったが、今のわたしは11歳の少女。ギリギリセーフだ。

「うそだろ・・・」

と、隣の少年が呟く。

「残念でした。世界は広いんだよ。まあわたしのはちよつとズルいけどな。」

と、わたしは笑う。

少年はわたしの顔をチラチラ見ているが、わたしは気にしない。ここに来るのは本当に久しぶりだもう20年と6年ぐらいか？

「なあ、おまえ、名前は？」

チラチラ見てくる少年が声をかけてくるがわたしは答えない。少年

は私が答えなかったことでバツの悪をうに下を俯く。

「ここの俺は、わたしになるんだろうか？」

「え？」

少年がわたしの方を向く、しかしその前に私は瞬間移動していた。

午後4時までにはまだ時間があるし、買い物とかは今しかできない。せつかく作ったトラベラーズチェックを無駄にはしたくないので、わたしは5万円で米やら醤油、味噌、昆布、鰹節とかイギリスでは手に入りにくいものをまとめ買いしていった。2011年だとイギリスでも醤油ぐらいは買えるって聞いたけど今は1991年。20年先の物流はまだ実現されてない。

食料品を買いあさった私はお金が無くなったので、使節団の居るところにまで瞬間移動して両替してもらった。また10万円ほどの現金を手にしたわたしは本屋でマンガを棚買いしたり、神保町の古書店でトレンチコートを着た巨乳メガネのビブリアマニアと本を奪い合ったりと好きなだけ買い物をした挙句、片っ端から目録にプチ込んでいった。

買い物に満足した私は、晩餐会に参加したんだけど、日本に来てからいろいろひどい目にあったけど、この晩餐会ほど疲れることはなかった。万年貧乏性のわたしには社交界は無理だとわかりました。

で、使節団と無事にイギリスへ帰ってきた私は大臣から「来年も頼む。」と言われたので、「断固としてNO!」と叫んで大臣から見

えないところまで走っていき、家まで瞬間移動した。

「そして今に至る・・・と。」

「災難でございましたね。」

「久々のウォーディ登場。わたしのすさんだ心を癒してくれるのは君等だけだよ・・・ホグワーツに行く前に死んでしまいそう。」

ソファアでうずくまるわたしにウォーディは、ずっと紅茶を渡してくれる。

「ありがと。日本にいる間はずっと緑茶で、あれはあれで懐かしくておいしかったんだけど、今のわたしは紅茶派だねー」

ずずず。とお茶をすするわたし。ソファアに持ってきてもらった1週間前の日刊預言者新聞には「使節団日本へ」という見出しとともに大きな写真が載っていた。写真の中では大臣とかが手を振っていたが、わたしは他の人かげに隠れようとしていた。

紅茶の匂いを楽しみながらわたしは外を見る。それにしてもイギリス側はとんでもない時期に使節団を送ったな。8月8日から15日とか喧嘩を売っていると思えん。よく交渉がうまく纏まったもんだ。それにしても、ホグワーツに行くまでの15日何をするかなー、大体の呪文は陰陽魔法弾幕バトルで死ぬ気で使いまくったから猛練習することもないし、学校で習うときは手加減しないといけない。いっそのことオリジナル呪文でも作るかなーと、時差ぼけの抜けない頭で考えた私は、ソファアが時差ぼけも直してくれることを期待して昼寝することにした。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

ちよつと無理やりですが、日本編は終わりです。明日は休みます。
次話は多分組み分けまで行きます。ぶっちゃけ本編に入るとあとは
短いはずでず。

幕間・意味不明な夢会話・（前書き）

ストーリーには全く影響しません。フレイヤに対するわたしの妄想設定を爆発させただけです。

幕間・意味不明な夢会話・

説明しよう！

フレイヤ・マッキノンとは二重人格である！

謎の存在によりフレイヤ・マッキノンとなってしまった「前世の俺」は、日々前世の自分とフレイヤという今生の存在の乖離に苦悩していた。つまり、男の人格である「前世の俺」では女であるフレイヤとして生きていくのを受け入れられなかったのである。

元の世界に帰りたいと願うのにそれが叶わないという現実には「前世の俺」の精神は次第に病んでいき、フレイヤとして生きていくにふさわしい別の人格を作ることになった。それが「今生のわたし」である。「前世の俺」の人格は女のフレイヤとして生きていくにふさわしい人格、「今生のわたし」に主導権を譲り、裏の人格となった。こうしてフレイヤ・マッキノンは表人格「今生のわたし」と、裏人格「前世の俺」を有する二重人格となったのだ！

表人格である「今生のわたし」はフレイヤとして前向きに生きていくと決意し、裏人格である「前世の俺」はどうせ元の世界に帰れないなら、こっちで元の世界っぽく生活しようとするフレイヤの精神世界に「俺の部屋」をつくって引きこもり、日々「今生のわたし」が撮った「フレイヤの素敵写真」を愛でる前世とあまり変わらない二重生活をしている。

そして二人が出会ったのがこの「夢会話」である！

「……というわけだ。わかったか？「今生のわたし」よ。」

「分かりません。」「前世の俺」さん？」

「ふっ……分からなくともよい！筆者にもわからんらしいからな！」

「じゃあなんでそんなにテンションが高いんですか？」

「ふふふ……よく聞いてくれた。」「今生のわたし」よ！お前の人格は女だ。」

「まあそうです。わたしは結構男っぽいですが、女のフレイヤなの
にいつまでも俺は男だって言い張れませんからね。まあ、男装して
喜んだりしてますが。」

「ならば、男と結婚しても精神的に苦痛は感じないと。」

「「前世の俺」さんが、男としては例え肉体が女でも男と結婚できない！とか悩んだ末に分離した人格が「今生のわたし」ですからね。
まあ、そこらへんは許容範囲内です。」

「ふふふ……では「今生のわたし」よ。あの日、日本で出会った
少年と結婚しろ。」

「……頭湧いてるんですか「前世の俺」？私とあなたが結婚する
って言ってるようなもんじゃないですか？」

「いずれ「今生のわたし」はフレイヤ・マツキノンとしてどこぞの
男と結婚しなければならぬのだ。それならば心も体も隅々まで知
り尽くした転生前の「前世の俺」と結婚して問題あるまい？それに

運命的に「前世の俺」は彼女いない歴〃年齢の純潔青年だ。多少暗いところもあるがいい奴だぞ？本人が言うんだから間違いない。」

「何だか壮絶な自慰行為のような気がするんですが・・・」

「何も問題はない。入れ替わりもので結局元に戻れず、入れ替わった相手と結婚するようなものだ。それに例え「今生のわたし」という人格が女だったとしても転生前は男だったという記憶は消えてはいまい？それならば気心の知れた転生前の存在だと安心できるのではないか？」

「今の状況ってシスコンの兄が妹に、「結婚するなら生き別れの双子の弟にしる戸籍上は問題ないから」と勧めてるような状況だと思うんですけど。」

「ふむ。気分的にはかなり近いな。だが、今回は戸籍上だけでなく遺伝的にも問題はない。この世界の俺が「前世の俺」のように転生するかどうかは分からないが、それまでに子供を作ってしまうばマツキノンは安泰だ。大丈夫、転生前の俺はかなり一途だ。フレイヤ・マツキンという美少女から告られれば一発で落ちるだろう。さっさと落としてやって来い！」

「いや、でもわたし11歳ですし。」

「ふっ・・・甘いな・・・」

「何がです？」

「もし組み分けでスリザリンに入れられたらどうなるか考えてみる。」

「スネイプ先生と仲良くなれますね。」

「メリットはな。デメリットを考えろ。「今生のわたし」よ。果たして日々マグルはクソ派の本拠地であるじめついた窓もない地下牢の寮で、毎朝「おはようマルフォイ」しなくてはならない生活に耐えられるかな？」

「・・・」

「きつと耐えられまい。「今生のわたし」は毎晩夜になると8階の必要の部屋の前で3往復しながら「窓がある安眠できる部屋を」と唱えるようになるに違いないのだ。」

「いや、でもスリザリンには入りたくないし。」

「血統的には申し分ない。才能も悪くはない。グリフィンドールは嫌だ。それに何より自身の平穏を得るためには手段を択ばないではないか。組み分け帽子が素直にハッフルパフへ入れてくれると思うか？」

「まだ被ってないし、分からないよ。そんなこと。」

「甘いと言っているだろう！最悪の場合を想定しろ！スリザリンに入れられ、フォイフォイのクソガキに惚れられたらどうする？」

「多分フォイフォイを殺すか自殺する。」

「そうなれば平穏な生活などは得られまい。そんな時におすすめなのが「転生前の俺」！例えばマル公に好きだと詰め寄られても「自分

彼氏いますんで。」ということが出来るうえに、スリザリンのいろんな意味で暗い寮の中でも、一途な彼ならばきつと心の支えになってくれるだろう！そんな「転生前の俺」が今回何と「フレイヤのスマイル」一回であなたのものに！非常にお買い得です！さらに今から調教することで「逆紫の上」化させ、理想の男性に育てることが出来ます！今回がラストチャンス！」

「・・・もうグリフィンドールでもいいや。」

「ええ？！それじゃあ今度はハリーさんに惚れられるかもしれんぜよ？！ジニーのお株を奪って良いんかい？！それに絶対平穏な生活が遠のくよ！？」

「惚れられたとしても振る。マルフォイよりまし。」

「マルフォイエ・・・まあアイツは振っても縋り付いて来そうだけどな。その点ハリーさんはすっぱり諦めてくれそうだが・・・ヴォルさんはどうする？」

「まだハツフルパフに入れないと決まったわけじゃないし、レイブンクローでも問題はない。それに、どの寮に行ってもヴォルさんと戦う可能性は無くならない。どっちにしても強くなるしかない。」

「だが、フレイヤが戦うとなるとプランが崩れてしまうかも知れんぞ？そうなれば「死の杖はハリーのだったんだよ！」が崩れ、ヴォルさんの「失敗した死の呪文」+「リリーの死の犠牲」効果で、ハリーの中のヴォルさんの魂だけ殺し、ハリーを復活させるプランが使えなくなるかも知れんぞ？」

「それについては考えてある。」

「マジで？」

「わたしは死ぬかもしれない。」

「やーめーてくれー。俺も死んでしまっ！っておはよふの時間だ。じゃあな！転生前の俺を是非お婿にしてあげてください。」

「最後の手段として考えておくわ。転生前の俺が消えるかもしれない2011年だと私も三十路だしね。20代には結婚したいし。」

幕間・意味不明な夢会話・（後書き）

次話はキングズクロスから入ります。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

ついに10万文字を超えてしまいました。初期のドラゴンボールなら無双出来ますな。というわけで、今日から多分隔日か、2日おきの連載になると思います。だからといって質が上がるわけでも量が増えるわけでもありません。あしからずご了承ください。また、予告なく投稿が遅れることもございますが、失踪するときはそうお伝えしますので、ご安心？ください。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

はてさて、楽しい楽しい夏休みはあつという間にすんでしまった。

暇をもてあましたわたしはこの前の「大臣の借り」を使って、イギリス海兵隊にコマンドー式の買い物に行った後の揉み消しをしてもらったり、戦闘系の呪文を鍛えたり、オリジナル呪文の開発、式神技術の向上、極めつけはマーリン爺さんに協力を仰いで魔力を貯めておける所謂魔力電池の伊達めがねを作ったりしていた。この伊達めがねのおかげで、夜癒しのソファで寝るならば、日常生活においてはソファに座らなくても大丈夫になった。まあ、一日に何度めがねを架け替え、夜にはめがねを4個も抱えてソファで眠る変な子になってしまいが・・・学校生活ではそうそうソファに座ってられないし、魔封じの札を使えば負担が消えるとはいえ、わたしはまだSPさんと同じ魔封じの札を作るには実力不足だ。せつかくもらった札はもう少し有効に使わなくては。

ソクのはちまきはできれば着けておきたいが、頭に巻くと目立つし、腕にひつついている月光も悪目立ちするので、もういつそのこと一緒に隠してしまえと、月光ごとギプスのように腕に巻くことにした。しかし、頭に巻かなくても漢気は外に迸るようだった。はちまきの漢気は、ハリーさんその他に覚えられているので、漢気を外に漏らさないようにしなければならなかった。そのために、お札やら封印術やらを使ってみたが、結局「腕に巻いたはちまきの上に竜のベルトを巻きつける」というスタイルに落ち着いた。ギプスの上から竜革のベルトを巻きつけている少女・・・激しく痛い。

・・・どうしよう。ものすごく恥ずかしい。ありえないほど痛い。でかい目録を背に背負い、日に何度もめがねを変え、夜にはめがね

を抱えてソファで眠り、腕にはギプス的なものの上にベルトをぐるぐる巻きにしている少女・・・これもう長袖しか着れないな。

でも！そんな苦労も私がハツフルパフに入りさえすれば問題はないのだ！うはははは！

そういうわけで、ただいまキングズクロス駅9+3/4番線の本グワーツ特急に乗っているわけですよ。わざわざ朝の9時から。わが城から離れるのがこんなに不安だとは思わなかった。これからハリーさんを避けてなるだけ目立たずに生きて行こう・・・いや！なんかもういや！何でこんなにビクビクせんとならんだ！もうハリーさんとか知らぬ！元気に生きて行こうって決めたばかりじゃないか！

っていうかわたしが着いた朝9時にはもう先頭の2つの車両は埋まっていた。お前ら遠足か？修学旅行か？私はこんなに嫌気がさしているというのに！わたしは周りの少年少女たちのテンションに耐え切れず、前の方の誰もいないコンパートメントに滑り込み、起きるまで眠ることにした。ハリーさんらは確かギリギリになってやっと来る筈だったな。それもほとんど最後尾のコンパートメントに入るはずだ。

ふふふ。完璧。ああ、朝早起きしたから眠いわ。座席は癒しのソファーよりは遥かに劣るけど、まあ、贅沢は言ってられん。寝過ごしてもホグワーツについたら髭もじゃビッグフットが起こしてくれるだろう。

「君、君、起きて・・・」
ゆさゆさ

「う．．．ん？」

なんだ？もう着いたのか？すでにロープに着替えていたからいつ降りても大丈夫だが．．．眠いけど仕方がないか．．．と目を開けた私の前には赤毛ののっぽさん．．．いやー赤毛の人とかいっぱいるよね！大丈夫なはず！

「すみません。起こしてもらって。もう着いたんです？」

「いや、まだ発車してないよ。」

「え？」

どういうことなの？嫌がらせか？

「このコンパートメントは監督生の指定席なんだ。すまないね。」

なん．．．だと．．．

たしかにこのこと隣はなぜか空いてるなーとか思ってたが

「Oh．．．」

超恥ずかしい！何でこんなときだけ発動されるかな！おっちょこちょい属性は！しかも赤毛さんの後ろに立っている女の人もクスクス笑ってるし！あー死ねるわー！

「すまないね。君は一年生かい？コンパートメントを移るのを手伝おうか？」

監督せーで赤毛っていったらパーシーさんじゃないっすか！もう嫌です。

「．．．」

もう恥ずかしすぎて言葉も出んわ。パーシーさんに一礼した私は万が一目録が使えない可能性もあるからと用意したトランクケースを引きずり、逃げるようにして廊下に出た。が、廊下は廊下で大混雑。手近かなコンパートメントはもう既にお友達組みに占拠されていた。

わたしは海軍で拾った腕時計で時間を確認し、いつそのことなら外から回るかと、テンパリ過ぎていろいろ忘れていた。ちよちよつとトランクに「軽量化」を掛け、車両の外に出たわたしは、「ヒキガエルが・・・」とか「ギヤー蜘蛛がー！」とか周りがいつているのを全部無視してずんずかと進む。わたしは人ごみを掻き分け、やつとの事で空いているコンパートメントを見つけた。とにかくハリーさんが来る前に車両に乗り込んでさっきのコンパートメントに入り、お札で扉を封印してしまおう。そうしよう。

それにしても・・・なんだいあのガキは！男の癖にトランクも持ち上げられないのか？扉の前が悶えているじゃないか。ああ、またトランクを落として足に。いや、マジで痛そうなんですけど。別の入り口から入るか？いや、手伝ったほうがいいのか？いや、わたしにはそんな余裕はない。この際、隙を見て通り抜けよう。時間がないのでわたしは我慢しきれず、そのナヨツチイののせいで入れない列車の乗り口まで進んだ。少年はちよつとあきらめ気味でトランクを下ろしている。自分のトランクは軽量化しているのでありえないほど軽い。すり抜けるならいまだ。

「手伝おうか？」

・・・え？わたしはそんなことは言っていないよ？っていうかわたしの後ろから声がしなかった？と、振り向くとそこには赤毛の少年B。 「うん、お願い。」

と、肩で息をしている少年が答える。と、いうことはと、わたしは目の前の黒髪の少年をよく見る。

ハリーさんでしたあああああああああ！！！！しまったあああああああ！！！！

「おい、フレッド！こっち来て手伝えよ！君もお願いできるかい？」

赤毛Bは仲間を呼んだ！赤毛Cが現われた！

うおおおおお！もうだめだああああああ！ハリーさんとウィーズリー兄弟に発見されてしまった！一刻も早くこの場を離れなければ！

「・・・」

魔法でハリーさんのトランクを軽量化するか？とか、いろいろ考えたわたしは、結局聞こえなかったふりをして黙って列車に乗り込みました。ハリーさんは何も悪くないのにガン無視を決め込むわたしは最低だ・・・でも、わたしには無理。ヴォルさんが消滅した暁にはハリーさんと仲良くしよう。「今までごめんね。」って謝ろうそうしよう。

この後すぐにハリーさんの自己紹介イベントがあるはずだ。だって、そそくさと乗り込んだわたしが振り向くと、ハリーさんが髪を掻き揚げていて、稲妻形の傷跡が見えちゃってるもん！ウィーズリー兄弟があわててるもん。まあ、とりあえずの危機は去った。後はさっきの開いているコンパートメントに・・・

「ガラッ！」と、コンパートメントの扉を開けると、その席の上にはかごに入った白いふくろう。

「・・・ヘドウィグさん？」

わたしの言葉がわかるのか、「ホー」と頷く白ふくろう。なんてこったい！せっかく開いているコンパートメントを見つけたと思ったら既にハリーさんによってキープされていたとは・・・窓からヘドウィグ入るとか反則だろ。一瞬フリーズしたわたしだったが、すぐにほかのコンパートメントを探そうと後ろを振り向き、扉のノブに手をかけようとした。が、わたしが触れる前に扉はなぜか自動で

開き、わたしの前にはハリーさんがたっていた。

どうすればいいんだ？わからん。とりあえずわたしは一步引いてハリーさんがコンパートメントに入るのを手伝い、一緒にハリーさんのトランクを座席の上の荷物置きにあげた。そして無言で去る。完璧だ。フレイヤ・マツキノンはクールに去るぜ。

「手伝ってくれてありがとう。」

「・・・」

どう答えたら良いんでしょうね？誰か模範解答をください。

「・・・ねえ、僕避けられるような悪いことしたのかな？僕、こっちの常識がなくなつて、知らないうちに迷惑かけたのなら謝りたいんだけど。」

ハリーさんが無垢な顔でわたしを見てくる。いや！やめて！わたしは元男ですから！そんなウルウルした目で見てください！はっ！よく考えるとハリーさんもまだ11歳。シヨタ属性圈内じゃないか！ヤバイわたしにはそんな属性はありませんぜ！Help Me！
「前世の俺」！

「・・・」

うおー結果的にガン無視してるので心が痛い。いや、ハリーさんは何も悪くないよ。でもハリーさんには関わりたくない。でもそれがハリーさんを傷つけてしまうんだ。これが後々響いてメンタルが弱い子になったらどうしよう。よし！こうなったら平穩プランB！「ハリーさんと出会ってしまつて逃げられなくなつた場合」を發動するしかない。今から「フレイヤ・マツキノンは人付き合いが苦手な

引きこもり少女でハリー・ポッターのような有名人にあつてどうすればいいのか分からない。」ということにしよう。まあ大体あつてゐる。前世的な意味で。引きこもりとか。変に暗い系の綾波とか長門とか風にやつちゃうと後でまた話しかけられそうだ。彼女たちにはモブオーラが全くないからね。メインキャラ臭がプンプンするからね。

「あ、あの。わたし。ハリー・ポッターさんなんて有名人に話しかけられて・・・どうすればいいんでしょう！どうしたらいいんですか？！」

いかにもテンパった田舎少女的な声色で答える。毎日お風呂で鍛錬の腕輪をつけてアニソン熱唱していたおかげで、どんな声でも出し放題。完璧な演技です。綾波も長門も何でもござれ！声帯模写などたやすいわ！ハハハ！

「え？どうしたらって・・・」

ハリーさんは困惑している。逃げるなら今のうちだ。でもちよつと罪悪感があつたので、去り際にハリーさんの足に「エプスキー（癒えよ）」を掛けて「さよなら！」とかけていく。もうハリーさんとはこれつきりだ。もう絶対に関わるまい。ホグワーツであっても知らん振りをしてやる。わたしは勇者が魔王を倒すのを観客席から見ていればいいのだ。

そうしてわたしはトランクを引きずり、どこか割り込めそうなコンパートメントを探していく。おっ、ここが良いいんじゃね？4人がけのコンパートメントで3人しか居らず、上級生らしく1年生みたいにやけにテンションが高いわけでもない。

「すみません。ご一緒しても？」

コンコン。とドアを叩いた後、扉を開けて聞いてみる。

「ええ、どうぞ。」

3人組のうちの紅一点の髪の短い快活そうな先輩が、手招きしてくれたので、わたしは「どうも。」と言って一礼し、コンパートメントに入った。中の2人の男子の先輩が目配せしてわたしのトランクを棚に上げるのを手伝おうと立ち上がった。

「ああ、大丈夫です。軽量化をかけてあるんで。」

と、わたしはひょいとトランクケースを空の段ボール箱のように棚に載せる。いやーハリーさんがいないだけでめちゃくちゃ気が楽ですな！

「君、一年生・・・だよな？」

手伝おうと立ち上がった男子の先輩のうち背の高いブロンドの方が驚いたように尋ねて来た。背の低い黒髪のがっしりしたほうも同じ事を聞いたそうだ。雰囲気的にはスリザリんじゃないな。この人たち。

「はい。今年度入学することになりました。フレイヤです。入った際はハッフルパフです。よろしくお願いします。」

3人は一瞬あっけに取られていたが、すぐに気を取り直して、それぞれわたしに握手して来た。

「ティンキーよ。ティンキー・ロット。4年生のグリフィンドールよ。よろしく。」

そうだ。姐さんと呼ぼう。活発そうだし。

「モック・モーティス。レイブンクローだ。ティンキーと同じく4年生。よろしくなフレイヤちゃん。」

おお、背の高い金髪のこの人は一見チャラそうだが、めちゃくちゃ

賢そうだな。

で、最後の一人の背はそんなに高くはないが、けっこう肉付きのいい黒髪の実兄。

「ヴァン・デス・リーゲルだ。よろしく。こいつらと同じく4回生。ハッフルパフでビーターをやっている。うちに来るなら歓迎しよう。」

どうやらこの3人は幼馴染というやつで、ホグワーツで違う寮に入った後でも長期休暇のたびに3人で旅行に行くほど仲が良いらしい。わたしはまだ入学してないのに軽量化を使えるのは誰かに教えてもらったからか？とか聞かれたので、うちのご先祖様の絵から聞きました。って言うといった。一番最初に作ったオリジナル魔法だとはいわない。きつと似たようなのが既にあるだろう。

そうこうしている内に電池めがねが魔力切れで曇ってきた。わたしは懷に手を入れて目録から替えのめがねを城から呼び出す。どうやら、まだここは目録の作用圏内らしい。というより、はるか遠く、しかも最低でも二つの結界を跨がなければならない日本でも使えたのだから、よっぽどのがない限り大丈夫だろう。ホグワーツでもおそらく使えるに違いない。だってマッキノンだし。3人の先輩はわたしのめがねが急に曇り、わたしがめがねを交換したのを見て不思議な顔をしていたので、「ちよつとしたおまじないです。」って言うといった。「呪いの装備で常に魔力が吸い取られています。」なんていったら変に心配されそうだしな。

コンコン！と扉が叩かれたので何事かと見てみれば車内販売だった。車内販売は後ろの車両から来たようで、多分ハリーさんはカエルチヨコレートでダブルドアを引き当ててるだろう。とりあえず確認しておくかと、折り紙でできたバッタの式神をこっそり放った。この夏の間にわたしは式神を改良し、例えば折り紙で折った「虎」な

ら四本足で走り、「鷹」なら空を舞うというように、折り紙で折れる分だけの拡張性を持たせることに成功していた。そのうち「メタス」みたいに変形できるやつも作ってみたいね。って言うかプラモデルでも式神かできそうだな。あれ？AMFS??話?・・・なんだ。幻聴か。

ちなみにわたしのトランクケースには200体近い防水、防火、目くらまし、被捕獲時の自壊魔法を施した式神が収まっている。こいつらは学校に着き次第学校の影と言う影、隙間と言う隙間にばら撒くつもりだ。目録を介してこいつらの視界を借りれば、優秀な監視カメラになるし、瞬間移動のマーカーを兼ねているので夜のホグワーツを我が物顔で闊歩することも不可能ではない。ただ、いつまでも動き続けられるわけではないのでメンテナンスが必要だし、非戦闘用なのでわずかとはいえどわたしから魔力を吸い取っていくので負荷は増える。まあ、目録と月光に比べればたいしたことないが、われながら地道にいつぱい折ったものだと感じする。

「フレイヤちゃんはどうする？」

と、モックが聞いてくる。実際のところ最近ヌーが日本食にはまっ
てしまつて、ホグワーツでもぜひお召し上がりくださいと、完成した料理を目録経由で送ってくるので必要ないが、これってめちゃくちゃ目立つよな。まあ、おいしいからたまに注文するようにしよう。城の屋敷しもべもわたしがいないと死ぬほど暇ですって言ってたしな。とりあえず城の料理を食べるときはこのただのナプキンを家から料理が送られてくる魔法のナプキンと言うことにして、ごまかそう。

「あ、今日はあるので・・・そうですね。カエルチョコレートをひとつ。」

御代を受け取ったわたしは売り子のおばさんからカエルチョコレ

トを受け取る。もうこの体になってからずいぶん経ったとはいえ、三つ子の魂100まで。間食とか、おやつはあんまり食べない。

3人の先輩方は3人ともパーティーボツツの100味ビーンズを買い、買ったそばからラッパ飲み of 要領で一気に食べていた。食べ終わった3人のうち、モックとヴァンはひどい味のものに当たったのか青い顔をしていたが、ティンキーは「おおむねチョコ味だった。ちよつと鼻くそっぽかったけど。」といってケタケタ笑っていた。1年生のときから続けているらしい。わたしも外に出て売り子さんを追いかけて、100味ビーンズを買ってコンパートメントに戻って試してみた。

ザラザラもきゅもきゅ・・・うん。青。っぽいね。

そんなこんなで目録の式神の映像をちらちら確認したら、ハリーさんはロンとよろしくやっているようだった。蛙チョコレートの蛙には逃げられていたが、カードはダブルドアだった。っていうかあのチョコがえるって逃げ出したとしてもうまくやっていけるのかな？

「蛙チョコレートのチョコがえるって逃げるって聞いたんですけど、野生に出たとしてやっていけるんですかね？雨とかで溶けないんですか？っていうか蛙なのに水に入ったら溶けるってすごく悲しい存在ですよね。」

「へー面白いこと考えるね？フレイヤは。私は開け口だけ開けてすぐ口を持っていくから逃げられたことはないね。ヴァンは？」

と、ティンキーが言うつと、

「もぐもぐ。そんなこと、考えたこともなかったな。もしかもしや。モックはどう思うよ？」

と、やたらとでかいかぼちゃパイを詰め込むヴァンが、モックに話

を振る。

「さあね。溶けてしまっんじゃないか？でも世界のどこかにチョコレートでも暮らしていけそうなところがあるかもしれないね。」
モックは結構ロマンチスト。φっと。

「そうですね。きつとチョコレートの川が流れて、砂糖菓子の草が生えてるんでしょう。」

ワンカさんのチョコレート工場みたいだね。

その後、わたしは広げた目録をテーブル代わりに、送られてきた日本食を食べているのを3人が珍しがったので、多分イギリス人でも食べやすいんじゃないかと思って甘い高野豆腐を分けたり、ティンキーの忠告どおり、開け口を開けてすぐに口を近づけたら、喉にチョコがえるが飛び込んできてむせたり、カードの中身はやっぱりというかマーリンで、偉大だの何だの書いてあったがうさんくせーと思っていた。

何度かうちのコンパートメントの前をネビルっぽいだめな子オーラの子とか、ハーマイオニーっぽい気の強そうな子とか、フォイフォイと愉快的仲間たちが通り過ぎていったが、このコンパートメントは基本的に上級生の部屋なので、何事もなくホグワーツに着いた。

・・・ヴォルディとその他大勢がいなくなるだけで、この世界はずつと楽しいものになるんじゃないのか？万が一に備えている準備しているとはいえ、わたしはシナリオを守ると言いつつ、ただ傍観しているだけでいいのだろうか？

と、ふと思ったフレイヤだった。

「次は〱終点ん〱ホグワーツ前〱ホグワーツ前でえ〱ございます。この列車は〱後5分でえ〱駅に到着いたしま〱す。お手荷物の方は〱こちらでえ〱お届けいたしま〱す。本日は〱当列車を〱ご利用いただきい〱真にい〱ありがとうございました。〱」

本日3度目のめがねチェンジを済ませたわたしは、イギリスにも車掌弁つてあるんだなとしみじみ感じながら、3人の同乗者から各寮への勧誘を受けていた。

なるほど。一年生が上級生と同じコンパートメントに入りたがらない訳だ。キングズクロスではやたらとハイテンションだった一年生のコンパートメントは、ホグワーツが近付くにつれて期待に隠れていた不安が出て来たのか、静かになっていった。

その一方で上級生のコンパートメントに入ってしまった一年生は、ホグワーツに近付くにつれてテンションアップしてゆく先輩に、前世のサークルの勧誘か？と思うぐらい激しいお誘いを受けていた。

「フレイヤはハツフルパフに入りたいと言ってたけど、絶対グリフィンンドールの方が合ってると思うね！だって普通の子だったら先輩のいるコンパートメントなんて間違っても入らないよ。その勇氣はグリフィンンドール向きだね！」

と、姐さんが言うつと、

「いいや、フレイヤちゃんの子供っぽい一年生達に嫌気がさしてこっちに来たんだ。しかも！上級生の僕らの魔法の話にもついてこれるほど優秀だ。ハツフルパフなんて言わず、レイブンクローに来るべきだね！」

と、モックが返し、

「なあ、おまえたちいろいろ酷くないか？まあ、フレイヤ。君が決めることだが、ハツフルパフは良いところだ。」

とヴァンがしめた。

「ところで…」

と、わたしが言うと、三人はぴたりと寮自慢を止めて、わたしを見た。一瞬わたしはたじろいだ。日本で通訳してた時よりはましだと思い、続ける。

「御三方ともスリザリンには何もおっしゃいませんが、スリザリントってどうなんです？」

三人はぽかんとした顔をしているが、すぐに口々に愚痴を言い出した。

「滅べば良いのよあんな奴ら！」

「あれほど下品な連中なんて知らないね！」

「あの寮については弁護のしようがない。」

「はあ…」

スリザリン嫌われすぎワロタ。

一通り文句を言った後、三人は、私たちは組分けの内容は言えないんだけど、とりあえず、スリザリンだけは間違っても入りたくないと思っておいた方がいい。と、言ってきた。このアドバイスは組分けの儀式的な意味でほとんど答えを教えるようなもんだな。

駅に着いたので、三人に「またホグワーツで会いましょう。」と、分かれたわたしが外に出ると、空は既に暗くなっていた。森の中の普段は超過疎の駅より過疎ってるであろうホグワーツ前駅はおよそ1000人の学生で溢れ反っている。

わたしはとりあえずウサギの式を打ち、マーカーを放つと、一年生

を集めているモジャンボの所にまで歩いて行く。

それにしても、あの狭い車両の中では癒しのソファーは出せないし、この電池めがねが無かったら魔力切れで死んでたかもしれんな。

…恐ろしい。通学するのも命懸けとか洒落にならん。さつさと「空間拡張」呪文をマスターして何処でもソファーを出せるようにしなくては。放課後は先輩方にも手伝って貰ってさつさと宿題を終わらせよう。その後で必要の部屋なり森なりで練習やら鍛練やらすれば良い。

500メートル先からでも分かるようなでかいハグリッドのそばにはハリーさんがいた。数少ない知り合いに会ってホッとした顔をしている。子犬かお前は！

わたしはハグリッドの誘導に従い、モブオーラを纏った地味ーズとともに船に乗った。一学年で平均150人程、同学年で同じ寮でも40人近く居るのだ。ああ、スリザリンは20人か？まあ、原作を見る限りハリーさんの交遊は基本的にクイディツチ以外無い。きつとほぼ全ての学生がハリーを好奇の目で見たせいで、軽い人間不信になってるせいだと思う。不謹慎だが、最悪同じグリフィンドールになっても、パンダを見るような目で「ハリーポッター！」と叫べば向こうからかってに避けてくれるだろう。列車のなかでも似たようなことしたしな。

船はひとりでに進むので、湖にも魚の式を流しておこう。っていうかこの湖もう既にホグワーツの敷地だよな？まだ瞬間移動は使えそうだ。と思っていたその時だった。

バチッと手の上で起動させていた式神が船の上から跳ね飛ばされ、

自壊機能が発動してボツ！と燃えて消え去った。

幸い他の生徒はわたしの式神に気付いていないようだった。弾かれた式は、おそらく結界に弾かれたのだろう。良く目を懲らすと、湖の向こうの両岸に塀が巡らされていた。湖を挟んだ塀の両端から湖の上を横断して強力な結界が張ってあるようだった。

ということは…ホグワーツの敷地に入ったのだなとわたしは理解した。

確かに敷地の外に放った式神の気は遮断されて感じられない。もう瞬間移動では敷地からは出られないだろう。わたしは恐る恐る目録を開き、あらかじめ作っておいたメモをウォーディに転送した。

ウォーディの肩には折り紙の鷹の式神を置いて来たので、ウォーディの手元は目録を通して良く見える。メモが届けば分かるはずだ。ホグワーツで目録が使え無かったら癒しのソファアが使えない。そうなると最悪退学か・・・と思っていたが、それらの心配は全て杞憂に終わった。

ウォーディに送ったメモはきちんと届き、その様子は式神の目を通して目録に中継された。返信用に登録したメモもちゃんと更新され、鷹の式も城からきちんと呼び出せた。流石マツキノン！ホグワーツの結界程度、何ともないぜ。

『目録の全機能は正常に機能している。じゃあ行ってくるよ。』
と、ウォーディにメモを送る。

『行ってらっしゃいませお嬢様。』
とウォーディからの返信も届いた。

これでわたしは本当の意味でホグワーツに登校した。

他の3人は目録を見ながらニヤつくわたしに怪訝な視線を投げかけているがわたしは気にしない。

さて、心配事の半分は解決した。次は組分けだな。

船から降りた私たちはハグリッドに続いて歩いて行く。城の入口に着くとハグリッドがさっきわたし達のコンパートメントまで来たぽつちやり系の少年に蛙を渡していた。案外あの蛙、ネビルの後を付けるように移動してたから見つからなかったのかもな。蛙なのにスニークキングが得意とは…今度段ボールをあげよう。きっと喜んでくれるだろう。ネビルにトレバーを渡したハグリッドはでかい扉を三度叩いた。ぱつと開いた扉の向こうには。ッテンマイヤー先生が立っていた。

なんかごによごによ言っているがぶっちゃけどうでもいい。今日わたしがすべきことはハリーさんがグリフィンドールに入るように最後の念押しをして、わたしは組分け帽子にサンタに祈る子供のように全力でハッフルパフをプレゼントしてくれるように頼むだけだ。

わたしはキヨロキヨロ辺りを確認し、ハリーさんを探す。おお、グレンジャー女史も近くに居るではないか！

わたしは他の子等の隙を縫ってハリーさんのそばに寄って行く。おちょうど船でいっしょだった地味男がいるじゃないか！

「やあ、船でいっしょだったね。組分けってどうなるんだろうね。」

「そんなの分らないよ。ああ、スリザリンだったら嫌だなあ。」

こいつは絶対スリザリンにはならなさそうだ。

「そういえば、ハリー・ポッターは何処へ入るんだろうね？」

視界の端でハリーさんがこっちを振り向いてきた。チャンスだ。

「知ってる？ハリー・ポッターの『両親は』 凄い魔法使いで二人とも『グリフィンドール』だったらしいよ。」

ハリーさんわろすwww身を乗り出さなくても聞こえるでしょ。わざわざ聞こえるように言ってるんだから。ロンが押し退けられて苦しそうだ。そしてハーマイオニー。君も聞き耳を立てているのは分かっているぞ。さっきからピクリともしてないじゃないか。丸分かりだ。

「それにハリー・ポッターのお父さんは『変身術の名人』だったんだって。ホグワーツの『変身術の先生』は『グリフィンドールの出』が多いらしいよ。」

あつハーマイオニーも落ちたな・・・主人公組ちよろいわ。せいぜいわたしの平穩のためにヴォルさんと ちちくりあってくれ。

目の前の地味男君はあまりのプレッシャーで自分の世界に入ってしまったし、ハリーさんがわたしをちらちら見ながら両親のことを聞きたそうにして居るので、あんまり覚えられない内に退散しよう。そう決めたわたしはゴーストどもに気を取られている生徒の間をすりりと抜けて主人公組から離れた。

さて、組分けはどうなるのやら...

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

時系列を合わせるのが大変です。書くときには原作が隣にないと怖くてかけない。外ではあんなでかい本持ち歩けないし。かといって家にもそう長い間居るわけでもない。

応援してくださっている方々本当にありがとうございます。感想から自分の疲れ具合とかを客観的に見れるのでいろんな意味で助かっています。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

ついに組み分け。

フレイヤ・マッキノンは賢者の石を知らない？

ゴーストパレードも終盤に差し掛かり、一々何かを言って行く半透明の一言居士どもがいい加減うつとうしくなってきたので、「そんなに構ってほしいなら貴様等全員除霊してやろうか！」と思っていたら、マッキーが帰って来た。

マクゴナガルせんせーが言うには苗字の順に一行に並ばんといかんらしい。わたし達は周囲の子等とファミリーネームを確認しながら列を作っていくが・・・いや、いくらなんでもこの部屋は狭すぎる。あーあもう真っ先に何食わぬ顔をして先頭に立っている彼女がうらやましい。アボットさんか？きつと今まで出席番号が1以外なことには無かったんだろな。もう！勇者「ああああ」とか「あああい」が居れば良いのに。そしたらわたし達出席番号中堅組の苦勞も分かるだろう。ついでに言うと、アルファベット最後のザビニ君とウィーズリーは蛇の尻尾のようにのたうちまわる最後尾で右往左往しています。那無。

そういう訳でわたしの前は原作ではこの時しか出なかったMacから始まるマクなんとか君。わたしはMakkinonだから・・・わたしの後ろはMaīちゃん、別名フォイフォイでした。

まさかこの位置になるとは・・・わたしをここにほうり込んだ奴も知らなかったに違いない。きつと原作を読み返してビビってるだろう。まあ、そんなかんけーなんですよ。問題は後ろの阿呆。

あーぶっ殺してー「わたしの後ろに立つな！」って殴り掛かる5秒前。何なのこいつ「スリザリン教」か？聖地：秘密の部屋 聖遺物：スリザリンのロケット 教皇：ヴォルデイ 共通語：蛇語 のスリ

ザリン教か？スリザリン万歳ってあまりにもうつとうしかったので、
「そういえば、代々スリザリンの純血家系なのにグリフィンドール
に入れられた人がいたな・・・」
と呟くと静かになった。ブラックが自分からグリフィンドールに行
ったとは言わない。物は言いようだ。

周りが静かになった所で、マッキーがわたし達を連れて大広間へと
歩いて行く。なんだろ？ホグワーツを歩いてても、あんまり感動し
ないな・・・ああ、家の城に慣れてるからか。我が城は調度品こそ
少ないが、どの品も高級で造りも洗練されてて、ある意味神殿的な
美しさがある。が、一方でホグワーツはどうだ？前を通る度に謎の
原理で話し掛けてくる下品な絵に、訳の分からん彫像、魔法使いに
は明らかに必要のない鎧、統一感に欠ける造り・・・魔法世界に通
信教育は無いのか？ああ、お家帰りたい。

まあ、あれだ。帽子を被った瞬間に「スリザリン！」とか言われた
ら問答無用で組分け帽子を二つに増やそう。きつと効率が良くなる
し、会食の時間が増えて皆喜ぶはずだ。来年からシャンプーハット
派と尖んがりコーン派の派閥争いが起きそうだが。

いきなりの不意打ちが無かったら、組分け帽子を説得しよう。無理
なら頭の中で一秒間に12回「ハッフルパフ」と唱えて洗脳してや
る。わたしの次はフォイヘ2なので洗脳も解けるだろう。後ろの奴
の脳内は100%純血主義でいっばいだし、成分的にも偽装なしに
血統書付きの純血だからな。

食堂に入ったら結構な歓声が迎えてくれた。スリザリン：レイブン
クロー：ハッフルパフ：グリフィンドールⅡ2：3：4：3ぐらい
か？なんか高圧的なスリザリンに対してハッフルパフはアットホー

ムでいい感じです。左手邪気眼のわたしでもうまくやれそうだ。グリフィンドールとスリザリンが両方とも食堂の反対側に眼飛ばしてる。君等はまだ少し自重しろ。

でもやっぱり1000人は少ないわ。前世が、狭い中に人がひしめく日本だったせいか、この程度では喧騒とは呼べんな。まあ、そんなこんなで組分けが始まり、アボットさんはハッフルパフになりました。

「うらやましい」とは言わない。「これからよろしく」だ。組分けの列はどんどん進む。「ハーミーは無事グリフィンドールか」と安心していたわたしは、ふと左から呼び止められた。

「やあ、フレイヤちゃん！帽子にはレイブンクローを頼むんだよ！」

「モック先輩でしたか。そんなこと言って良いんですか？」

列に並ぶわたしの左にはイケメンのモックさんがいた。

「うーん。ギリギリセーフかな？ハハハ！」

「おい、モック！余計なことを吹き込むな。」

振り向くとわたしを挟んでモック先輩の反対側にはヴァン先輩が座っている。その向こうにはティンキー先輩がグリフィンドールの席から身を乗り出して手を振っていたので、わたしも笑って振り返す。

「それにしても余裕だなフレイヤ？」

「何です？急に？」

「なんかやつちまったのか？」

「全く緊張してないのはフレイヤだけだぞ？お前の後ろの子も大概だが、フレイヤは別格だ。」

心外な・・・わたしはチキンハートなのにと、後ろのフォイフォイ

を見たが、さっきのシリウスの話のせいか、不遜な顔がやや引き攣り、蒼くなっていた。ちよつとやりすぎたか？上級生とはいえ、ハッフルパフ生に話し掛けられて全くマグロだとは・・・相当キているな。

列の前後をよくみると、やはり皆、多かれ少なかれそわそわしている。ネビルとか大丈夫か？あれはそわそわというよりタップダンスだと思ふんだが・・・そんな中で、普段通りだれているわたしは、マスコットのダンス会で直立不動を貫いた。アラ並に目立っていた。あ、ネビルもグリフィンドールだ。

動揺してないわたしの姿はよっぽど傲慢不遜に見えたのか、他の3つの寮だけではなく、スリザリン寮からも期待混じりの熱い視線が送られている。やーめーてーくーれー！。

「やっちまったな…もう遅いが。」

「マツキノン・フレイヤ！」

そうする内に、Macなんとかさんが何処に決まったのか聞き逃してしまったわたしは、彼から組分け帽子を受け取った。

「はー…頑張る。」

つかつかとわたしは安っぽい椅子まで歩いて行き、くるくると帽子を回して座った。

椅子に座ったわたしは、全生徒を見渡す形になったが、やけに静かだ。お前らさっきまでペチャクチャくっちゃべってたじゃん！シーンとして何も聞こえない。1000の生徒の2000の目がわたし

に注がれる。なんでこーなるかな！

あーもー知らん！

わたしは組分け帽子を乱暴に掴み、ガバツと一気に被った。

頭の中に声が聞こえる。

「スリ…」

「黙れ。」

「…しかしだね君。」

「ハッフルパフだ。」

「話を聞きたまえ。」

「わたしがハッフルパフ生だ。」

「…」

「オール！ハイル！ハッフルパーフ！！」

「聞く気が無いなら勝手に話すが、

『ハッフルパフ！』

おぬしはマツキノン家の最後の

『ハッフルパフ！』

生き残りなのだろう？

『ハッフルパフ！』

一族の再興の為には、

『ハッフルパフ！』

偉大にならなければならない。

『ハッフルパフ！』

そのためにはスリザリンに入るのが、

ハツフルパフ！

一番良いのだぞ？

ハツフルパフ！

「ええい！スリザリンと言つぞ！」

「その前に引き裂く。」

ぐっと、帽子に力を含めるわたし。

[illegible]

「分かった…話をしよう。ハツフルパフォームはやめてくれ…」

「ハツフルパフ。」

「Yes-アネン。」

「ハッフルパフ。」

⌋
⋮
⌋

「おぬしは、由緒正しいマツキノ家の最後の生き残りなのだろう？」

「ハツフルパフ。」

「マツキノンは概ねグリフィンドールが多かったが、スリザリнымも少なくは無い。」

「ハッフルパフ？」

「マツキノン家がスリザリン生を出す時は決まってマツキノン家が転機にある時だった。」

「ハツフルパウー。」

「そしておぬしの代はこれまでに無い転機を迎えているのだろう?」
「ハッフルパフ。」

「・・・スリザリンとは言わぬから...その受け答えはやめてくれ。
頼む。」

「・・・そう。」

「マツキノン家のためにはあの寮が一番なのだが...おぬしはハッフルパフと言うが、おぬしは『苦勞を苦勞と思わない忍耐』を備えてはおらん。困難に際し、おぬしは人を盾にしても『手段を選ばず苦難を避けよう』するだろう。そのような狡猾なおぬしを純粹で愚直な物が集うハッフルパフに入れることは出来ん。」

「失礼な!わたしほど純粹無垢な娘はいませんよ。」

「...もしそうだったとしても、純粹悪だろう。表面上は悲しんで見せても、自分の為には平気で他人を利用するおぬしほどスリザリン向きな子はおらんよ。」

「ハッフルパフ!」

「・・・すまん...それにおぬしは例え周囲が犠牲になろうとも、勝てるまでは勝負を挑まんだろうから、弱きを助ける『騎士道精神』を求めるグリフィンドールは合わんだろう。同様に『貪欲なまでの知識欲』もない。レイブンクローもおぬしを求め無いだろう。」

「酷い言いようですね。わたしはいかなる困難にも特攻してきましたし、魔法や式神の知識も貪欲に吸収してきたし、鍛練も怠ったことは無いですよ。全部あるじゃないですか!」

「だがしかし、それら全てはおぬし自身のため、おぬしだけの平穩のためだ。外の世界に出ているつもりのようなが、おぬしは『本質的に引きこもり』と変わらん。」

「なん・・・だと・・・」

そんな馬鹿な・・・わたしが社会的引きこもりだと？そんな・・・馬鹿な・・・有り得ない・・・

「悪いことは言わん。スリザリンにきなさい。」

「・・・」

何故そんなことを言われなければならないんだ・・・わたしの力じやヴォルさんには勝てない。ならば、下手にハリーに関わったら・・・わたしが、死ぬかも・・・いや、詭弁か。わたしはそんなことが怖いんじゃない。わたしのせいでハリーさんたちの運命が変わり、彼らが傷つくのがどうしようもなく怖いんだ。

「・・・ない。」

なんで弱気になってるかな・・・ここはヒッパ―って押し通すところじゃないか！閉じた瞼が変に熱い。

「どうしたというんだね？」

「わたしだって、好き好んで、人を利用して、訳じゃない！」「ためだ・・・止まんない。」

「わだしだって・・・！運命とか気にせず、皆と仲良くしたい！だからホントは城に引きこもって居るのが一番いいのに、ここまで出てきた！だけど・・・」

わたしは忌々しい水滴を拭う。

「やっぱり無理なんだ。・・・わたしは臆病だ。そうだよ・・・引きこもりだ。運命を乗り越えようと、自分の命を懸けるなんてことは出来ない。怖いんだ・・・わたしは脅威を前にして自分だけ助かりたいがために、きつと他人を売ってしまう。そういう自分が！だから・・・わたしはハッフルパフに行きたいんだ。わたしは仲間を見捨てたくない。なら、わたしの仲間は脅威とは無縁の運命にいる人でないとダメなんだ！理由は言えないが、わたしにはハッフルパフしかないんだ・・・」

「ふむ・・・しかし、失う可能性ばかりを見ていても仕方があるまい？スリザリンならば・・・」

「失う可能性がある時点で私は立ち止まってしまっただ・・・とても怖くて踏み出せない。」

「何をそこまで思い詰めているのかは知らないが・・・

いや・・・良いだろう。ハッフルパフは行き場の無い者をも受け入れる・・・」

頭がスーッと軽くなり、組み分け帽子が寮を決めたのが分かる。

「ハッフルパフ！」

やった・・・

「はは・・・やった。」

静まり反った食堂の中、わたしは立ち上がり、ふらふらとフォイフオイに帽子を渡すと、またいつかのようにぶっ倒れた。電池めがねを変えるの忘れてたからか？いや、レンズは曇ってるけど魔力はま

大丈夫。でも・・・疲れたなあ・・・

わたしのからだがついつと力強く持ち上げられた。ああ、わたしってやっぱり小さかったんだな。

「大丈夫か？酷い顔だ。」

「・・・なんだ。ヴァン先輩じゃないですか。大丈夫ですよ。天使のお迎えだったら大丈夫じゃないですけど、ヴァン先輩なら大丈夫です。ちよつとめがねが曇って躓いただけです。」

と、わたしはめがねを取り替えた。新しいめがねを通して見える世界は・・・綺麗だった。これからわたしの平穏が始まるのだ！

蜜柑

フレイヤの平穏はこれからだ！今までご愛読ありがとうございました！

なんてな！不謹慎でしたね。せっかく読んでいただいてるのに申し訳ない。ヴォルさんがぬつ殺されるまでたぶん続けますのでご安心ください。しばらくは大丈夫です・・・ホントすいません。ちょっと疲れてます。ごめんなさい。もうこんな舐めた真似はしません。すいませんでした。では、続きをどうぞ。あと、読んでいただいてありがとうございます。

わたしのからだぐいつと力強く持ち上げられた。ああ、わたしつてやっぱり小さかったんだな。

「大丈夫か？酷い顔だ。」

「・・・なんだ。ヴァン先輩じゃないですか。大丈夫ですよ。天使のお迎えだったら大丈夫じゃないですけど、ヴァン先輩なら大丈夫です。ちよつとめがねが曇って蹟いただけです。」

と、わたしはめがねを取り替えた。新しいめがねを通して見える世界は・・・綺麗だった。これからわたしの平穏が始まるのだ！

「どういう理屈か知らないが本当に大丈夫か？」

「ぶつちゃけめちやくちゃ疲れました。晩餐会とかどうでもいいの

で休みたいです。テーブルの端までおぶってくれませんか？」

ヴァン先輩は驚いた顔をしたが、直ぐに仕方が無いと、後ろを向いてぽんぽんと自分の背を叩いた。

「おじゃまします。」

わたしが背に乗るとぐつとヴァン先輩が立ち上がった。視界の端ではマルフォイが小躍りしながらスリザリンのテーブルへ駆けて行った。食堂は元のお祭り騒ぎに戻っていた。

「ずいぶん長かった。」「えっ？」

「普通組み分けは10秒もかからない。あのマクゴナガル先生まで取り乱していた。」

「はあ……」

「俺達もなにかあったんじゃないかって不安だったんだ。まあ、何にせよ大したことが無さそうでよかった。」

「……ご心配おかけしてすみませんでした。」

「ああ。」

また何処かのテーブルで歓声が上がる。でも「ここ」だけは静かだった。

「ハツフルパフへようこそ。フレイヤ。」

「よろしく願います。ヴァン先輩。」

ヴァン先輩の背中中は頼りになるな！。温かくて、安心できる。そう
だ兄貴と呼ぼう！ヴァン兄貴！いい響きだ。

そうこうしているうちにハリーさんはグリフィンドールだったらしい。どえらい歓声が聞こえる。わたしもうれしくなってきた。もう安心だヒャッハー！ずいぶん気が楽になった私は、ヴァン兄貴に話を聞いてもらう。

「帽子にスリザリンに行けって言われたときはどうしようかと思いました。」

「・・・そうか。」

「でもスリザリンはいやだって言ったんです。」

「俺もそういった。」

「マジですか？」

「マジだ。」

「意外です。」

「そうでもないよ。」

「もしかして先輩純血ってたりするんですか？」

「そうだな。まあ、そうだ。俺はそんなの主張しても腹はふくれんし無駄だと思うがな。」

「じゃあどうしてハッフルパフに？」

「黄色が好きだからだ。」

「へ？」

「俺は黄色が好きだ。だからハッフルパフだ。」

「良く分からないんですけど。」

「黄色はいい。綺麗だし、ふわふわでうまいかぼちゃパイも黄色だ。」

「そんな動機でスリザリンを蹴ったんですか？」

「ああ、ちなみに、モックは青、ティンキーは赤が好きだった。後で聞いたら俺たちは3人ともスリザリンを勧められたらしい。結局モックはレイブンクローで、ティンキーはグリフィンドールだ。」

「・・・スリザリンエ。」

「まあ、そういうことだ。」

それでいいのか？創始者たちよ・・・

先輩におぶさつて端っこまで来たわたしは、ちよつちいい恰好をしようとして、ちよつと見ててくださいねと適当に杖を振って「サモナーレ ソファアーエ」と適当な呪文を呟いて、目録から癒しのソファアーを呼び出した。

「おお！これは！」

「特別です。先輩も座ってください。」

なんか一番端っこでお誕生日席みたいになっているが、気にしない。魔力切れのめがねを充電しつつ、わたしも普段そんなに食べない脂っこい物を手当たり次第に食べていった。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

DSのフレイヤが組み分け帽子に虐められてしまいました。彼女が元氣ないと、なんか書いてる私も調子でない。次話、談話室へ。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（前書き）

なんかテンションあがってきた。

10/20おかしくなっていたただけでした。ご指摘いただきありがとうございます。

フレイヤ・マッキノンは賢者の石を知らない？

昼間に目録と月光には魔力電池から魔力を供給しているが、逆に言う
と夜の間は魔力電池に魔力を注がなければならない。つまり、電
池めがねの有り無しに関わらずわたしの一日の魔力消費量は変わら
ない。

しかし、わたしはマッキノン家当主とも言えどもまだまだ11歳の小
娘。目録と月光に見合う魔力はまだない。では、どうするのか？答
えは単純。

「食べて補う。」

わたしはダンブルドア先生が使っていた魔法『手洗いうがい呪文』
を使った。さあ、いただきます。

「すみません次のお皿お願いします。」

「あ、ああ。」

わたしは、平らげ、空になった目の前の皿を持ち上げ、わたしの左
側に積み上げる。次の皿は、倒れたわたしを心配して地味に後ろを
付いて来ていた6年生の監督生さんが持ってきてくれた。次はソー
セージか・・・よろしい！ならば完食だ！

「キャプテン！俺も頼む！」

わたしが積み上げた皿の向こうにはわたしが作ったのではない別の
皿の山。

「ヴァン先輩。もぐもぐ。へつに、むしゃむしゃ、無理しなくても、ごつくん。良いんですよ？ふきふき。太りますよ？もしかもしゃ・・」

口の周りに色とりどりの食べかすを付けたヴァン先輩がハムの塊を手にとつちを見た。

「普段は、がつがつ、こんなに、わしゃわしゃ、調子が良いことは、ごくつ。無いんだが、あむあむ、ああ、内の家系は、くちやくちや、食っても太らない。ふきふき、大丈夫だ。」

へー。もしかしてヴァン先輩も食い物を魔力に変えられるのか？もしかしたら魔法使いには普通のことなのかも知れないな。変換効率とかは別にして。マグル世界でも変換効率のいい人は太りやすいけど、ヴァン先輩は燃費の悪いスポーツカータイプだからいくら食っても燃やしてしまうんだろうな。

「もぐもぐ、このソファーには、もしかもしゃ、回復効果があるんです。ごつくん。消化とかも良くなってるんじゃ、ごくごく。無いんですか？あ、次お願いします。」

わたしはもはや給仕と化した地味な監督生さんに次の皿をお願いした。

「なるほど、もっしやもっしや、良いソファーだ。ごくん。それにしても、良く食べるな、ごくごく。フレイヤ？あ、キャプテン、俺も頼む。」

「わたしの胃袋は宇宙です。」

この際だ。予備のめがねも充電しよう。出し惜しみは無しだ。ざらざらと予備のめがねを目録から取り出す。それを見たヴァン先輩の目の色が変わる。

「今からが本気というわけか？」

「ええ、出し惜しみは無しです。ちょうど『前菜』はすみましたし。」

「ふっ・・・言葉は不要か。」

基本的に鉄面皮のヴァン先輩が心底嬉しそうに笑う。

「いざ！尋常に！」

「勝負！」

ヴァン先輩のペースが急に上がる。この人、女の子のわたしに遠慮してまだペースを押さえてたのか！なんか食物から変換された魔力が体に収まらずほとばしっている。ヴァン先輩にも魔力電池を上げても良いかもしれない。形はもちろん車のバッテリーだ。

「やりますね。ですが！」

わたしもヴァン先輩を追い抜くほどのペースで食べはじめる。普段目録と月光の二つにはあまり魔力を吸われないように押さえているんだが、この際そんなリミッターはいらん！

わたし達の前に積み上げられた皿はどんどん下げられ、いつの間にか出来たカウント係に数えられる。空中には枚数を示す数字が並んでいた。

どうやらハッフルパフに新たに追加される皿では足りないようで、

左右のグリフィンドールとレイブンクローからも皿が運ばれて来る。

「はい！」と渡された次の皿を水を飲みながら受け取った。

「フレイヤさん！ヴァンなんかのしちやいな！」

ああ、ティンキー姐さんか。

「元よりそのつもりです。もぐもぐ。」

「おい！ヴァン！フレイヤちゃんに負けたら『マッドスタマック狂乱胃袋』の名が廃るぞ！」

ヴァン先輩の方にモック先輩が皿を運んでいる。

「名などどうでもいい。ただ勝つだけだ。」

空中に描かれる数字が同時に50を超える。周りも人だかりが出来ている。

「おいおい、狂乱胃袋のやつ、いつもより遥かに強くなって無いか？」

「あれがやつの本来の全力だろう。それよりもあの化け物に付いて行くだけじゃなく、互角の戦いをしているあの奇抜な格好の彼女。一体何もんだ？」

「ご存知無いんですか？」

「「？」」

「彼女こそ『クレイジーヴァルキリー戦狂姫』！フレイヤちゃんです！」

「なんだか穏やかじゃない二つ名だな・・・」

「ある筋からの情報によると、彼女はフローリッシュ&ブロッツの

店主を馬車馬にしてダイアゴン横町を駆け回り、魔法省に於いては魔法大臣を顎で使い、東の地、日本に出向いては日本の一流の魔法使い20人を叩きのめし、グリンゴッツでは金貨5億の買い物をしたとか・・・」

「おいおい、そんな有り得ねーよ。最初のフローリッシュの店主でも有り得ねーのに、金貨5億とか聞いたことねーよ。俺あの店主に殴られて聖マングに運ばれたこともあるんだぜ？」

「しかし、火の無いところに煙は立たないと言いますし、
「確かにあの戦いっぷり、まさに・・・」

「『クレイジーヴァルキリー
戦狂姫』！！！！」

「うおー！なんか恥ずかしいあだ名付けられてるー！！！！『選ばれし者』よりはましだけどさ・・・ましのかな？いや、きつとました。そくに違いない。」

わたし達二人のカウントがちょうど100を刻んだ時、ふつとテールの上から全ての皿が消えた。前を見るとダンブルドア校長が立ち上がっている。

「時間切れのようですね。ゼーゼー」

「そのようだな。ウップ！」

「わたしは・・・まだまだ余裕ですが・・・ね。」
「俺も・・・だ。」

「いいフードファイトでした。」

「ああ。またやろう。」

ガシツと熱い握手を交わすわたしとヴァン先輩。オーディエンスも拍手したり、歓声を上げている。

こうして「第一次マッドクレイジー戦役」は引き分けに終わった。

他の生徒は元気にホグワーツ校歌を歌っているが、今にもナイアガラしそうなわたし達は上を向きながら、酸欠の金魚のようにぱくぱくするしかなかった。

まあ、双子のウィーズリーがかなり時間を稼いでくれたお陰でかなり楽になったが、わたしの目録とめがねは魔力を吸って新品みたいにツヤツヤになっていたし、隣のヴァン先輩から漏れる魔力はスパーサイヤ人や仙水さんみたいに金色になってほとばしっていた。

まだ胃がもたれるわたしは、監督生さんに掴まってハッフルパフの寮に向かっていた。ヴァン先輩は「すまんねセド。」と言ってセドリックさんに支えてもらってた。

余命3年9ヶ月ぐらいの3年生のセドリックさんは去年シーカーに抜擢されたらしい。まだこの時はキャプテンでも監督生でも無いんだな。今のキャプテンはわたしが掴まっている地味な監督生の、確か名前はデイルさんだったか？らしい。昔は断トツの最弱だったハッフルパフだが、彼の尽力でそれなりに戦えるようになってきたらしい。

そんなこんなで食堂の脇のぱつと見壁の陰になってて分からない廊下にまで来た。廊下の端には大きな風景画が一枚。丘になっている原っぱにちょこんと家が一件、遠くには峡谷があり、晴れた空に爽やかな風が吹き抜け、草原が楽しげにざわめいている。

「この絵は南にあったハッフルパフの家を描いたものだと言われているんだ。」

と、監督生のディールさんが絵の中に手を突っ込み、絵の中の家の扉を開けた。

今思うと64のマリオっぱいな。1000年前にまだ発売すらされてないマリオ64と同じような仕組みを実現するとは……

絵の中の扉は本物の扉になって開き、談話室への道が通じた。

ディールさんがこちらを振り向き、大袈裟に手を開いた。

「諸君！ようこそハッフルパフへ！歓迎しよう……盛大にね！」

ハッフルパフの談話室は暖かく抱擁してくれるかのような安心感があった。置いてあるソファーも癒しのソファーに劣らない心地良さ！

いやーよかった！スリザリンだったらこの拘置所だよ！って感じの地下牢に放り込まれるところだった。そんな豚箱に嬉々として自分から入りに行くフォイフォイ等の気がしれん。もしスリザリンに行ったら今頃確実に発狂してマル公に筋肉バスターしてたね。

柔らかい光に包まれた談話室には寝室へ続く丸い木の扉と丸い窓があり、大きな窓からは中庭が見える。中庭は、入口の絵にあったような草原で、所々に敷かれた煉瓦が円形に庭を切り取っている。蓋をするようにガラスが嵌められているあの煉瓦は、地下にある寝室の天窓らしい。ここから見える中庭へは、こここの窓と寝室の天窓からしか行けない、ハッフルパフ生限定の憩いの場で、ハッフルパフの出身地にあった草原を再現しているらしい。

しかも、夜の今では寢室の天窓から漏れる光が、中庭を幻想的に照らしている。ぱねえ。きつとグリフィンドールのハリーさん等でもここに来れば、

「うわっ！ 私達の生活水準低すぎ！」

と、言うに違いない。もしわたしがスリザリンに行った後この寮を知ったら確実に心臓発作を起こす自信があるわ。

素晴らしいよハツフルパフ！流石ですヘルガさん！今この瞬間から貴女はわたしの尊敬する人物、断トツのNo.1です。面倒見良すぎじゃないですか！

しかし・・・何と言う格差社会www方や豚箱、方や高級リゾート。ホグワーツ！恐ろしい所やで！

食い入るように窓に顔を押し付けていたことに気付いたわたしは、満足して窓から顔を離れた。今日はいろいろあったが、何にせよ、よかったと談話室の方を眺める。

大体の一年生はまだ興奮覚めやらぬようで残っていたし、食べ過ぎでソファアの上でへたっているヴァン先輩はディールキャプテンとセドリツクさんに介抱して貰っている。

わたしも癒しのソファアを呼び出し、お腹がこなれるまで談話室に居ることにした。寢室には一つずつ風呂まであるそうなのでせっかく覚えた『身体洗浄』は不要だな。『手洗いうがい』と『歯磨き』ぐらいか・・・まあ、歯磨きはもう掛けたから口は綺麗だ。

と思っていたと、談話室の扉が開いた。何事かと、談話室の面々が顔を向ける。談話室の反対側に居るヴァン先輩も身を起こして目を丸くしている。

「ここがあなたの寮ですよ。もう迷子にならないように気をつけなさい。」

この声はスプラウト先生だろうか？

「は、はい。すみませんでした。」

一年生の女の子だろうか？扉のせいでここからは良く見えないが、スプラウト先生に礼をしているようだ。

スプラウト先生は去って行ったようで、その子が扉を閉めた。邪魔だった扉が閉まったので、わたしにもその娘が見える。

ガッツ！とわたしは立ち上がった。というか気付いたら立ち上がっていた。

その娘は音に驚いてわたしの方を見る。わたしと彼女は見つめ合う形になった。

ふわふわの金の髪に真珠のような血色の良い肌。やや背は低いが、その体は出る所は出て、引つ込むべき所は引つ込んでいる。やや垂れ目の中から覗く瞳は淡い青色で、幼さの残るその整った顔立ちに柔らかな印象を与えていた。何と言うかこう、全てがマシユマロのようにふわっふわだ。

そう。ふわふわ天使。

わたしは何も考えられない。操られるようにして天使の前まで進んだ。

「わたしはフレイヤ。フレイヤ・マッキノン。一年生だ。お名前を伺っても？」

わたしが近付いて来たのに驚いたのか、マシユマロ天使様（仮）は戸惑っているがその一挙一動をわたしは脳皮質に永久に刻み込んで行く。

「えっ…えと、フィーネです。フィーネ・ミシェル・アンジェリカ。い…一年生です。よ、よろしく。」

と言って俯くフィーネ。ああ、声も姿も名前も…正に天使！！もうわたしの胸は君でいっぱいだ。だのにわたしの頭は今までのどんな時より冷静だった。今ならアンサーターカーをも凌駕する最高にして究極の答えを示してくれる。

その答えは天啓のように「降って」来た。

「フィーネか…良い名だ。」

「良い名だなんて…」
と顔を上げた彼女。

わたしはそつと、彼女の手を取る。

「君を愛しています。ずっととは言わない。けど君の許す限り側に居させてほしい。」

「え…」

だめか、だめだろうな…

「こ、こちらこそよろしくお願いします。」

いけちゃったあああああああああああああ！！

数分前まであれだけ賑やかだった談話室は嘘のように静まり反っている。

ああ、わたしがここへ来たのはこの時の為だったのだ。前世のすべてを賭けてもまだ足りないほど素晴らしい一瞬だった。わたしはこれから何からも彼女を守る盾となろう。わたしは彼女を害する全てを切り裂く剣となろう。彼女に相応しい騎士が現れるまでは。それまでは……。

わたしはフィーネと熱い抱擁を交わし、上気して温かくなっているフィーネを抱えたまま、わたしはディール先輩を見る。ヴァン先輩は右手を差し出した状態で石化している。セドリックさんはこおってしまつてうごかない。

「ディール先輩は監督生でしたね。」

バチンとバネ仕掛けのようにディール先輩は動き出した。

「あ、ああ……」

「一年生女子の寝室はどの扉ですか？」

「真ん中……左だ。」

「どうも。」

一礼したわたしはソファアを回収し、抱きかかえたフィーネを気遣ってゆっくり歩いて行った。わたしはモーセのように人垣を抜け、寝室への真円形の扉を開ける。

「それでは皆様、お休みなさいませ。」
と、わたしは扉を閉じた。

寝室までは地下道になっているが、全くそう感じさせないほど温かった。地下道から寝室の入口にはまた丸い扉が嵌め込んであり、扉を開けるとそこは驚くほど広かった。

寝室はまだ誰もいなかったが既に消灯していて、天窓からは星の光が入ってきていた。

フィーネの荷物はどれか分からないが、わたしのは一番端にあった。

「これは都合がいい。」

フィーネに受け入れられた時から「とても」調子が良い。わたしは杖をひと振りし、トランクに収まっている200体の式神を解放した。杖を天窓に向けると、この寮を担当する以外の式が去って行く。わたしは離れていても式と意志を交わすことが出来るようになっていた。

今ならなにもかもうまく行く。わたしはわたしに宛がわれた空間に『空間拡張』を掛けることに初めて成功し、わたしとフィーネを守るために今までよりも遥かに強力な鬼を呼び出しても、わたしは驚かなかった。

「ホントに良かったのかい？フィーネ？」

「フィ、フィーネで良ければ／＼／」

わたしの前の天使が天に帰らないようにわたしはしっかりと抱きしめ

た。

「これからのことは明日はなそう。お休み。フィーネ。」

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**（後書き）

ちよつとリアルの方がヤバくなって来てるのに、書いてしまうという罠。妄想が加速して止まらない！

つていうかなんじゃこれ！なんでこうなった！誰かわたしの中の電波受信用アンテナをへし折ってくれ！

10/20 さすがにどうかしていたので修正しました。すいませんでした。

幕間・夢会話再び・（前書き）

フレイヤはダークサイドに行ってしまいました。

幕間・夢会話再び・

「・・・ようこそ夢の中、「俺の部屋」へ「今生のわたし」。」

「お招き頂き感謝するよ「前世の俺」。」

「突然だが判決を言い渡す。被告「今生のわたし」、罪状、二つの人格「前世の俺」と「今生のわたし」の共有財産である「フレイヤ・マツキノ」の私物化及び、変態行為による回復不可能なまでの名誉毀損——判決、死刑」

「異義有り！確かに「フレイヤ・マツキノ」は両人格「前世の俺」及び「今生のわたし」の共有財産ではあるが、その運用については「今生のわたし」に一任されており、私物化には当たらない。名誉毀損に於いては証拠が不十分である。というよりある程度周囲に引かれた方がシナリオ上いいのではないか？」

「クツ・・・異義を認める。まあ、それは置いてだな、「前世の俺」は悲しい！「今生のわたし」は女の子である「フレイヤ」を受け入れて女の子らしく生きていこうって決めたんじゃないのか？なんでフィーネたんを嫁にしたん？レズになってしまったん？」

「「前世の俺」よ、おまえは3つ勘違いをしている。」

「・・・というと？」

「一つ。わたしは愛の前には性別がどうかなど問題では無いことに気付いただけだ。二つ。フィーネをわたしの嫁にしたんじゃない。わたしがフィーネの騎士になろうときめたのだ。三つ。わたしが女の子で愛するのはフィーネだけだ。彼女に相応しいパートナーが見つければわたしも漢と結婚しよう。」

「・・・何だろ・・・すごく漢らしいけど根本的な所で間違ってる気が・・・」

「わたしは至って冷静だよ。」

「ヴァン先輩とかいい雰囲気だったじゃん！おんぶしてもらったじゃん！」

「あの人は「強敵」と書いて「とも」と呼ぶべき人物だよ。恋愛対象ではないね。それに、おんぶていどで惚れるものか！馬鹿者め！これだから貴様は三十路近くまで童。のままうだつの上がない生活をしていたのだ！」

「うぐ！反論できん！でも最近の「今生のわたし」は明らかにおかしいです。ダークサイドか？ダークサイドなんか？あかん！「今生のわたし」、それ以上行ったらあかん！マッキノンの血か？マッキノンの血がそうさせるんか？」

「おかしくとも何ともないよ。目が覚めただけさ。」

「向こう側に行ってしまった人はみんなそういうんだよ！悪いことは言わないから帰っておいで。」

「何を言っているんだ？フィーネが幸せであればそれでいいじゃないか？」

「だめだこいつ・・・早く何とかしないと、原作ストーリーがやばいかも知れん。って、ヴォルさんとかハリーさんとかどうするのさ？」

「そんなモブキャラ知らん！」

「うわ！言っちゃったよ！もう我慢ならん！「今生のわたし」が、原作ブレイクする前に「前世の俺」が修正してやる！」

「フィーネの写真（ボソツ）」

「まあ、そこまで彼女の為を思ってるんだったらしかたがないな。うん。一緒にあの娘を守っていこうな！」

「ああ、よろしく頼む。それより「前世の俺」よ、「今生のわたし」に隠れて何をこそこそ魔力を貯めているんだ？」

「げ！ばれてたん？」

「バレバレだ。修業の時より魔力の減りが激しい。何に使うつもりだ？」

「内緒。今のところはある目的のためだけに、他のことにも使えんことも無いしな。まあ、今晚はこれぐらいで。お写真楽しみに待ってます。」

「ああ。これまでの「素敵」写真が、子供のお遊びに見えるような素晴らしいものをお届けしよう。」

「フヒヒ。まあ、期待せずに待ってます。あ、これまでの「素敵」写真もよろしく。」

幕間・夢会話再び・（後書き）

今日は2本上げたので、金曜日は休んでいいんですよ？

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？（前書き）**

前話を書いているときには、あやしいひかりと、メダパニと、コンフュを食らっていました。すいませんでした。読者の方々には助けてもらいつぱなしです。不甲斐ない。頼りつぱなしにならない程度にはしっかりしたいです。もしかしたらまだ月読を食らってるかもしれないが・・・

過去にさかのぼった勇者によって魔王は倒されフィーネのファーストは守られましたが、魔王はまたいずれ復活しそうです。復活しないように気を付けたいです。

あと、今は日付上金曜日らしいですよ。もう限界です。また頭のネジが飛びそうです電波がびんびんで発電できそうです。おやすみなさい。

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？**

その日の朝、神秘部に新たな予言が封印された。

9/1 1991 ? to ? by Sybilla Patricia Trelawney

『今宵、穴熊の皮をかぶった招かれざる者が巣穴で最も無垢な者を攫って行くだろう。だがまだ間に合う。引き離せ。隠れたる蛇がその首をもたげる前に。無垢な者が穢される前に。』

ああ、これが俗に言う「朝チュン」か・・・

わたしは昨日わたしの愛を受け入れてくれた天使を起こさないようにソファアを出た。彼女の匂いがする。それだけで胸がいっぱいだ。満たされている。「ご飯五杯はいける」ってやつだ。

わたしはトランクから自分の衣服を取り出し、『永久完全複製』した彼女の衣服を大事に仕舞った。わたしがすると服を着ていると、ソファアで彼女が目を擦っていた。

「おはよう。起こしちゃった？」

「うみゅ？んー？ここは？」

フィーネはまだ寝ぼけているな。

「ここはホグワーツ魔法魔術学校、ハッフルパフ寮、一年生女子寝室、わたしの割り当てられた場所にあるわたしのソファアさ。」

「え？あつ！すいません！」

と、フィーネは裸のまま去ろうとするのを、わたしは押し止める。

「大丈夫だ。君をここに連れ込んだのはこのわたしだ。少し話を聞いてくれないかい？それとも寝間着で出歩くのが趣味かい？」

「あ、え？！あれ？フィーネの服は？」

うむ。戸惑う顔もかわゆい。

「とりあえず、服を渡そう。一応魔法で綺麗にしてあるから大丈夫だ。」

と、わたしはフィーネにコピーではないオリジナルの服を渡す。

「昨日は勝手に脱がせて悪かった。」

「い、いえ。すいません。」

と、フィーネは謝り、掛け布団の中でごそごそと着替え始めた。

「とりあえず昨日の事をまず謝らせてくれ。いきなり変なことを言っ
てすまなかった。昨日は疲れていたのでしょうか？ソファ―に寝か
せてあげたときにすぐ寝てしまったし。でも、何度でも言うが、わ
たしは本気だ。君を愛してしまった。君がいいと言う間だけ一緒に
居させてくれないかな？」

「え？ええ？」

フィーネはよく分っていないようだな。

「昨日の事はどこまで覚えている？」

「ええと・・・」

と、フィーネはしばらく考え込むようにして俯く。

「列車から降りて、大きな人について行って、怖い先生のゆうこと
を聞いて、透明な人たちが入ってきて、広いところ、人がいっぱい
いるところに行つて・・・帽子をかぶつてハツフル？」

「ハツフルパフだ。」

わたしの声を聞いて、思い出したようにフィーネが顔を上げる。

「そうです。ハツフルパひゅ、ハツフルパフに入つて、ご飯を食べ
て、周りの人とお話して、寮に行くよつて言うときに誰かにつかま
れて、転んじやつて、動けなくて、誰かがフィーネを抑えて笑つて
て、その人がやつとどいてくれたと思つたらもう誰もいなくて・・・
もうどうしようつて言うときに、絵の中の騎士さんに泣くなつて言
われて、騎士さんが先生を呼んできてくれるからつて。そうして待
つてたら騎士さんが先生を呼んできてくれて、そうです！ハツフル
パフの寮まで連れて来てもらいました！」

やった！思い出せたと手を叩く彼女にわたしは問う。

「扉を開けたその後は？ 寮に入った後は覚えてるかい？」

「え？・・・ええと、みんながわたしの方を見てて、そして、フレイ？ちゃん？」

「フレイヤ・マツキノンだ。今君の前に立っている。昨日の夜、自己紹介をした後、君の都合も考えずに告白した張本人だよ。フィーネ・ミシェル・アンジェリカ。わたしの天使。」

「ええ？・・・えっと、フレイヤちゃん？と・・・ノノノ」
みるみるうちに赤くなっていくフィーネ。わたしはそっとフィーネの手をとる。

「変かもしれない。気持ち悪いかもしれないが、一目君を見たとき、わたしは君を愛してしまっただ。どうか、君が許すなら、君にふさわしい人が現れるまで側に居させてくれないか？フィーネ。」

「・・・」

赤くなったフィーネがわたしを見つめる。薄い蒼い瞳はどこまでも晴れやかで、引き込まれそうだ。

「だめかい？ 償いになることはなんでもしよう。記憶を消してほし
いならわたしは忘却術を学ぼう。君の言うことはなんでも聞く。」

「・・・フィーネ。」

「ん？」

「君じゃなくてフィーネって呼んでください。フレイヤ・・・ちゃん。」

「そうか。フィーネ。もう一度聞くが、側に居てもいいかい？」

わたしを見ていたフィーネは俯き、目を閉じている。

「好きだと言ってきてくれて、嬉しかったです。」

「・・・え？」

はつとしたフィーネが、違う違うと首を振りながら、弁解する。

「あ、いえ、女の子だからとかじゃなくって！あの・・・フィーネを好きだと言ってくれる人なんて・・・居なかったから。」

わたしはフィーネの手をぎゅっとつかんで答える。

「何度でも言うが、わたしはフィーネを愛している。フィーネにふさわしい人が現れるまで、側に居させてくれないか？」

ぱっと、顔を上げたフィーネはわたしの瞳を見つめる。

「ふさわしい人なんて要りません！ずっと、ずっとフィーネの側に居てください！もう、一人にしないで・・・」

フィーネの瞳に涙がにじむ。

「わたしもそうしたいが、わたしは女だ。フィーネはフィーネが好きになった、フィーネを守るほど強い漢と一緒にあってほしい。フィーネの幸せな顔を見るのが、わたしの願いだ。まあ、そいつがふさわしいかどうかはわたしが見極めるし、それまではわたしはずっとフィーネの側にいる。フィーネを守る騎士になりたいんだ。いいかい？」

わたしの前の天使様がうなづいた。

「フィーネの騎士・・・うん。フィーネはフレイヤちゃんをフィーネの騎士に認定します！」

「喜んで拝命いたします。わたしの天使様。」

にこやかに笑うフィーネにわたしは深々と騎士の礼をする。

「でも、なぜこうもあつさり受け入れてくれるんだい？」

「だって、フィーネは・・・フィーネはいらない子だから。」

「わたしはフィーネを愛しているよ。」

「フィーネを愛してくれた人なんて居ませんでした。フィーネは・・・」

フィーネ・ミシェル・アンジェリカの両親はマグルだった。だが、彼女は魔法使いとして生まれてきた。赤ん坊の彼女が起こすさまざまな出来事に、両親は悪霊が憑いているのだと信じ、物心もつく前の彼女を修道院に「預けた」。そして二度と迎えには来なかった。その当時の彼女は両親から継ぐはずだった家名もなく、その名すら

なかった。彼女はその修道院にちなんでアンジェリカの姓をもらい、フィーネと名乗った。しかし、その修道院でも彼女は彼女が起こす「祟り」のせいで、疎まれ、排斥されていた。あるとき、修道院に彼女を引き取りたいという男が現れた。修道院はもろ手を挙げて彼女を送り出したが、男は彼女を連れ帰ったとたん彼女に暴力を振るい始めた。彼女は神に祈りつつも、このままこの男の慰み者になるのだとあきらめていた。だが、奇跡は起こった。縛られ、抵抗できない彼女に男が手をかけようとしたとき、男は「消えた」。彼女は何が起こったのか分らなかったが、きつと神様が自分を哀れんで、助けてくれたのだと思った。彼女は修道院に戻り、この奇跡を伝え、自分は「悪霊憑き」ではないと、神に見放されては居なかったと皆に言いたかった。だが、修道院は帰ってきた彼女を受け入れなかった。彼女を連れて行った男は100キロ離れた北の海で水死体となって発見されていたからだ。修道院は彼女を「悪魔」と罵り、行き場を失った彼女は施設を転々とした。このまま誰にも愛されずに腐っていくのだ。彼女はそう思っていた。

「でも、でもあの時、先生が、ダンブルドア先生が来てくれて、フィーネはよい魔女だ。きつと誰もが尊敬する魔女になれるって。言ってくれたんです。ホグワーツに来ないかって、お金は心配しなくていいからって。」

ダンブルドア先生は今まで何人のこうした救われない子供たちを見てきたのだろうか？魔法使いではないせいで、彼が見捨てなければならなかった子供達のどれほどの涙を目にしてきたのだろうか？ああ、グリーンゴツで5億ガリオンなんて使うんじゃないかって。困っているのはわたしのいた孤児院だけではないということになぜ気づかなかったんだ？

「・・・そうか。わたしも孤児院育ちだ。うちの施設はいい大人ばかりだったが、分らなくはない。辛かったね。フィーネ。」
抱きしめるわたしの胸の中で、フィーネは泣いていた。今まで泣け

なかった分まで泣いていた。

その後、フィーネはわたしと寝泊りしたいと言ってくれたので、彼女の荷物を移すことにした。

「荷物を取りに行かなければいけないな。フィーネ。」

「え、あ、フィーネのベッドは隣です！」

なぜか、彼女のベッドは図ったようにわたしの隣だった。ダンブルドア先生め。

「でもなぜ隣だと？何もないじゃないか？」

「こ、これです。」

と、フィーネはベッドの隣に置いてあるぼろぼろの麻袋を指差した。

「この袋は・・・？」

「フィーネの荷物です。」

彼女はその麻袋を抱えて笑う。わたしは彼女の荷物に愕然とした。麻袋には着替え一着と授業に必要な最低限の品物しか入っていないかった。

「お金は貸してくれるけど、後で返さないといけないし、鍋とか教科書は借りていいって言われたので・・・」

「そうか・・・」

食堂に行ったらアルキメデスに手紙を持たせて、肉だるま書店に教科書を持ってこさせよう。服のほうは、「今」採寸させるか。彼にとつては朝飯前だろう。

「来い、ウォーディ。」

バチン！と音を立ててウォーディが、現れる。

フィーネは「きゃっ！」と、飛び退いたので、わたしは回り込んで支えた。

「うちの屋敷しもべのウォーディだ。まあ、妖精の一種だと思ってくれたらいいよ。フィーネ。」

「しもべ妖精ウォーディただいま参上しました。お嬢様。ところ

で、そのお方は？」

「この子はわたしの天使だよ。フィーネと言うんだ。彼女にふさわしい漢が現れるまで、わたしが守ることになった。フィーネ。ウォーディだ。」

フィーネは恐る恐るウォーディを見つめる。

「妖精・・・さん？」

「左様にございます。フィーネ様。」

「よ、よろしく願います。」

と、手を差し伸べるフィーネに、ウォーディは「やはり、お嬢様のお選りになった方ですね。」と、フィーネの手を取り、仰々しく「勿体無い事でございます。」と、言った。

「まあ、それは置いといて、さっそくフィーネの採寸をしてくださいね？城にあるもう使わない服を彼女向けに仕立て直してほしいんだ。」

「かしこまりました。」

と、ウォーディが、どこからともなくメジャーを取り出し、無駄のない動作ですばやく採寸してゆく。フィーネがあれよあれよと言う間に採寸は終わってしまった。

「お選りする衣服はいかにいたしますか？」

と、採寸が終わったウォーディがわたしに聞いてくる。フィーネはなんだかよく分らないと言う顔をして、へたり込んでいる。

「とりあえず制服は急いでやってくれ。それ以外は出来次第でいい後、グリーンゴッツに彼女の口座を作りたい。この前ファッジに貰った金貨と、わたしの講座から1000枚この子の口座に移してくれ。奨学金は解除して、そこから返済してくれ。委任状は後で渡す。また呼ぶから取りに来てくれ。」

「畏まりました。」

バチン！

と、音を立ててウォーディは去っていった。わたしはフィーネに

手を回して立たせた。

「驚いたかい？」

「う、うん。よく分らなかった。」

フィーネは、まだ信じられないと言う顔で、ウォーディが、採寸していた巻尺の後をなぞっていく。

「孤児院に居たときのわたしも、初めてウォーディを呼び出した時は驚いたよ。まあ、見た目どりの優秀な執事だ。困ったことがあったらウォーディを呼びばいい。フィーネの呼びかけには応える様に言っておくよ。」

「う、うん。」

ウォーディに仕事を頼んだわたしは、荷物番に鬼を残し、いくつか指示をしてからフィーネを連れて食堂に向かう。フィーネという宝物を得たわたしは、終始上機嫌だった。フィーネと手をつないだわたしは、同じ寝室の女の子たちに挨拶をした。反応は様々だった。目をそらすもの、フィーネを羨ましそうに見るもの、割り切って挨拶してくれるもの。談話室も似たようなものだった。談話室から見える中庭は朝露に輝いていた。

寮を出たわたしたちは真っ直ぐに食堂に向かっていた。行き先が変わる階段など問題はない。もはや目録を見なくてもある程度の情報は式神を通して得られる。わたしの式神ネットワークは大雑把だが、城のほぼ全域をカバーしていた。追々追加していくことで最後は禁じられた森もカバーしたいな。と思っていたところに、近くの式神から警報を感じ取ったわたしは、すかさず目録を開ける。警報を送ってきたのは112番。その視界を目録に映し出すと、ピーブズがゴミ箱を抱えてこちらへ一直線に向かっていた。この位置は・・・上か！

「プロテゴ！」

わたしを中心にかさのように広がる半透明の障壁が張られ、ごみの

雨からわたしとわたしが引き寄せているフィーネを守る。

「ウウウウウウウウ！やるねえ！一年生のおちびちゃんの癖に！」

わたしはおちていったごみをくるくると集め、高温の炎で焼き尽くした。落ちたごみはしもべ妖精が片付けなければならない。彼らが隷属を美徳とするとはいえ、余計な仕事は増やしたくない。上を見上げるとピーブズはあつかんべーをしながら挑発的に動いていた。「喧嘩を売る相手は考えることだな。」

わたしは二枚の札を取り出し、一枚をピーブズに投げ、もう一枚を手元に置いた。

「きーかなーいよーん。」

と、札はピーブズをすり抜けるが、

「果たしてそうかな？」

札から金棒を持った鬼が現れ、ガン！ときつい音を立ててピーブズを打ち落とした。霊体とはいえあれは痛いはずだ。日本で何度食らったことか・・・落ちてきたピーブズは下に待機させていたもう一体の鬼に羽交い絞めにさせる。

「いててて。なんだようなんでおいらに触れられるんだ？」

「ひとつ聞きたい。昨日の晩、フィーネの邪魔をしたのはお前か？」
ピーブズはわたしから目を逸らし、フィーネを見る。

「オオオウ！そのはきのーの子じゃなーいか！今日はえーんえーんって泣かないのかーい？」

「ひっ！フレイヤちゃん。こ、この声・・・この人です。昨日フィーネを押さえたのは。」

フィーネはわたしの服の裾を掴んで震えている。今のゴミの雨でも許せんのに、昨日のフィーネを泣かせた原因までこいつだったとは・・・おのれ、ピーブズ！万死に値する！

「・・・ピーブズ、おしおきの時間だ。」

わたしはフィーネを後ろに下がらせ、黙って鬼によりつよくピーブ

ズを締め付けさせる。

「つてて！そんなことをしたつてむだーだよーだ！」

「そうかい？これじゃあどうかな？」

と、わたしはピーブズの額に札を貼付け、印を切った。

「なっ？！なーんも見えなーい？何したの？何したの？」

喚いて暴れるピーブズをよそに、わたしはさらに印を切り、ピーブズの口を塞ぐ。

「原初の時、混沌は宇宙を統べる名君だったという。彼の下で働く者は皆、彼を尊敬していた。ある時、彼等は混沌を讃えようと酒宴を開いた。だが混沌には目も鼻も耳も口も無く、何も食わずにただ笑っていた。彼の部下はそんな彼を憐れんで、彼が寝静まった時、目と鼻と耳と口を日頃の感謝の印として与えたいと思った。そこで彼等は混沌の顔に7つの穴を開けた。目覚めた彼が喜ぶと信じて。しかし、顔に7つの穴を開けられた混沌は苦しみ出し、その穴からは混沌の全てが抜け出し始めた。中身を失っていく恐怖に混沌は怒り狂った。混沌から抜け出たモノは形を変えて世界を作り、なにもかもを失い狂った混沌の抜け殻は今も中身を捜して世界をさ迷っているという・・・では今、その彼に開いた穴を塞ぎ、中にわたしと同じフィーネへの愛を詰めればどうなるのかな？永久に満たされない苦しみから解放されるのだろうか？わたしはこんなにも幸せだからきつとそうに違いない！さあ、行こう。素晴らしい理想郷へ！」

ピーブズの耳を塞ぎ、鼻フックの刑に処した時、ピーブズが嬉しそうにむーむー唸り始めた。フィーネの愛を知り、原初のように賢くなったようなので、わたしは耳と口を解放してやることにした。

口で息をするピーブズが息苦しさに喘いでいる。

「ぷはーぷはーっません。」

「ああ？聞こえませんかあ？」

右手で鼻フックしたままわたしは左手でピーブズの頬を締めつける。

「もう、その娘には、何もしません！」

「愛が足らんなあ・・・悪いことをした時には謝罪と賠償を行うのが礼儀だとは思わないか？」

わたしは左手にこめる力を強めた。

「すいません！すいません！もうしません！なんでもします！」

「そうか！それはよかった。」

わはしはピーズを解放してやり、二体の鬼をフィーネの傍らへ下からせた。

「ぶはーぶはー！」

解放されたピーズは床で転がっている。

「では、ピーズにもフィーネを守って貰いたい。フィーネを害する者には思い付く限りの方法で制裁を与え、フィーネを守ってくれたまえ。良いな！」

「は！承知致しました！」

とピーズがわたしとフィーネに一礼すると、逃げるように去って行った。

「これでフィーネを愛する聖騎士は二人になった！フィーネを虐める者はわたし達がことごとく蹴散らしてあげるからね！」

と、わたしはフィーネの手を取ろうとするが、踏み止まった。

「おっと！危うく汚い手で触れる所だった。あぶないあぶない。『ハンドウォッシュ』！これで大丈夫。」

数分ぶりに握るフィーネの手は柔らかく温かった。

「ありがとう／＼フレイヤちゃん。でもちよつとやり過ぎかも・・・」

わたし達の周りには人だかりが出来ていた。

「あれが戦狂姫・・・あのピーズをも掀伏せるとは・・・」とか

「何と言うヤンデレ」とか

「百合展開キマシタワ」とか

聞こえるが気にならない。気になるはずが無い。フィーネが喜んでくれればそれでいい。これこそがわたしの求めていた平穏！

わたしは二体の鬼を待機状態にしてフィーネの鞆とマントに貼付けた。フィーネと手を繋いだままわたしは食堂へ行き、アルキメデスに手紙を持たせた後、二人で朝食をとった。ああ！なんて素晴らしい！

「フィーネには自分の口座を持って欲しいんだ。学校から奨学金を借りるのはつらいだろう？」

「でもフレイヤちゃん？フィーネは魔法のお金は持って無いよ？」
「はむはむとベーコンエッグを食べるフィーネ。卵を食べたのは久しぶりらしい。何と言う！今度わたしの城で好きなだけ日本食を食べさせてあげようそうしよう。」

「天使の側に居られるんだお金なんてわたしがいくらでも出してあげるよ。」

「でも、そんなの悪いよ・・・」

フィーネの口の端に食べかすが付いている。わたしは思わず身を乗り出し、フィーネの唇を舐めそうになるのを押さえ、懐へハンカチを呼び出して拭いてあげた。

「ふむ。では、こうしよう。フィーネにはお仕事をしてもらう。わたしはそのお給料を先払いする。」

「お仕事？」

フィーネは首を傾げる。ああかわいい。今の撮ったか式神？バッチリ？目くらましはまだ効いているな？よし、そのまま続け給え。

「そう。何、簡単な事だ。フィーネはわたしが頼んだことをする。嫌なら断っても良い。そう言うことだ。」

「フレイヤちゃんのお願いならフィーネなんでも聞くよ？お金なんて要らない。」

ああ、フィーネは天使だよ。

「フィーネは優しいね。でも、これはケジメなんだ。友情をお金に換えているようで嫌かもしれないが、フィーネの自由を奪ったわた

しのせめてもの償いだ。これぐらいはさせてくれ。」

と、わたしは頭を下げた。フィーネは頭を下げるわたしを見てわたしとす。隠れている式神がシャッターを切って連写している。後でじっくり堪能しよう。

「わ、わかったから頭なんて下げないで。フィーネは怒ってないよ！」

「そうか！ありがとう！フィーネは天使だよ。」

そうしてわたし達はグリーンゴッツに口座を作るために必要な委任状をしたため、授業に向かった。

フィーネが隣にいただけでわたしはどれだけつまらない授業も最高に楽しく感じられた。わたしは死者、意識不明者多数の魔法史の授業でさえ目が冴えていたので、机に突っ伏して眠るフィーネの寝顔を楽しんだ。その後の変身術の授業では、マツチを針に変えようと必死に魔法を掛けているフィーネの姿にテンションが上がってしまった。相棒を軽く振っただけなのに、マツチを剣山にしてしまった。わたしは呆れるマクゴナガル先生から「やり過ぎは良くないが、初めてにしてはこれはこれでよく出来ていると」1点貰ったりした。月光を振っていたらどうなってたんだ？

一日の授業が終わった後、夕食を食べたのでわたしとフィーネは談話室に戻って来た。

「魔法の授業って初めてだったけど、楽しかったあ！他の子達もフィーネとあんまり変わらないみたいでよかった。みんなフレイヤちゃんみたいいろいろ出来るんだって思ってたから、フィーネだけ出来ないんだって不安だったの。」

「わたしは入学前からあれやこれややってたからね。さて、さつさと宿題を終わらせよう。ということだ！」

と、わたしはソファで寝ているヴァン先輩に声をかけた。

「勉強を手伝って下さい。ヴァン先輩。」

ヴァン先輩はわたしに声をかけられて酷く動揺している。わたしがヴァン先輩に近付くと、上級生はおるか同じ授業を受けている同級生までザアッと音を立てて一気に去って行った。心外だ。まるでわたしが誰彼構わず手を出していく変態みたいじゃないか！わたしはフィーネだけの聖騎士だと言っのに！

「あ、ああフ、フレイヤか？どうした？」

「一緒に熱いフードファイトを繰り広げた仲だと言っのに酷いですね。」

「ま、まあ昨日の今日だからな？俺もなんだか良く分からないんだ。」

先輩はわたしと目を合わせたくないのか、俯いた。

「わたしはフィーネを愛しています。が恋愛感情とかでは無いですよ。彼女に相応しいパートナーが現れるまで側に居させて貰うだけです。」

「そ、そうか・・・それは良かった。」

ヴァン先輩はまだ戸惑っているようだが、顔を上げてやや安心したようにわたしを見た。

「あ、あのフィーネです。よろしく。」

いつの間にかわたしの隣に来ていたフィーネがヴァン先輩に握手を求めた。ヴァン先輩一瞬気まずそうな顔をしてわたしを見たが、わたしがうなづく。握手を反した。

「・・・ヴ、ヴァン・デス・リーゲルです。よ、よろしく。」

握手は一瞬だったがまあ、良いか。フィーネはキョトンとしているが。

「ところでヴァン先輩。勉強を手伝ってくれませんか？」

「あ、ああ。いや、俺はあんまりそういうのは得意じゃないし・・・そういうのはセドとか・・・そうだ。セド！お前そういうのは得意だったよな！」

ヴァン先輩がわたしを避けて集まっている人ばかりを見ると、人垣は一瞬で二つに割れ、セドリックさんの姿が現れた。セドリックさ

んは周りをキヨロキヨロ見ているが誰も目を合わそうとはしない。セドリックさんは案外ぼっちだったんだな可哀相に。そうこうしている内に、痺れを切らしたヴァン先輩にセドリックさんが連行されてきた。

「勉強ならセドが得意だ。セド、俺からも頼む。フレイヤ達に勉強を教えてやってくれ。」

「え、ええ。構いませんが・・・」

いきなり連れて来られたセドリックさんは戸惑っているが、セドリックさんが承諾したとたん、ヴァン先輩は「そうか！頼んだ！」と言つてがっしりした体なのに風のように去って行つた。人垣の向この談話室の端っこで息を大きく吐いて深呼吸している。

「よろしく願います。」と、わたしとフィーネはセドリックさんに礼をした。セドリックさんは困つたように頭を掻いていたが、懇切丁寧に教えてくれた。フィーネは授業はさっぱりだったと言っていたが、セドリックさんはフィーネが解るまで忍耐強く教えてくれた。流石生粋のハツフルパフ生。この程度は苦勞の内に入らないらしい。

どうやらハツフルパフには「トロールでもわかる！ハツフルパフ流勉強術」という勉強法があり、セドリックさんは当代の伝承者らしい。宿題どころか予習まで済ませたわたし達はセドリックさんに御礼を言つた。

「丁寧に教えて頂いてありがとうございます。お時間を頂いてすいません。また、頼めますか？」

「ああ、こちらこそ。教えがいがあったし、基礎の復習にもなるしね。フィーネちゃんもよく頑張つたね。」

セドリックさんが爽やかに笑う。

「は、はい！ありがとうございます。」

周りからは「セドリックまでもが戦狂姫の毒牙に・・・」とか言つて戦慄しているがどうでもいい。

「あ、そうだ。魔法薬の授業はまだ何日か先だったね？魔法薬の授業の前にはさっき言ってたところをもう一回復習しておいた方がいい。魔法薬は危険な授業だから仕方が無いが、あの先生はちよつと熱心だからね。」

スネイプ先生のいびりを「熱心」の一言で片付けてしまふセドリックさん。貴方はハッフルパフ生の極みです。惜しい人を亡くしたもんだ・・・あ、まだ生きてるや。

「セドリック先輩に教えて貰って良かったね！フレイヤちゃん。フイーネでも全部わかったよ！」

フイーネは興奮している。今まで勉強が出来たことがなくて、今回ほどよく解ったことはなかったらしい。

「確かにセドリックさんはすごい。わたしもハッフルパフに来て良かったよ。」

これは本気を出せばハーマイオニーも越えられるかもしれないな。

「ところでフレイヤちゃん、フイーネはどこに向かっているのでしょうか？」

と、首を傾げるフイーネ。

あの後、談話室を出たわたし達は式神ネットワークを使って巡回する先生とフィルチ、猫のミセスノリスを避けて8階の廊下に向かっている。消灯時間はまだとは言え、この時間に寮を出るのは校則違反だ。だが、監督生のデイル先輩はわたしとフイーネが寮を抜け出しても何も言わなかった。そんなに腫れ物を扱うようにしなくても思ったが、フイーネがかわいいので別に大したことでは無い。起きている者のいない魔法史の授業中に大量の式神を量産していたので、こと城に関しては監視網に穴はほとんど無い。ただ、量産には月光を使ったので、どうやって折ったのか全く理解不能な奇抜な

作品ばかり出来ていたが。

今、先生等以外で式神ネットワークに反応があるのは地下牢付近のフォイatoi達に、自分達の寮付近をうろつくのが数人。なぜかグリフィンドール塔と反対側にいるネビル、隠し通路から出て来て我が物顔で歩くウィーズリー兄弟ぐらか。ウィーズリー兄弟はその内わたしが先生を避けていることに気付くだろう。悔しいが式神ネットワークより忍びの地図の方が学校を歩く分には優れている。まあ、その点こっちは目録を使って遠隔地の映像が得られるし、ちょっとした工作ぐらいなら式神を操作出来るので、応用性に関してはこっちの方に軍配が上がるか。とにかく彼等とは相互干渉としよう。

「ねえ、フレイヤちゃんつてば！フィーネ達はどこに行くの？」

「あ、ああ済まない。ちよつと式神の操作に気を取られてね。大丈夫。必要の部屋へ行くだけよ。」

「必要の部屋？」

「そう。必要の部屋。欲しい備品を揃えてくれたり、隠したいものの置場になってくれる素敵な部屋さ。」

「へー！すごい！そんな部屋もあるんだ！でも、何しにいくの？」

フィーネは驚いて口許に手を当てている。

「フィーネは今日の変身術で魔法が上手く行かなくて悔しがっていただろう？その練習とわたしの訓練かな。」

最近月光が不満げに振動しているし、気の鍛練は欠かせないからな。

「かーめーはーめー・・・波あー！！！」

ドアオオ！と音を立てて必要の部屋に現れた厚さ50センチの鉄板が溶解し、消し飛んだ。「ふう」と、一息ついたわたしは汗を拭っ

て『空気清浄』を掛ける。シュウシュウと音を立てて立ち上つていた金属蒸気が消え去った。フィーネはぽかんと口を開けている。

「ああ、驚かせちゃった？」

フィーネはコクコクと首を振る。

「かめはめ波。わたしの初めての技さ。」

「さっきのすつごくよく切れるのは？」

フィーネが目を輝かせて聞いてくる。

「気円斬だね。二つ目の技さ。」

「フィーネも、フィーネも出来るかな！？」

「また教えてあげるよ。それよりも、針の変身上手く行っただね。おめでとう。」

「う、うん！ありがとう。フレイヤちゃんのお陰だね。」

えへへと笑うフィーネにわたしも笑い返す。部屋には月光の『只の失神呪文』に蜂の巣にされたり、気円斬でバラバラになったり、鬼に粉碎された数枚の鉄板が破壊された跡がある一方、燃えないように湿気らせたマツチから変えられた針が山になっていた。

あの日から必要の部屋に通い初めて数日。フィーネの魔法の腕は確実に上がっていた。

「盾の呪文はどうだい？フィーネ？」

「見てて！」

とトテトテと鉄球を手にした鬼の前に走っていくフィーネ。あつ、こけた。今日は白か・・・知っているとはいえ、こう改めて見ると感慨深いな。わたしが式神に確認を取ると、8体とも「ばつちり」と返してくれた。わたし達がはじめてこの部屋を訪れてから、わたしはフィーネに最低限の自衛を覚えてもらおうと、「盾の呪文」を教えている。初めはやわらかいボールを式神に投げさせていたが、フィーネが上達するにつれ、式神ではなく鬼に投げさせるようになっていた。そして今日の盾の呪文の練習でも、わたしは当たっても大丈夫なボールにしようと言ったのだが、必要の部屋を開ける時に

こっそり頼んでいたのか、フィーネは鉄球を手にしていた。鬼に鉄球を持たせるフィーネにわたしはまだ早いと諭したのだが、フィーネは大丈夫と頑として譲らなかった。仕方がないので、いざとなったらわたしが助けに入るし、そうになったら、わたしがいいというまでもう勝手な真似はしないようにと約束までした。愛に飢えていたフィーネの心は幼いまま硬直していたが、ここ数日でフィーネは精神的にも驚くほど成長している。自分で立ち上がったフィーネはこつちを向いた。

「準備オツケーだよ。フレイヤちゃん！」

わたしは鬼に命じて全力で鉄球を投げさせた。

同時にフィーネは『プロテゴ!』と凜とした声で唱える。

鉄球は不可視の壁にぶつかり、ゴン!という鈍い音を立てて停止し、落下した。

「驚いた・・・すごいよフィーネ！」

駆け寄るわたしにフィーネは満面の笑みを浮かべる。

「がんばりました。えへへ。」

わたしはフィーネの頭を撫でるが、フィーネは下を向いて不満そうだ。

「どうかしたの? フィーネ?’

「ご褒美。」

「え?’

顔を上げたフィーネがその空色の瞳でわたしを見つめた。その頬は蒼い月明かりに不釣り合いなほど朱い。

「ご褒美にだっこして／＼／」

フレイヤ・マッキノン**は賢者の石を知らない？（後書き）**

長期連載のあの人気小説が終わってしまいました。わたしはあの世界に旅立ちたいです。

おかしいことを書いているときは感想呼んでる時に心が痛むということに気付きました。これからもどんどん手厳しいご指摘をくださるとうれしいです。あ、私はMでもドMでもそれ以上でも紳士でもありません。ちょっと完璧主義の入ってる引きこもり気味の星人です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3521x/>

フレイヤ・マッキノンと平穏な日々

2011年10月21日01時10分発行